北辰會雜誌

第五拾五號

第四高等學校北辰會

明治四十二年六月二十七日發行

（非賣品）

北辰會雜誌第五拾五號目次

本欄

○趣味之飜譯……岩城準太郎
○曲さもみぢ……鈴木青花
○校風問題に對する吾人の見解…富田愛次郎
○わかれ……たけを
○偉大なる超然主義……河上駒水
○鐵道馬事……みつを
○フランチェスカ姫……青花生
○鈿生足下に與ふ（再生存競爭と人道）…野口保一郎
○荒野（ツルゲネフ）下……渡邊庸三
○能登廻り……伊多嘉儀
○嗚呼平田君……八波則吉

時評

○追慕……其月
○哀慕集（憶平田先生）……
○四高和歌會詠草……
○雪割草……
○葵模樣……
○四高俳句會句鈔……

部報

○校風問題……
○狂夫言……成川武男

雜報

○演說部＝嗚呼平田先生……

○叙任辭令○吁平田德次郎先生○平田先生追悼會○從軍記○第十三回春季水上運動會○寄贈雜誌

北辰會雜誌第五十五號

本欄

趣味之飜譯

岩城準太郎

明治新文學の發達は外國文學の移植に俟たなければならぬ。外國文學の移植は其の飜譯に俟たなければならぬ。勿論外國文學を我國民に味はしむるには外國語學習を奬勵して直接原書に就いて之を翫賞する樣にし向けるのが最も有功なる方法であらう。併し現在の狀態にては此の事は少數の國民にしか望まれぬ。又評論と紹介とによりて外國文學に關する智識を廣く國民の間に布くも極めて必要なる手段であらう。併し評論と紹介とによりて得た智識は作品其の物を讀誦玩味するに非ざれば確實有功の者とならぬ。筋書に非ず梗概にあらぬ完全なる飜譯はこゝに於て是非とも目下の文壇になければならぬ。

幸にして近時眞面目なる飜譯頻りに出でゝ斯壇に對し少からぬ貢獻をなして居る。然るに批評

家社會の之に對する態度は創作の小說などに對する態度に比べて甚しく冷淡である。月々の新刊雜誌の下らぬ小說に對してすら一々批評紹介の勞を取つて居るくせに、飜譯となれば原書と對照する暇がないからなどゝ兎角之を避けたがる。中には飜譯の流行を以て文壇の慶事に非ずとして之を咒ふ者さへ往々ある。（二三大家の飜譯のみは賞贊しなければ斯道の通人でないと言はれるのを恐るゝかのやう、分りもしないで人並に賞贊はして居るが）一體我國民は中庸を好むのか事物が發展の途に上りて未だ達しない中にもはや消極論を持ち出す。いやにひねつた反動論を唱へる。よくない癖である。我等は飽くまで飜譯を盛にし唯今の傾向を極端まで發展せしめたいと思ふ。新芽がずん〳〵伸ひる時伸び過ぎるといふので心を止めるは愚な事である。伸びるだけ伸びれば自然に止まるではないか。

先日印度洋上で亡くなつた二葉亭は露國文學の飜譯が上手だといふので有名な人であつた。此の人の飜譯ばかりは飜譯嫌いな批評家連でも人並に賞贊して居た。上手か上手でないかは暫く措いて二十年來露國の文學を移植するに勉めた彼の二葉亭、今後尙盛にやつて貰ひたかつた彼の二葉亭が俄かに亡くなつたのは我が文壇に取つて償ふべからざる大損失である。

然し飜譯といふ仕事は極めて困難な仕事で　上乘の飜譯は誰れにでも出來るやうな生やさしいものでない。勿論言語を譯するのみなら語學の達者な者には一擧手一投足の勞である。語學の達者な先生は我國には無數にある。「英語何々」といふやうな雜誌に毎月コナンドイルあたりを譯する位の事は其の人に事を缺かぬ。困難といふのは言語の飜譯でなくて原作の趣味の飜譯調子の飜譯精神の飜譯である。シェークスピヤの戲曲「シーザー」の第二幕シーザー館へデシヤスがやつて來る所の飜譯にこんなのがある。

「シーザー公には御機嫌美はしう入らせられ大慶至極に存じまする。さて某今朝推參致せーは云々」

「大シーザー公に願ひ上げまする。何卒其のいはれを御話し置き下さりませ。云々」

其の他プルータスもアントニーも皆こんな言葉使ひである。これではまるで殿樣に對する三太夫の格である。自由を尙ぶ羅馬の市民とはどうしても受取れぬ。嘗て或る批評家が逍遙氏の「ヱニスの商人」と淺野憑虛氏の同じ曲とを比較して逍遙氏のを、より多く舞臺詞になつて居るから優つて居ると賞贊した。これは勿論芝居にするといふ方面から見て言つたのであらうが、我等は飜譯を以て外國文學の趣味調子精神を移植するといふ立場から舞臺詞になつて居るからとばかりでは優れりと言ひ兼ねる。

明治文壇に於て飜譯の大家といへば第一指を折るべきは鷗外氏と二葉亭とであらう。二氏の飜譯であると、多くの批評家は直ぐに「よく原作の趣味を發揮し、」などゝ賞贊し奉る。併し鷗外氏の「水沫集」を讀んで見るにシユビンもハツクレンデルもクライストもトルストイもツルゲネーフもドーデーもアーピングも一樣に高雅優麗なる一本調子の文で譯してあつて、十二人の原作者は同一人かと思はれる樣に出來て居る。又二葉亭の飜譯は露文からのであるから露文を知らぬ我等には何とも評し兼ねるが（新聞雜誌の批評家は露文が讀めないでも原作に接するやうだなどゝ賞

めなければ濟まないやうに言ふ）原作を善く味つた人に聞くと「片戀」「浮草」等ツルゲネーフものは略よろしいが「血笑記」や「カルコ」集に出るアンドレーエフ、ゴルキー、ゴーゴリなどになると上辷りのする江戸つ子風の輕い筆つきは原作の調子と餘程違つたものになつて居るさうである。

然らば何故に趣味調子精神の飜譯は其の樣にむつかしいか。其れは東西兩洋の精神の相異に基つく。東西文藝の精神の相違に基つく。嘗て「太陽」誌上であつたか、金子筑水氏は東洋精神の特徴はロマンチック傾向であつて、西洋精神の啓蒙的傾向であるのと相對して根本的に相異なる基礎に立つて居ると云ふ主意で詳細なる論文を發表した事がある。とにかく民族精神の根本的特性わけても文藝の根本的特性は民族固有のもので容易に他民族に理解せられ又模倣せられ得べきものではない。我國民は嘗て支那の文明を模倣し支那の文學を研鑽して之を崇拜した事すらある。併し其の模倣研鑽は遂に皮相に止まりて間もなく全く日本流に解釋してしまつた。根本的精神は今に至つて了解する事を得ぬ。孔孟の思想も李杜の情感も我等が理解して居る者は本物と大した相違であらう。佛教だつてさうである。傳教弘法の佛教は釋迦の精神を其儘傳へては居ない。まして日蓮親鸞の佛教は全く日本精神から出來上つた日本佛教である。

明治になつてから西洋と交通して外交官も行く、留學生も行く、佛教家も來れば文學書も來る。泰西思想の根本から理解した積りで居るけれどもどうして〳〵其が分るものか。某國通を以て任じて居る外交官が案外な出來事に出合つて面食ひ、狐につままれたやうに呆然としてる例は珍しくない。基督教信者が該教の精神を充分知悉してるやうな態度で天國案内の口上を述べ立てゝるけれども海老名氏の基督教は畢竟海老名氏の解釋した基督教に過ぎぬ。植村氏のもさうである。明治の新文學は泰西文學の模倣をやつたもの少からずあるが其の模倣といふは畢竟技巧樣式の模倣に過ぎぬ。さうでなくとも比較的皮相的の事柄である。根本的精神に至りては依然として了解せられて居ない。

反對に外國人が日本の文明又は文藝を理解模倣する事も亦甚困難で殆んど不可能であらうと思はれる。日露戰爭に大勝をなした事は世界の驚異であつた。彼等は奇蹟だと言つた。奇蹟とはよく言つた。日本人といふものは到底彼等に分るものでない。武士道といふ者があると聞いて俄に研究して一かどの日本通になつた積りで居ても駄目である。菊池博士が日本人教育の大精神を泰西人に知らしむる爲に英國で教育勅語の講話をせられ、歐米人の間に至大の感動を引き起されたさうであるけれども、勅語の英譯を讀み博士の講話を聞いただけでは到底あの精神は分るまい。御隣りの支那人すら分らないのである。李鴻章は其れで失敗した。ましてクロパトキンが一寸漫遊した位で日本の眞相が呑み込めるものか。滿洲の政廳に反身になつてシガーを燻らして居たアレキセーフなどに至つては固より日本を論する資格がない。

櫻井中尉の「肉彈」が英譯せられたが一向不評判であつた。勿論善く賣れた。好奇的に又研究的に爭うて一讀した。併しワンダフルなテリブルな事實が羅列するのみで其の味が善く腹に入らぬ。日本人といふ者は奇妙な狂氣のやうな國民だと思ふだけで、しみ〴〵感動して涙の出るやうに思ふ者は一人も無かつたといふ事である。新聞の廣告を見ると「世界を驚かしたる名著」云々と特

筆大書してある。驚かしたのは事實だが名著だから驚かしたのでない。奇異なので驚かしたのである。分らないので驚かしたのである。

日本文藝の趣味も到底理解せられぬものである。光琳の裝飾的繪畫や北齋歌麿の寫實的繪畫は樣式技巧だけでも眞似は出來やうが、雪舟や大雅は正當に味ふ事はむつかしからう。小說はいくらか分りもしようが、俳諧に至つては全く齒が立たぬ。拙著「明治文學史」俳句の革新の條に於てこんな事を言つて置いた。

此の點に於ては泰西の如何なる文學も之に比ぶべき者あらず。又泰西の如何なる詩人評家も之が詩想と趣味とを正當に解する事難し。故に晩近本邦の短詩を味うて之を譯出する泰西詩文の士少からずと雖手を俳句に下せる者に至りては失敗せざる者稀なり。或は句を解して意を誤り或は意を解して趣を失ふ。思ふに俳句の趣味は純東洋的にして西洋美學の則を以て律すべからざる一種の東洋詩美なり。云々

蕉門の所謂寂栞とか細みとか言ふ趣味は迚も飜譯の出來るものでない。

小泉八雲先生は日本を愛する事故國よりも深い人であつた。日本文明に對する熱心なる研究者であつた。日本の歷史文物國民に對する眞摯なる同情者であつた。日本服を着し日本食を味ひ日本風の家屋に住み日本人を妻とし日本謠を口ずさみ、半生を日本に送りて日本文明の研究と紹介とを續け、遂に骨を日本に埋めた人であつた。(之は本校の大谷先生の最詳しく御存じの事である)。然るに先生の著書「心」の中であつたか日本文明を論じたものに「西洋民族の性情を享有する我には眞正に日本人の性情を理解する事難し」と言つたやうな文句が有つたと記憶する。先生は天才である。加ふるに右に叙べたやうな經歷と努力とを以て而も尙ほ日本の眞相が分らないとすれば其の他の外國人に其れが分らう筈がない。尋常一樣の日本通や二年三年間の滯留をなした人に日本の眞精神眞趣味は解せられないのも尤である。アストンの「日本文學史」を以て日本文學史の最勝れたもののやうに有難がる新聞雜誌の記者はおめでたさの骨頂である。

東西文藝の精神に根本的の相違があつて爲に相理解する事の困難なるは右に說く如く甚しい。されば我國民が海外文學を飜譯して其の趣味精神調子に及ぶ事は非常なる難事で或る點から言へば全然不可能とも言へよう。暢達なる筆路に魅せられて直ちに「原作に接するか如し」とか「原作の趣味を發揮せり」などゝ出かけるのは早計である。

斯く言つたとて我等は飜譯の不必要又は無効を稱ふる者は決して持たぬ。趣味の飜譯精神の飜譯は出來なくつても技巧の飜譯樣式の飜譯で澤山である。我が明治の文學を豐富にする爲には所有海外文學を移植せねばならぬ。何でも構はぬドシ〳〵飜譯するがよい。上乘も下乘も擇ぶに當らぬ。極端まで此の事業を進めてよろしいのである。

世には氣の小さい論者があつて泰西文學飜譯の流行は我國固有の文學を亡ぼすに至らずんば止まずと氣使つて居る。然しながら安んぜよ、いくら飜譯しても模倣しても遂に皮相に止まるので泰西趣味の根本に參する事は到底出來ない。國民性情は依然として頑脫して居る。固有文明は依然として埋沒せられぬ。傳統三千年の歷史に養はれたる我が文學の精神を以て海外文學を譯するの

である。我固有藝術の趣味を以て海外藝術を模するのである。飜譯亡國論などは杞憂の極である。

（六月九日記）

悲曲

さもみぢ

鈴木青花

登場人物

男性

乙若。六條判官爲義の、子、義朝の弟、十三歳

龜若。同、十一歳

鶴若。同、九歳

天王。同、七歳

秦野二郎延景。左馬頭義朝の家人、四十歳

女性

早紅葉。延景の姪、爲義北方の侍女、十八歳

外、雜兵、樵夫若干。

時。

保元元年秋

處。

序幕、六條堀河の宿所、晝。

中幕、洛北、舟岡山、夕。

詰幕、洛西、桂川、夜。

序の幕

舞台、庭に向へる書院、前に古木の楓樹を控ゆ。上手は廻廊。下手に枝折戸ありて萩桔梗など秋草を裝置らふ。飛石、燈籠など、庭の模樣よろしく。晝景には築山を見せ、常磐木の間に黄葉を交へ、凡て六條宿所の荒れたる態。靜かなる管絃樂に合せて、朗詠、

「君見ずや北邙の暮の雨、壘々たる青塚の色、
又見ずや東郊の秋の風、歴々たる白楊の聲。

につれて幕あく、乙若書院に只獨り、文机に凭りて書見に餘念なき体。すぐ曲になる

曲「げに現世を觀すれば、彌生半ばの朧夜を、峰の嵐に誘はれて、若き愁を花葩に染めては散らふ山櫻。身を念へば天離る、鄙の入江の風の日を、寄せては返す夕波に、千

鳥しば啼く磯濱の、岸邊離れし根なし草。

曲の中ばより早紅葉物思はしげに、徐々と廻廊にさしかゝり、曲終ると共に歩を止め

白「訝かしや、夢は行く水に書きとめし文字と聞けど、あまりに奇しき昨宵の幻……。

と柱に片手をかけ、次の曲につれて目だゝぬ程の振。（曲は陰にて歌ふ）、

曲「何處とも、知らぬ深山の黄昏に、從ふ影を友として、木下闇をわけ行けば、梢を拂ふ山風に、翠を含む露零ちて、踏むに音なき落葉路、歩み惱らふ耳許に、異禽の叫び、蝙蝠の、羽風冷たき夕暮や、四方より襲ふ山霧に、しどど濡れたり袖袂。

この間、颯々たる風の音、落葉たゞず庭の面に、はらはらと散り、物哀れなる樂音は漸次急調に變じつゝ、

曲「折から御空に妙音聞ゑ、前追ふ聲に彼方を見やれば、眞木たつ峰の木間なる、白木の宮の千木の上に、葡萄染色の彩雲長う、怪しき者の降り立つたり。白壇の七樹と思ひしは紫摩黄金の燭の光、雪かの樣に降り來るは、靈香薫ずる花の雨。こはそもいかに雲の上に、翼の色の碧瑠璃の、龍馬を御する白衣の人は、紛るる方なき崇德の帝。

器樂の音はたと止み、胡聲のみにて次の曲

曲「左に隨ふは惡左府頼長、右に侍るは判官爲義、凡て今度の合戰に、院に參せし殿原は、一人も洩れず見ゑにしが。群る軍兵の冑の上を、紅蓮白蓮ちらし行く、飛行自在の四人の童の、面影見れば、あな怪し、乙若、龜若、鶴若、天王、舘の公達に似も似たり。

この時再び遽然たる器樂起り、小鼓の音を交へ、急調又急調、曲にうつる、

曲「時しも、どよもす攻鼓に、顔龍忽ち朱を灑いで、髪は逆立ち御衣は裂け、手にせる經卷擲ち玉へば、嵐吹き出で稲妻馳せて、紫翠の山も束の間に、變り果てたり修羅の巷。矢叫びの音、鬨の聲篠つく雨に黑雲亂れて、陰火あたりを罩むると見れば、七度生れて讎をしなさむと、虚空にぞつと笑ふ聲して、かき消す如く失せにけり、搔き消すごとく失せにけり。

曲終りて急に沈痛の調となる

早、白「げに訝かしき此夢を、聞こえ上げむか、さらばとて、あまりに奇しき幻を、幼き

君に……」

と云ひさして、靜かに書院の椽にすゝみ躊躇の体。此時日雀、七八、羽音高く庭に下り、又急はしげに築山の彼方に去る。落葉たゞず降る。乙若、書より目をあげ庭を見、轉じて早紅葉を認め、

乙、白「早紅葉!?」

早、白「は」

と數居の處まで進みて畏る。

乙、白「何に驚く紅葉の、頻りに落つる姿見れば秋の心の恨めしやな、」

早、白「さはさり乍ら、落つる葉も、零るゝ花も一向に、神の、佛のおんはからひ、」

曲「花小草、彩さま〳〵の秋の野に、露じもいたく置きぬれば、やがては同じ枯野原。綠に烟ぶる青柳も、梢寂しき、時雨月。

乙、白「あゝ、人界に常住なう、榮華はさながら、水泡に似たり、さるにても、白河殿に參り玉ひし、父上、兄君が其後の御消息は承はざるか」

早、白「定かにそれと知り候はねど、御敗軍のその後は、暫し西塔の邊りに、世を忍びて御座せしが、さてしも、あるべきにあらねばとて、西坂本の黎明に、父子散り散りにてそなり玉ふ、

早紅葉、乙若と顔見合せて思入れ。

曲「嗚呼、生を此世にうけ乍ら、桓山の鳥にあらねども、四鳥の別れ何とせむ、廣刧の契り空うして、清川の魚になけれども、釣魚の恨み是非もなや。

曲、早白「落つる涙も、眞柴とる、深山がくれの秋の空、日影も薄き落葉樹の、梢を渡る巴猿の叫び。尾花亂るゝ谿蔭に、啼くや牡鹿の音も寂びて、魂驚かす眺めかな。

早、白「さる程に若殿原は、小原、靜原、芹生の里、鞍馬貴船の方樣へ、思ひ〳〵に落ちゆき玉へば、判官殿は唯一人、加茂の流れを打ち渡し、糺の森より雜色もつて、頭殿(義朝)へこの由、申し遣はされ、夜に入りて迎への輿に乗り給ひ、私かに御邸に入りたまひしとかや申し候ふ」

この時、庭の枝折戸より龜若、鶴若、天王の三人、手に手に秋草の花を持ち、器樂につれ、歌唄ひつゝ縺れ乍ら入り來る

唄「靡葉ゆらぐ夕河に
咲いた、あえかの月見草
黃金火盞の花萼を
涙ながらに傾けて、

「やをれ、翡翠、わしが身は
宿世つたなや、みどり葉を
風に拠がれて嘆く世に
そなたは獨り心安に
瑞木の蔭の囀りは
樂人めきし戯ればみ」と、
云へば若枝の翡翠は
照斑碧りの冠毛を
ふりつゝ色音、濕らして
「あいな、一日を淺澤の
葦葉がくれに美し餌を
もとめ暮して森の巣に
歸れば、聞きやれ、夫鳥も
四つの雛も、どこへやら、
思ひもよらぬ、蛇か
どぐろ卷きそろ、一の枝に。」

舞ひ了りて椽に上り、乙若、早紅葉に會釋して、程よき處に居並び

天王、「母上はいづちに御座しますぞ」

と小首傾けて早紅葉に問ふ、

早、「公達が御行末の御爲めとて、八幡宮へ物詣で遊ばされて候ふ」

天、「あな、われも御伴、仕るべかりしものを……」

早、「その儀にて候はゞ、申し殘されし事の候ふよ。昨日この旨、仰せ出されし折、公達われも〳〵とて、常にもあらぬ御爭ひ、そを心苦しく思し召され、具せばこそ皆がら具せめ、具せずば一人も具すまじ、片恨みにとて、横雲の、峰にわかるゝ朝まだき、館を出でさせ給ひしが、酉の刻までには下向あるべしとの御諚に侍り、」

天王、寂しげに兄達を見る、途端、秦野二郎延景腹卷姿にて、上手、庭づたひに登場、階下にかしこまり

延、「かゝる姿して御見參に入らん事、恐れ多かれど戰後の習ひ、御免しあれ」

早紅葉、叔父の姿を見て、ちつと思入、公達皆嬉しげなり、

天王、「二郎よ」

龜若、「延景よ」

鶴若、「よくこそ來つれ、嬉ばしや」

乙、「小父、久々の見參ぞ。して所用の程は？」

延景、「や、、ためらひて

延、白「さん候ふ。入道殿(爲義)、御使に參つて候ふ」

龜若等小踊りして立上るを、延景制しつ、

延、白「殿は今、北山雲林院と申す處に、忍びて渡らせ給ひ候ふが、公達の御事、覺束なく思し召し、具して參れと仰せ下さるゝ間、延景御迎へに參つて候ふなり」

乙、白「や、誠に、樣かへて御座しますとは聞きつれど、軍の後は、いまだ、御姿を見奉らねば、誰れも〳〵戀しうこそ思ひ侍れ、

さらば衣更へてむ」。

早紅葉を顧み、奥に入る、龜若等もつゞいて入る。早紅葉、延景に何か云はんとし、思ひ返したる体にて頸垂れつゝ入る。

延景、後、見送りて太息し

延、白「いかに、勅諚なればとて、御家人多きその中にも、この某を呼び出し、かくまで慕ひ給ふ幼き君を、嫌し出して失へとは

曲、白「心憂の限りやな。主命なれば力なの、袖に涙を收めつつ、輿を舁せてたど〳〵と、辿りつきしが、しかすがに、潜りかねたる君が門。姿をし見れば、いや更に、張魂の我が胸も、氷雨もよひの冬の夜を、風卷につれて湧き返る荒海の面のこの狂ほひ、

白、「妄語、殺生の罪業は、切に免させ玉へかし。」

と悲壯なる器樂につれ、奥に向ひて、ひれ伏す。

――幕――

中の幕

幕あく、正面に美麗なる垂幕。物哀しき管絃に合せて、今樣。

「夜半の嵐のふくからに、花は零れぬ、葉は落ちぬ、悲しいかなや万有の、終りは同じ藤衣。

終らぬうちに垂幕上がる、

舞台一面の枯芝生、ひよろ〳〵松五六株しつらひ、樹叢、處どころ。後上手により て雜木林、梢散り透きし態。下手奥は、森の遠見、中に丹塗の古塔、精舍の屋根など見せ、あなたには秋山、逶迤として走る、

凡て、溶外、舟岡山の景。時雨もよひ夕暮の樣。すぐ曲になる。

曲「空の獻歇か、時雨する、乾跡も見えぬ山岨に、茅萱搖がし秋風の、高原こめて吹きこせば、乾反葉さながら魑魅の如く、そゝ走りゆく夕まぐれ。父に會はんの一途に、黄泉の使と知らずして、急げ〳〵と、せきたつる、幼な心ぞ果敢なけれ。

「父に會はん」の頃、延景、輿を舁せて登場、雜兵五六つゞく。曲終る頃、正面に來

り程よき處に輿を下さす、雜兵後に控へ、延景立ちたるまゝ、沈吟の態。天王、輿より出づ

天、白「父上は、何處？」

延景、畏まつて　涙をはら〳〵と流し、しばらくは物も云はず、天王訝しげに見る

この間暫時哀絶なる樂音のみ聞かすべし

延、白「今は何をか隱し進らすべき。大殿（爲義）は頭殿の御承りにて、昨日の曉、七條朱雀にて失ひまつりぬ、御舍兄たちも、八郎御曹司（爲朝）の外は四郎殿より九郎殿まで五人ながら昨夜この表に見えて候ふ、山本の露と消ゑ給ひ候ひぬ。さるを、また

曲、白「内裏より、頭殿を召し出され、汝の弟、多くあなるを、女の外は悉く失ひ申せとの宣旨あり。宿所に歸つてわれを召され、あまりに不憫と思へども、勅命なれば詮方なし、相構へて路の程を詫びしめず舟岡にてと仰せらる、

白「されば こそ入道殿の御使ひとは、僞り申し候ふなり。思し召す事の候はゞ、延景に仰せ置かせてたび給へ。」

四人の公達皆輿より出て、よき處に居並ぶ、

鶴、白「げに、われらを助け置き給はゞ、郎黨百騎にも勝りなむずるものを、この由、頭殿へ申さばや」

龜、白「誠に、今一度人を遣はして慥かに此の由を問ひ申さん」

夢かと計り茫然たりし天王、濕み聲して乙若にすがり

天、白「……母上は、……早紅葉は……」

雲脚怪しく、時雨こぼれかゝる、

乙、○「あな、心憂の者共のいひ甲斐なさや、われ等が家に生るゝものは幼なきとも心は猛しと申すなるを、不覺の事は宣ひそよ、

曲、白「六十路を越へし父君の、圓頂緇衣と身をかへて、憑みて來り給ふをだに、失ふ程の不當人の、まして我等を助け給ふことよもあらじ。世の理りも辨へず、佞人原に欺計られ、多くの弟失ひ果てゝ、只獨りになりて後、事のついでに亡ぼされむもつゆ曉らぬ、あはれ悲しき兄上かな。

天を仰ひて感慨に堪へざる体、しばしありて延景を顧み、

乙、白「二年三年暮れもせば、幼なかりしが乙若は舟岡にてよく云ひしものをと汝等も思

ひ合はせんするぞ。」

と、天王を抱きよせ、鶴若、亀若を、かたみに眺むる振、よろしく。時雨また一しきり。

乙、白「さても頭殿、うたれ給ひなば、笹龍膽の旗差物、いづれの日にか飜へらむ

曲、白「ゆめな歎きそ、弟よ。父も討たれ給ひぬ、世に頼るべき蔭もなし、兄たちも斬られたまひぬ、誰れかは助け御座しまさむ。情をかくべき頭殿は、敵人なれば今はたゞ、露の宿りもあら磯の、よるべ浪間の捨小舟、長らへばとて飄零の行衛も知らぬ迷路に、あれこそは六條判官の子供よと、人々に、指さゝれむは家のためにも恥辱なり。

乙、白「父戀しくば、西に向ひて唱名禮拜なし給へ、來世も必ず一つ蓮に生れ合ひ奉らむぞ。」

三人、各々西に向ひ禮拜す、乙若、髪結ひあげ、涙拭ひやりなどし、延景に向ひ

乙、白「われこそ先きにと思へども、幼な心に懼ぢ恐れむも無慙なり、また云ふべき事も侍れば、彼等を前に。……」

延景無言のまゝ會釋し後に廻り

延、白「御目を塞がせたまへ」

太刀を抜き、二三度、逡巡し、遂に刀をふりあぐ、即三人の首前に落ちる。時雨一層激しく落葉斜に飛ぶ。このあたり、胸をそゝろが如き樂の音。

乙、白「いしうも仕りつるものかな。我れをもさこそ斬らむずらめ」

弟の亡骸を見やりつゝ、

乙、白「いかなれば、かくも果報拙なに生れけむ」

と、ぢつと思入。落葉はらゝと乙若の衣袂にふりかゝる模樣よろしく。

乙、白「あはれ、母御前は、けさの程、物詣でに立出で給ひしが、今しも御下向にて御座さうず」

曲、白「鴉黑なる鞭あげて、翁さびたる運命の神が身に迫れりとは、つゆ知らず、唯父上の召し給ふと、聞きてし事の嬉しさに、飛びたつ計りの思ひして、輿に乘りつるばかりなるが。

痛ましや。老人の、いとし愛兒の臨終のさまを、聞こし召されむ其折の、情緒の惱み歴然に、思ひやられて堪へがたやな。

曲とぎれ、遠くより歌聲哀れに響き來る、

歌「かたゞくに果敢なかるべき此世かな、
あるを思ふも、亡きを忍ぶも。――――

歌聲絶ゆて、哀絶の器樂の調、しばしありて曲につゞく、

曲「あゝ、十有餘年の春秋を、我子と憐み、母御前と、片時も離れ參らせず。桂花さく御苑生の歡樂の世をば送りしが、盈つれば虧くる月の影。

乙、白「さりながら、最後を互に見もし、見え進らせ候はんは、心苦しき限りならむ、御留守に別れ奉るも、あるは八幡の神慮に候はじか。

乙若、首どもの血押し拭ひて、額髮を切りつゝわが髮をも切り添へ、懷より疊紙とり出して別々に包み、各々の名を誌し

乙、白「あな、延景。乙若は命惜みて後に斬られたりと、心なの人、言はんずらむ、ゆめその儀にてはあらじぞかし。斯樣の事云はむに附けても、又わが斬られむを見んにつけても、泣きとまりたる幼き者の、また泣かんも心苦しくて云はざりきよ。さらばこれ形見に奉れ」。

と、包を行器の上にのせ

乙、白「今はこれ等が待遠なるらむ、疾く〳〵」。

延景を促す、延景後へ廻る途端。早紅葉髮ふり亂してあわたゞしく下手より登場。

早、白「のふ、待ち給へ、叔父上よ。など幼き君を弑め給ふぞ」。

延、白「女子の與る限りにあらず。退けや、早紅葉！」

早紅葉、涙の顏をあげ屹つとなり

早、白「稚けなきとも主の君！」

延、白「とは申せども、普天の下、率土の濱……」

と言葉をきりて、延景、涙を呑み

白「勅諚なるを如何にせむ」。

と靜かに手を拂ふ、早紅葉泣き伏す、暫らくありて乙若を見上げ

早、白「御館を出でさせ給ひし後、ひとり凭る柱の下に、何とは知らぬ胸さわぎ、暫しが程は、とつをいつ、叔父の素振に、昨宵の夢に、思ひ惑ひて、御輿の行方を、往來の人に聞きては訂し、たゞしては聞き漸々に、參ればあはれ、この御樣、」

乙若、この間、端然として目を閉ぢたりしが、これを見て

乙、白「今朝して汝の云ひけむ如く、物みな神佛の、はからひよな」

曲「紫薇の宮居の花影に、羽衣ゆらに飜す、光妙無量の天女だに、五衰の運命ありと聞く、況して滓濁の塵塚に、生死苦樂のともがらは、榮枯のためし免れじ。

傍なる行器の上の髪包をとり

乙、白「これをば、母御前に渡し候へ、」

と更に、懐より守袋をとり出し

曲、白「ありし世の、形見に賜ぶぞこの護符。念ひ出でなむ折折は、手向けの水を給へかし。人ともならば、こゝらの年月、姉にもまさる、慈愛に、酬ゐむ術もありしものを、今は見果てぬ夢となりぬ。

早紅葉、涙ながらにうけ取る、

この時、雲の隙より、落ちゆく秋の月、洩れて舞台一面、薔薇色の光に染めらる。

乙若衣襟を正す

乙、白「願諸同法者、臨終正念佛、
見彌陀來迎、往生安樂國。」

延景刀をふりあぐるを、きつかけに、

――幕、――

しばしが程は悲痛なる管絃。樂音次第にうすれゆき、縷の如くにして絶ゆ。

詰の幕

舞台。江に沿へる岨路。岸には巖石或は立ち或は俯す、巖の上には小石を積み上げたる塔形のもの三つ四つあり。や、上手に古祠。後は老杉古檜亭々として天を摩し、下手、水に臨みて竹藪のさまよろしく。下手奥に微茫たる遠里小野を見せ、望の月、叢雲の間を縫ふて走る。凡て桂川の畔、夜陰の景

幕あくと和讃。

「・法身の光輪極もなく、世の盲冥を照らすなり、智慧の光明量りなし有量の諸相悉く、光曉かぶらぬ者はなし、眞實明に歸命せよ。解脱の光輪極もなし光觸かふる者は皆、有無を離ると宣べ給ふ、平等覺に歸命せよ。光雲無碍如虛空、一切の有碍に障りなし　光澤かふらぬ者ぞなき、難思議に歸命せよ。清淨光明竝びなし、遇斯光の故なれば、一切の業繫も、のぞこりぬ、畢竟依を歸命せよ。……

切れる頃、樵夫甲（泣上戸）、乙（怒上戸）、丙（笑上戸）の三名、下手藪かげより登場。

虫聲滋々。

甲「はれ、今日は稀有な目に逢ふた。五條はづれの番小屋の前を通る程に、雜色めら荒聲にわめきをつて、御主らは院方の落人であらうと

乙「有無なう某らを、ひき搦めて、牢獄の中へ投げ込うて了うた

丙「幸ひと、見知れる殿があつて、漸う免されはしたが夜も更けた事じやによつて、女どもが待ち草臥れて居やらう。」

と立止り、空を仰ぎ

丙「や、いかう雲行が惡うなつたわ、」

乙「されば よ。また降らねばいゝがの、」

丙「お月も、雲奴にはかなはぬと見える、」

甲「たいの。月に叢雲、鯨に鯱、とやら、儘ならぬは、浮世の常でおりやる。や、それで思ひ出でた、先づ今度の合戰を見さしめ、上皇樣はさん〳〵の敗軍、武家の頭領、判官殿さへあの爲体、」

乙「したが、勝ち誇れる內裏方は、いづれを見ても一癖ありげな面魂ではたりないか、」

丙「どうやら、この儘では澄むまいぞよの、」

と、この中、祠前に來り、乙まづ傍の石に腰をかけ、思ひ出したように

乙「や、昨夜こゝで、判官の北方が身を投げられたとは定か、」

甲「定どころではたりない。のう、御主、」

と丙を見て

甲「この樣な憂い物語りは酒でも飲べねば話されぬわ、」

乙「さ、眞實と、語らしめ」

甲「丁度、月が、あれ、あの杉の枝に懸れる頃、この岨路に、さしかゝつたが、遠くから穩かならぬ人のけはひ、

丙「身共は叢に身を忍ばせて覗ふ程に、間もなく、これへ來をつた輿一つ、

甲「從ふ人は十餘人、

丙「その嚴が根に輿を立てさせ、

甲「五十路あまりの上臈一人、

丙「たち出でられしが、左右を顧み、

と、腰なる瓢をとり出して飲む、物語りの中、三人かたみに飲む事、

曲、白「わが夫の、失せにし場を吊ひつれど、聲も姿も仇し野の、小笹の夜風、身に秘みて、露に咽ぶか虫の歌。又舟岡へ行きたりとて、同じ事にてあらんずらめ、われは年頃、觀世音を、深くも憑み參らせて、日毎普門品三十三卷、彌陀の名號一萬遍、唱へ申す習ひなるが、今日しも物詣にまだ終へず、館に歸りたらばとて幼き者の玩弄物、見んにつけても聯想の糸の亂れに心も縒れて、勤行もせられまじければ、爰にて聖靈たちに回

向せむ。

この間、曲につれて三人の振よろしく、酔廻れる態。

甲「と宣ひつゝ、小石にて塔を積み重ねて居らせられたが人々の隙を見すまし、やにはに身を躍らせて、あの青淵へ水烟……」

乙「やゝ、……して武士ともは何んとした、」

丙「俄事に周章ふためいたが、折から月は雲にかくれて、四邊は頓に暗うなつた、」

甲「聞かしめ、その隙に侍女の女房が二人までも、又淵川へ身を投げたわ、」

と甲、泣く

乙「やゝゝゝ。何せに、御主は助けうとせぬ、」

乙、むつとしたる振

甲「おんでもない事、おんでもない事、飛び込うだら己の命が危い程に」

丙、甲の顔を眺め腹をかゝへ、

丙「はッはッはッ。御主の水泳きとや。はゝゝゝ、石地蔵の川流れ、ぶく〳〵の土左佛。いや一段と見物でお座らう、はゝゝゝ、」

乙「笑ひ事ではおりないぞ、」

乙、有り合ふ杖にて丙の頭をうつ

丙「はゝゝゝ。よい音がするわ、おれの頭は皷そうな。はゝゝ。これが可笑しうなうて、はゝゝ、」

乙、やつきこなり、今度は甲に向ひ

乙「助けに行かぬとは、こゝな奴。人ではない、人ではおりない。」

と甲をつゞけざまに打つ

甲「あ痛ッ、あ痛ッ、ゆるさしめ、ゆるさしめ。此次からは、救はう程に、助けう程に。あ痛、あ痛、あ痛ッ、」

甲逃げる、乙後を追ふ

乙「おどれ横着者、やるまいぞ、やるまいぞ、」

二人上手に入る、この時月出であたり明かになる、丙一人、瓢を片手に陽氣なる器樂に伴れて舞ふ(曲は陰にて歌ふ)

曲「鈴蘭の花房搖るゝ森かげに、鼻を拠ぐよな異な香り。
手斧うち棄て、右睥左顧、漸と見つけた小洞に、猿の忘れた醪み酒、ハレ、醪み酒。
曲「阿古屋貝、うつし藏せる蒼溟も、黄金埋るゝ鑛山も、何の勝ろぞ一杯に、よいやゝ酒壺、汝とならば、皂莢莢の中までも、ハレ、中までも。
曲「酒なくて、何の己れが五十年、いづれ浮世は笹の葉の、

露の白玉手に掬めば、香はさながらの八塩折、美酒の甕の一雫、ハレ一雫。

踉々、跟々の振よろしく

丙白「酒を飲うべて、飲べ醉うて、とうど、こりんぞや、參うで來る。な徒倚ひそ、まうで來る。たんな、たんな、たりや、らんな、たりらりら、」

と道化摸樣にて上手に入る

器樂たへ、虫の音、風の聲、月また雲に入り、あたり昏うなる、曲。

曲「うるみ色なる嬋娟の面を、又立掩ふ叢雲に、空吹く風も黑うして世は烏羽玉の闇の色。少女心のいや更に、心細さの闌たけて、方面あやなき迷ひかな。

曲の中頃、早紅葉悄然として上手より登場、祠前に立止より。

早、白「舟岡にて若君の御後追はんとせしも事果さず、雜兵原に擁せられて叔父の館に送られしが、それよりは、片時止まぬ我身の監督。今日しも、朝淨めの下婢どもが庭前の立話しに初めて知んぬ北方の御最後。

と惆悵思慕の振よろしく、

曲、白「あゝ、叔父上に先だつ罪は深けれど、忘れがたなの主の家、心定めて夕闇に紛れて館を逃れ出で、

曲、白「辿りつきにし桂川

早、白「御堂の前と聞きにしが

と巖の上なる石塔を見、

早、白「おゝ……」

と巖に身を伏せて嘆き悶ふこなし。この時遠くにて唄

唄「親はあの世に、子は現し世に、峯の櫻か、ちりぐに。

早紅葉、徐らに立上る、と急かず迫らざる何となう悲しき調なる管絃にて曲、

曲「三界總て、無常にして四生何れも幻化なりとは說きつれど、あはれ幸なき越し方の、身も蜉蝣の薄ごろも、見えぬ翼に時飛びて、十八年も一炊の、幻なりし夢なりし。

早、白「父に別れしは三歲の春、乳ばなれしけむは五歲の秋、群に離れし雁の寂し音に啼く夕暮を、鰥の叔父に引きとられしが、北方の御情により六條の邸に參りしは、七歲の春の初めなりき。あはれ迷盧八萬の嶺よりも猶高き、主君の鴻恩思ふにつけて、只今かゝる目を見る心憂さよ、長らへばとて、今更に、千年を經べき生命かは」。

月、雲を出で、は入り、風の音はげしきまま。

早、自「人は一日一夜にも八億四千の思あり。纖塵、胸になき者も、さ程の罪は、あるなるを、思ひぞ凝結る癡愚の我れ。よし。墨染衣ひき纏ひて、松ふく風に心を澄し、隈なき夜半の月影に眞如の相、仰ぐとも、若き血潮の搖蕩に、涙ある身を如何せむ。

曲「すゞろ歩きの道すがら、老ひたる上蒲見ん折は、さてそ偲ばめ北方、幼き人に行き逢はゞ、そゞろ描かん公達の、面影ひしと身に添ひて、その度毎に折ごとに、斬らせし人も恨めしく、斬りけむものも情なの、妄執の念、去りあへじ。

曲、自「さらば今宵を最後に、縛れもつる、黑髮の、長き亂れの此世の緣、斷ちてぞ胸も安からむ。

に合せて目だゝぬ程の振、この時、再ひ微かなる唄

唄「どうせ情ない運命となれば、わたしや搦むまい、菊の露。

早紅葉、耳欹て、思入。第二の唄、前より近く

唄「沈む夕日を苦におしやるな、朝は、東雲、茜色。

唄聲絶ゆると、早紅葉、端然として巖頭に立つ　雲ちぎれ〳〵になりて月光漸次明になる

早、自「今ぞ心も澄みわたる、月の光の澄さに、淨き流れを浴びたれば、皎潔たりや塵の身も、

曲「皎潔たりや塵の身も。蓮華彩ゑる三瀨川、船はて處、とめ行かば、無憂樹の森の追風に、箜篌の調べの靜鳴や、岩が根すべる眞清水は、清搔妙への玉小琴。瑤臺、春は若うして、紫匂ふ雲間より、花唱み來る青鸞の、翼も輕き欄干に、頌歌しづけき、常若の、圓滿美妙の美し國。

曲、自「あら樂し。今聖光のまびかりや、醜つ世、棄て、、燃るたつ笑みに。久遠の光、仰きつ、、常住の愛、慕ひつ、、いでや行かまし主の邦、いで行きてまし、父母の鄕。

月光、いよ〳〵明にして器樂いよ〳〵冴えたり、早紅葉、面てに微笑を湛へ、合掌して天を仰ぐ、神々しき態、凡て活人畫摸樣にて。

――幕、――。

附言

一、五六歳の頃であつたと思ふ、母に伴れられて、故郷の芝居小屋で、曾我の子別れを見た事がある、子供心にも氣が妙になつて、居たゝまらなくなり、とう〳〵泣き乍ら家へ歸つた、それ以來唯の一度も、芝居と云ふものを覗いた事がない。それに何故斯樣なものを書く氣になつたと云はれると、少々返答に困る、

一、冬休みを尾張の片田舎に暮したが、退屈まぎれに、いろ〳〵拾ひ讀みした。その中でわけても僕の感興をひいたのは保元物語の義朝の弟が殺さるゝ條であつた。それから種々の場合を想像して小品にしようか叙事詩に仕立てようかと思ひ惑ふた末、とう〳〵こんなものが出來上つた、

一、初めは一幕物か、或は近世戯曲の常套に從つて五齣と思つたが、何やかやで御覽の通りのものになつて了つた。何しろ劇には至つて不案内の上、音樂上の智識が皆無と來て居るから識者から見られたら、さゞ歌劇上の約束を破つた、えたいの知れぬ代物であらうと思ふ。

一、要はこんな者か書いて見たかつたから書いたので、その外に何等の主義も主張もない。強いて云へば平安朝末期の時代思潮の一面を描いて見ようと云ふ魂膽が無いでもなかつた。從て戯曲の主人公に緊要なる大理想、大懊惱、大意志、も認められず、云はゞ平凡な性格を捉へて踊りをおどらせて見たのである。

一、右の次第故。この一編は舞台とは沒交渉の朗讀戯曲（レーゼドラマ）で、白（せりふ）は優人のみ曲（うたひもの）はその折々の樂に合せて樂人のみ曲、白は樂人、優人共に歌ふものと想像して御覽を願ひたい、

（四十二年二月稿）

校風問題に對する吾人の見解

富田愛次郎

一、

校風發揚とは何んぞ、そは謂ふに易くして實は決するに難き問題也、校風發揚の聲甲論乙駁げに耳も聾せんとす、吾人も亦これ等論者の驥尾に附して校風發揚を主張する者非才その責に堪へずと雖も茲に吾人がこの問題に對する見解を貴重なる北辰會誌上に披瀝して賢明なる校友諸兄の示教を乞はんとす、

學生の多數、器機の完備、校舍の善美未だ以て善良なる學校といふべからず、是等は校風發揚の手段に過ぎず、學校の眞値は校風の如何にありて存す、モリソン嘗てマコレーを論じて曰く「渠の精神に於て印象をなすものはケンブリッヂの學問にあらずしてその社會にあり」と、然り劍橋がマコレーを產し、むさくろしく二室を有する松下村塾の塾風が軈て維新の回天動地の大事業を胚胎せり、ウエリントン公がワーテルローの戰捷をイートン中學の校庭に歸したるも故なきにあらず、嗚呼偉なる哉學風の力、

學生の社會に信用なき我國の如きはあらざるべし、學生といへば浮薄輕卒恒心なき事萍の如く、墮落の代表者の如く思惟せられ、從つて學生の社會に無勢力なる又驚くに堪へたり、學生の罪乎社會の罪か吾人茲に議論の餘地を有せざれども兎に角近代の學生が精神的方面の修養に闕如し、師弟道全く堙滅して昔日の面影なく、正確の意志なく時代の暗流と上下しつゝあるは明白なる事實也、校風振起せざるべからず、校風發揚の聲を可及的大ならしめ以てこの効果を收めざるべからず、誰か校風問題を目して閑問題となすものぞ、一粒の實地に落ち、これを培ひ雨露これに漑

げば亭々たる天を蔽ふ大樹となる、その肥料その雨露これを校風に覓めずして何處に見出し得ん、北冥七百の鯤垂天の雲に乘ずるか否かは實に校風の如何にありて存す、

二、

吾人をして些しく、我校の學風を回顧せしめよ、回想的觀念はよく校風の歴史的感情を明にし、校風の根本的思想を與ふるものなれば也、吾人四高の古き校風は悉知する所なし、傳へ聞く往時四高の學生は遊惰放逸その風を濟し、伏魔殿のそれの如くなりしと、當年の校風や知るべき而已、今や校風大に見るべきものあるに關はらず世人は猶往年の校風を以て我校を呪詛せんとす、そもその責や誰吾人の祖先は餘りに意氣地なかりし也、かゝる渾沌の時代に當り我校にとりて忘るべからざる明校長北條先生を迎へ、暗夜の光明は北條先生の崇高なる人格に發し、校の内外全く廓清せられ局面一新枯死せる四高は蘇生せしなりき、かくて新學風樹立せられ未だ完成を見ずして不幸先生の轉任を見るに至り吉村校長その後を續かれ以て今日に至れり、吾人が知る所はかくの如く漠たり進んで吾人入學當初の校風問題につき言なかるべからず、當年の校風論者の主張はその意識旗幟鮮明を欠き、熟慮反省を廻らさず、時に奇矯の言行を敢せし爲め物議を釀したること又些少にあらざりき、渠の慘憺たる佛蘭西革命に於て自由は破碎と心得ボオネット、ルージの喜劇を演出したりしが如くこれ等は改革者の常徑と見るべき乎、兎に角當年の校風論者は熱烈たる至誠を有し未だこの重大問題に對して倫理的内容を洞察して左顧右眄するに暇あらず、實利者風潮、個人主義的偏見は校風不振の因となし彼等は判官の罪人に對する如き態度を以て校友に對せり「校風は不振沈滯せり、校友の腐敗分子を殲滅せよ」と、絶叫して校風問題に向つて猛進せり、其意氣や壯なりしと云ふべし、然れども當時一般の思潮は渠等論者が思惟せし程簡短なるものにあらざりき、反動的風潮は校の内外に澎湃として激烈なる暗鬪を見るに至り、校風問題は全く影を沒して感情問題に變体して、校風論者は鄙劣なる野心の繿縷を校風發揚なる錦衣を以て粧ふものと曲解せらるゝに至り、校風論者も一時手を引くの狀態なりしも至誠校風發揚を翳して立てる彼等は内部區々たる感情の小競り合ひより外面活動を以て思想統一を緊要とし遂に未曾有の第一次南下軍を起すに至れり、思へばこの時代は校風問題の最も活動したる秋なりき、

爾來校風論は前年の惰性を以て進み、第二次南下軍を起すに至り「寒潮の主人公が來た」と、冷笑嘲罵せられ、忿怒の念は校風革新の急務を自覺し、遂に寒潮問題を惹起し、校風問題は一層の活動を見るに至れり、以來空理的にあらず、餘程緻密眞摯に研究せられ校風發揚の演說會もあり、革新會の組織せられしこともありしかど、已にこの間惰氣を生じ頽敗滅亡の兆を呈し、所謂大山鳴動鼠一疋の感なき能はず、我校猶血涙愛校の士尠からず、いでや校風發揚に向つて邁進せん哉、然らばこれが方策如何、以下少しく論ずる所あらんとす、

三、

校風發揚の根本義は愛校的觀念を基礎とする統一的精神也、

もしこの統一にして不可能とせんか校風問題は全々不成立に歸す、吾人は信ず思想統一は成立し

得べき問題也と、大凡學校は各個人が形成する團体也、故にその個人人格の力か爛漫の華と咲き絢爛の美を濟す時は吾人が校風を謳歌する時なり、故に問題は必然倫理的人格の問題に入る、然らば校友の人格を包容して渾一とし、恰も海洋の底には赤き珊瑚黄ばめる海草の花咲く底のものならざるべからず、愛校者が「かくあるべし」「かくあらざるべからず」と大聲怒號するが如きはその意氣や愛すべしと雖も、惜むべし野人の荒野に叫ぶ聲に終らんのみ、校風論者の態度や偏狹なるべからず、總の主義主張を包容する雅量なかるべからず、

然れども吾人「所謂個人主義」を標榜する校友より奇怪の語を聞く「我等は個性を有す、本能を有す、共同一致そも何の用ぞ愛校そも何の意義ぞ」と、吾人斯くの如き謬見を以て得々たる「所謂個人主義」者の醜を三嘆せずんばあらず、吾人もとより個性を尊重し、心靈の權威を認識するに於て人後に落つるものにあらず、然りと雖も個性の發揮と愛校の精神とは何故に矛盾するや、これ吾人か問はんと欲する所也、知らずや個人の内面的必然は至誠也、愛也もし論者にして愛校を否定するものは自己人格の否定なることを、個人は國家なる團体に隷屬して一個人として自己を主張する權利を有すると共に國家に對して義務を有し、至誠國運の隆替を計る熱烈たる愛國心を有するにあらずや、校友が學校に對する態度も正にかくの如きものならざるべからず、所屬學校を敬愛し向上發展せしむるは吾人當然の義務也、この見地よりして眼底學校なき誤れる個人主義を排す、人の性たる野獸的我利のものにあらずして、他愛的美性を具備するものなるを信ぜんとす、もし論者にして社會國家を否定し、自己本能の滿足を以て足れりとする「所謂個人主義なれば吾人は論者に最良の一策を呈せん「社會を去り、國家を去り、無人島に獨居せよ」と、論岐路に入りしも要は至誠愛校の念慮は學校思想統一の根本義なるをいはんとせしのみ、

寮生、通學生の融和を以て思想統一の急務と信ず、寮生といひ通學生といふこれ均しく我校の生徒也、所屬團体の一員也、寮生を沈滯なりと罵る勿れ、通學生を不規則なりと冷笑する勿れ、共に水掛論に終るべきなり、もし兩者の間欠点の存するものあれば忌憚なくその抱懷を打明け共心戮力校風の助長に盡さんのみ、時習寮が標榜する「超然主義」に對して兎角の評あるか如し、或は超然を以て「現代を超越したる隱士の態度」となし、或は「樗牛の肺患を連想するに過ぎずと」となず、然れどもそは眞意を解せざるの言のみ、時習寮が祝融の災にあひ一時閉鎖せざるべからざる悲境に頻せし秋三十有餘の熱血兒が萬難を排して、物質的病弊遂に學生社界を風靡し文弱風をなすを慨し憤然立ちて彼等が翳したるものは「超然主義」也、吾人は名目形式を問ふの要を見ず、當年志士の意氣を愛し、この至誠に感せずんばあらず超然の血滴流れて三春秋以て今日に至れり、超然の由來する所夫れかくの如し、單に私情の爲め確執反目するが如きは吾人の斷じて採らざる所互に扶翼提携渾一体と成り、共同一致の實を擧げざるべからず、寮が校風の中心となり、思想統一の主體とならざるべからざるは勿論にして寮生諸君が近時大に面目を新にし内面外面に剛健なる活動をなし、四高學風の向上に努力せらるゝを多とす、然るに風説あり近來寮内統一的精神の睽離を見るに至り、我利主義の跳梁盛なりと、もし事實とせんかそは悲しむべき現象也、吾人は萬々根據なき妄語なりと信じて疑はざるもの也、

學校の理想よりすれば皆寄宿舍主義を採らざるべからず、然れども事情上目下時習寮は百五十人內外を收容するに過ぎず、玆に於て通學生の共同生活の必要を見る（塾の興起につきては北辰會第五十三號に一言したれども順序として再錄す）近時塾の興隆するもの二三に止まらず、或は主義信仰、或は出身學校鄕土を同じくするもの相寄りて塾を起す、寔に可也、人は心の弛み易きもの也、二人よれればその間制裁あり、德義あり、從つて放縱たる生活をなすことなく圓滿なる人格を涵養するに多大の効果あるは吾人の呶々するの要を見ず、實に塾の興起は校風促進の一法也、

吾人は以上不完全ながら思想統一につき述べたり、更に外面活動につき論ずる所あらんとす、

四、

外面活動とは內に養ひし美風を社界に發表することこれ也、

論者或は校風を外部に向つて發表するが如きは無意義也、御門違ひ也、內に養ふ所あれば德は孤ならず必ず隣あり、內部の美風は芝蘭の芳幽谿を出で薰ずるが如く然りと、一應御最の說なり、內面修養は本也、外面活動は末也、末なりと雖も吾人は無用なりと信ずる能はず、吾人は積極的に大にこれか發表の要を見るなり、一例を以てせんか、かの寒潮事件に見よ、甲者論じて曰く「大坂每日は我校を侮辱せり、伏魔殿と罵れり、大に北陸地方にボーイコットを行ひ大鐵槌を加ふべし」と、乙者論じて曰く「否否、內に信ずる所あれば何を苦しんでか區々たる一新聞を相手取り戰を挑むの要あらん、先づ校內の淸潔法を行へ、然らば校風は當然發輝せられん」と、衆議はこれを同時に行ふ事に決し、內部は華新し、大坂每日に對してはボーイコットを斷行してその勢力ある運動は大坂每日に反響して彼は小說の揭載を中止し、その罪を謝し以後かくの如き失態なきを誓ひて事件は落着せり、而して社會は四高學風の健在を祝し大に四高の面目を施せり、もしこの場合大坂每日の跳梁に委せしならんには我校の社會に對する信用や如何なりしぞ、思半ばに過ぐるものあらん、

外面活動は狹義に於ける學校自慢也、自己確信の發表也、校風謳歌の聲の外部に溢出したるもの也、我國民性の特質は國民進んでこれを誇示する所也、校風の外面活動も亦斯くの如き意義を有す、

かの南下問題の如きも何等の價値なきが如くなるも、南下問題が四高七百健兒の威氣を振起し、協同一致の實をあぐるに於て最も有用の壯擧なるを信ずる也、回顧すれば三十九年春第一次南下軍を起し獨り柔道は三高六高を破り焦天の勢なりしも、劍道、庭球、野球は踵を接して死屍を吉田原頭に橫へ、庭球、野球は再度立つて利あらず、野球は三度立ちて又候敗衂を重ねたり、玆に於てかその輕擧を咎め、甚だしきは野球部の存在をすら呪咀するものあり、勿論勝敗は學校の聲名に關すること非常に大なるを以て輕擧妄動は深く戒めざるべからざるも單にその結果を見てこれを論ずるは甚だ酷なりといはざるべからず、自らその技渠に優るを確信するに於て四度五度否凱歌を尾山城下に奏する迄臥薪嘗膽南下の軍を擧げざるべからず、これ四高健兒の本懷也、第一次南下軍破れ煌々たる篝火の下相擁して北天を望んで泣きしあの慘澹悲愁の光景は吾人の夢寐忘れざる所三度の敗に狼狽して泣寢入りするが如き醜体は婦女子の事のみ吾人の斷じて採らざる所也、

獨り野球部選手諸君のみならず各部選手諸君の健在を祈るや切なり、

以上外部活動の要につき述ぶる所ありしが進んで校風發揚の方策として制裁力につき論及せんとす、

五、

子子は清流に出でず、子子は濁流にのみ生命を保持す、校風剛健卓勵風發の意氣ある所決して子子の生ずることなし、校風沈滯睡眠の時は子子の盛んに横行する時也、七百健兒の健在これ校風振起の要義也、君子然已獨り清ければそれで善しと云ふべからず、若し校内子子の存せんか宜しくこれを剿絶せざるべからず、これ校風をして常に清新ならしむる所以也、

國家は法規を以て人民に對して制裁法を設けて國家の体面を維持す、社會には不文の制裁力ありてよく善良の秩序を保有す、學校には校規の違反者に對して制裁規定あり、吾人が謂はんと欲するものは學校公規の制裁にあらずして生徒相互間の制裁也、大凡社會制裁力の强弱が國民道德の如何をトし得るが如く、生徒間の制裁力の强弱は又よく校風の振不振を覗ふに足るべし、制裁力なき社會は墮落す、吾人未だこの力の存在せずして校風の揚がれる學校を耳にせしことなし、茲に於てか吾人校内に森嚴なる制裁力を必要とするもの也

實に制裁力は學校の良心也、良心なき學校は形骸を存すと雖も事實に於て枯死せるなり、論ずるに足らず、見るに足らず唾棄すべきのみ、我校内黴菌あらしむべからず、これ吾人の主張也、黴菌は危險至極也、七百の細胞を毒せずんば止まざるなり、かの寒潮問題が一二黴菌の爲めに如何に慘劇を演出せしかは猶吾人の腦裡に新たなる所也、故に曰く先づ吾人の知友にして健全なるか否かを檢せよ、次にクラスに見よ、更に進んで學校全体に注視せよ、もし私情の爲めその罪を庇護隱蔽するが如きは校友に對して忠なるが如くにして實然らず却つて一層墮落の深淵に投ずるもの也、これ決して愛校者の堂々たる態度にあらず、制裁方法としては忠告、絶交、腕力等あるが如し、忠告は最上の方策也、絶交腕力の如き人格を傷つくるものは勉めて避けざるべからざるも最後の手段として泣いて馬稷を切る又止むを得ざる也、再言す校内黴菌あらしむべからず、これ校風發揚の根本手段なれば也、

吾人の所論は大凡渴きたれども結論に入り校友の自覺心を促さんとす、

六、

燦爛たる北辰の下清廉靡々の元氣を北海の怒濤に養ひ此所尾山城下に儼然たる四高學風を樹立せざるべからず、三更人靜にして萬籟寂然聲なき時虛心平氣自ら良心の清鏡に對し而してその奥底の私語をきけ吾人が心靈は何事をか物語る「吾等は二十世紀の曙光を浴びつゝ偉大なる使命と天職を有する青年也、向上の一路に突進せよ」と、然り吾人は今やその根蔕たる眞人格修養の道場にあり、沈滯睡眠は吾人の態度にあらず、實に校友は吾人が理想に向つて努力する力の凝集也、故に校風は「かくあるべし」との他律的法權の意義にあらず、「かくあらざるべからず」との自律的内面の慾求也、燃ゆるが如き至誠也、吾人は俯仰天地に恥ぢざる四高の健兒也、天下に呼稱して毫も遜色あるなし、この自覺、この自重自彊あらずんば校風の事木に緣り魚を覓むると何等異る

なし、

母校を卑下し、他校を崇拜摸倣し、雄心潑溂天下を横行する自覺なく、近世の思潮に眩暈蹌踉右顧左眄なす所を知らざるもの如何ぞ校風の振起を夢想するを得ん、

噫久しい哉校風の揚がらざる、借問す、社界が我校を沈滯なり、睡眠なりと嘲罵する時否我校の校風は整々なりと誇示して打返す勇氣と自信とこれある耶否耶、

由來金澤の地北邊に僻在して百萬石桃源の夢幻猶醒めやらず、加ふるに半歳雨雪軍の來襲の爲め、人心引込思案に傾き活動なく元氣なく吾人に刺激を與ふるもの少なく、流れざる水は腐る道理一種の惡風は又學生界を蠱惑せんとす、危哉、學生は社會を支配する勢力を有せざるべからず、然るに社會陋習の前に屈して喜んで洗禮を受けつゝあるにあらずや、これを薄志といはずして何ぞ、弱行といはずして何ぞ、「高等學校は吾人の目的たる大學に到着する一驛也、有耶無耶の間に三ヶ年を葬り去る又可ならずや」とは時に吾人の耳朶を擊つ奇怪の語也、成程有耶無耶主義者より見れば校風問題の如きは「愚」なるべし、「陋」なるべし、然れども記せよ、人生は森嚴なる實在也、隱士の花見遊山にあらざる也、吾人は理想を認めて日一日、歩一歩に品性の向上陶冶に努力せざるべからず、優柔不斷、文弱淫逸は實に人格の退歩也、墮落也、

羅馬の大を成す一日の業にあらず、一時的神經的の校風は瞬間の榮のみ、漸次校風の礎石を累積して堅固無比の城壁を築造し、四高をして至上せしめんことこれ吾人の本願也、

以上吾人は校風の要を說き、校風の小史を語り、校風發揚の手段として思想統一、外部活動、制裁を論じ、最後に自覺心に及びたり、吾人文辭に習はず、無用の文字を臚列したるに過ぎずと雖も內心止むべからざるものあれば也、賢明なる校友諸兄乞ふ吾人の不文を咎めず、意のある所を諒とせられよ、(終)

わかれ

たけを

うすら寒い風が西の山の麓からそよ〳〵と立つと、今迄喧しかつた虫共が彼處、此處に細い鬚を不思議想に振り立てゝ夢の樣な歌を合唱せ初めます、秋が愈々僕達の山國へ來たんです。僕は笹の葉を唇に、あてもない音に耳を傾せて居たんですが急に心細い樣な氣が仕出して、そつと葉を唇から滑らすと、ふわりと落ちて、足下の池に浮ぶ、咲き後れの睡蓮が、うす暗い葉に差へられて、白い花瓣が眠む想に見へる。

「向ふに見へる星」

と御城の夫人は指さす。遙かに、沈んだ光を流して一筋の河が峽から出て又峽に隱れる、薄い霞が其對岸に浮ぶ、屹度あれは谷間々々に露を吸ふ促織が、せつせと織つた眼に見へぬ絹をありとある丈重ね合はせて、空から極りない糸で懸したんだと僕は思ひました、其の霞に裾をかくして

一脈の山が連なる、夫人の仰しやる星は其の山の上に何時生れたのか若い光を放つてゐる。

「あの星の下に貴方が繪を御習ひなさる都があります」

遠い、星と御話しなさる樣に、じつと眼を据へたまゝ、傍に僕の居るのを御忘れなすつた樣に有仰しやる。

日は御城の後の山の肩に落ちて高い雲丈けが僅か薔薇色に殘つている、僕は、あすの朝早く先生の家を送られて、夫人にも御別れして日頃の望み通りに繪の修業に都へ旅立つんです。朝に夕に見飽もせず眺めた此の山國の高原へは、僕が立派な畫工になる迄は決して歸つて來ないんです、先生は何時迄も庭の草に水を打つては、淵明の詩を誦つて待つて居ると被仰るし、夫人は僕が立派な繪を持つて歸る時、御窓の所で見張つて被爲在て、一番早く僕を見付けて、種々な花で花束を編んで、僕が村の端れを這入た時、僕の繪にかけてくだされと御約束なすつたんです。僕は一日も早く都へ出て、綠や赤の繪具を長い刷毛で使つて見たくつて、明日の來るのが待遠く、幾度も幾度も夢に迄見ていたんですが、其の明日が愈々本統の明日に成つたのに、御可笑じやあ有りませんか、胸が擽られる樣で、何んだか涙が出そうなんですもの。

「あの星は貴方が御歸りの時迄も光つています」

石に刻むだ女神が呟く樣に被仰やる、勇ましい樣な、悲しい樣な氣が胸一杯になつて僕は無性に口笛を鳴らす、靜り返つて氣は狼狽た樣に池の隅、御城の角、杜の奥に波を織つて、やがて、あるかなきの反響を返す、返したあとは又元の靜さになる。右の方の村の眞中から何に驚いたか、

鳩の群が白い羽根と黑い羽根を亂して飛出したが、やがて一纏になつて慧星の樣に舞もとる。着物の裏が冷やりとする。

「貴方は、どんな繪を御畫きなさるの」

「それは種んな繪を畫くんです、立派な武士が劍を振つて烟の中から馬を飛して來る處も畫くんです、夫人の樣な方が、眞白な衣を着て、何時も御唱ひなさる樣な細い聲で、花の一杯咲いている河の縁を唱つて行く處も、それからあの、コローの樣な繪も」

僕は奥樣の御部屋に、澤山掛けてある繪のうちで、御本棚の上にある小さなので、山の上から、谷間の杜の頂を隔てゝ向ひの山の上を眺めた繪が大い好きなんです。黃昏であつて、下の杜は青暗く影になり、向ふの山の上丈け弱い日の光が反射て、其の下の角から白い煙が一筋、末をにごして登つて行く繪で、僕のまだ〳〵ずつと少さくて夫人に抱こしては、壁の繪を、あれや、これやと見せていたゞいた頃から、此の小さな繪が、ひどく氣に入つて、沈んで行く樣な落付いた色を熟視ていると、何んとなく心が引付けられる樣で、其の頃からコローと云ふ畫工の名を一番早く記憶たんです。

「貴方の冷しい眼を透る色を、貴方の優しい腦裡に寫したら、どんな立派な繪が出來るでしょう……私は、私は何時迄も、何時迄も此の御城に待つて居ますから、早う美しい繪を持つて御歸り遊せよ」

「あの星の下、あの星の下」僕は小聲で繰返した。胸が塞つて暖い血が頭腦の中を驅け廻る樣な

氣がする。華やかな都の樣、何時か夫人の處へ御遊に御出になつた、今度僕の御訪問する、黑い衣服に大きな派手な襟飾を無造作に結んだ眼の黑い方、周圍に一杯繪を掛た、あの方の御部屋で、僕もカンバスを立てゝ、長い刷毛を靜に振り乍ら、僕の繪をじーっと見つめる時の心持ちを、又何時もの樣に案へ出すと、靜寧しては居られなく成つて來ます。

「ねえ、あの星の下にある都は、矢張り此の國の樣な、山だの、谷だの、河だのゝ間に在るんでしようか」

夫人は急に僕の方へ御向きなすつて、首を心持ち傾げながら

「否へ、貴方の御出でなさる都はね、廣い海と、廣い河が合じ水を干潮たり滿潮たりする處にありますの、大きな御船が他處の國から種んな品物を積で來ては又出て行く處なんです、船から荷下す新しい御本を早く讀たい方や、他處の音便を聞きたい方は、青い路樹の下を、ぶつかる樣に歩いて被爲入る。他處からはピアノを彈きに御出なさる方も有りましようし、戰の歸途に、鬚だらけで寄る方もお有りでしよう。美しい玻璃盃には赤い御酒が燃ゆる樣な色をして、花の樣な光りに輝て居る塲所もあります、けれどもね、貴方は其の色丈けを御覽遊せよ、口を觸れては成りません、目覺る樣な衣服を召した、銀鈴の樣な御聲の御婦人達も被爲在る、屹度貴方が御出になつたのを嬉びます。種んな御話を伺ひたい、伺ひたいつて、貴方の圍を取り卷くでしよう、でも貴方は無暗に口を御開きなさいますな、清らかな血を舌へ集めずに、其の御立派な眼に集めて色の世丈けに御住み遊せよ。忙しい世は、忙しいと見て、力を刷毛の先に集めて、御近寄りなさらないのが、それが貴方の御使命です」

先生は御酒を召上る、けれども爺の樣に同じ話を何度も何度も、廻らぬ舌で話しはしない、御盃を少し重ねるとぽーつと赤味が差して、白い御鬚が美しい。長い杖を御突になつて、春が過ても、夏が過ぎても決して草を苅らせない御庭を、あちらこちらと御逍遙になる、御逍遙さなすつては詩箋を僕に持ち出させて絶句や何か御書きになる、あれは夫人の被仰る御酒とは違うんだ、先生の舌の上で、秋の霞の樣に、何時か消へて行くのかも知れない、けれども此の前の僕の誕生日に嫌かる僕に爺と二人がゝりて、到々無理に御飲ませなすつた、初めて僕は御盃に唇をふれた、でも後では先生の樣に心持ちよくならず、苦しくつて顏が光照つて困まつた事がある、先生も爺も、さも面白想に笑はれた、僕は本統に恨めしかつた、あの時の事を思ひ出して御話したら

『まあ、御可愛想にね、どんなに御苦しかつたでしよう。それは先生の召上る御酒は、あの玻璃盃につがれる御酒とは違ひます、先生のは、屹度、御庭の菊の蕋の中に、貴方が御眠ている間に溜つた花の精ですよそうですよ、屹度、そうですわ』

急に碎けて、石像は血の通ふ美しい人になる、笑ひ乍ら僕と並んで蔦の繞まつた石の上に、腰を下ろし僕の頭を胸にた抱きなすつた。

「都のはね、涙が出る御酒なの、笑ひたくなる御酒なの、そんな御酒を飲つたら繪を畫くのが御飽なさいますよ、私は嫌い、貴方も御嫌でしよう」

「それは僕だつて、だーい嫌です、先生の時は仕方がなしに飲んだんですが、他處の知らない人なんかゞ、そんな事を仕様ものなら、僕は劍術で敗してやる、十二歳だつて僕は隨分力がありますよ」

嬉し相に夫人は僕の顏を見て被爲在る

「ねえ、夫人、元氣淋漓障猶濕、眞宰上訴天應泣いつて云ふ油繪は甚麼んでしよう、そんな繪を先生は畫て持つて來いと被仰るです」

夫人は何も云はずに御笑なすつた、僕も何んだか御可笑くなつた、

「屹度ね先生は御床にかけてある雪舟の樣な繪を畫けと被仰るのかも知れないです、小さな横軸で、馬が澤山畫てあるんです、淡墨で体軀かくるゝと丸めてあつて、脚や蹄は筆を振うを合圖に、ぱつと飛んで來て、くつついた樣なんです、鬚を振つたのもあれば嘶いているのもあります、屹度あんな繪の本ですよ、コローとは少し違いますね」

夫人は又御笑ひなすつた。

山の上に見へた星のぐるりには又外の星が澤山光り出した、促織の織つた霞は遠い國境を隱して仕舞う、氣は緩やかに漂つて、足下に見へる向ふ村の壁か仄白い、河の縁、杜の端には燈か光り初める。空の燈と地の星は、此の緩やかな氣の中で、優しい呼吸を通はして居る樣である。

「早く立派になつて御歸り遊せよ、私一人で淋しいから」

何故か夫人は僕の未だ物心の付かないうちから都の立派な御邸を御出になつて、昔し殿樣か代

代御住になつた、此の大きな寂しい御城へ白髮の涙脆い老女と、先生と仲善の僕に劍術を敎へてくだすつた、矢張りお鬚の白い執事とを御連れなすつて、來て被爲在るんです、僕か憶てからも、殿樣は一度も御出がないし、夫人も御城を御離れなさらないんです、矢張り先生の樣に、雲の往つたり來たりするのが都の賑やかなのよりか御好なのかも知れません。何時か「でも御家へ御歸りになり度はないんですか、こんな寂しい所へ賑やかな都からいらしつたら、どんな御心持でしよう」と伺つた事があつた、其の時夫人は僕をしつかり抱緊て「ノワリスの樣な心持かも知れません、青い花が細い月の影に咲く樣な心持なのでしよう」と被仰つたが御聲がどうしたのか震へて居た「ノワリスと云ふのは矢張り畫工で」と伺つて見たか、それきり何も御話しなさらなかつた。

こんなにして毎日〳〵御友達に成つていた僕が、急にいなくなつたら、甚麼に御淋しかろふと思ふと、僕は急に眼の裏が熱くなつた。夫人はと見ると、傍を向て被爲在る、頰に亂れた幾筋の髮は風か無いのに震へて居る樣に見へる。長い間、二人は沈默たなり一語も話さなかつた、沈默つて居る方が、反つて二人共暫くは樂であるに違いない。

日は全く暮れて、そよ〳〵と風か吹き出した、睡蓮の白のが仄かに眼につく。窓は、知らない間に、眩惑い光を、ぞつしりと暗い石で細長く圍んでいる。又そよ〳〵と風か吹く。草の中で虫が鳴く。

「夫人、明日から僕か居なくなつたら御淋しいでしよね」

僕は思ひ切つて口を切つた。

頬か急に蒸す様に氣壓される。

「什麼に淋しう御座いましょう」

熱い涙か僕の手の上で、じゆつっ沸へた。

二人は又、長く、長く沈默つて居ました。山から來る、微風は、二人を繞つて、又何處かへ漂浪て行く。靜な晩です。

「でもね、先生は餘り御淋し想でもないんですよ、今日なんか朝から半日、僕を前に座らして御鬢を撫てながら、送別だと被仰つて淵明の詩を誦つて被爲在ので、癖が切れて弱つちまつたんです」と淋しさに堪らなくなつて御話しすると

「それはね、先生は人にれ會ひなさるのがお淋しいの、私は矢つ張り、人にお別れするのか淋しいんです」

と秘な聲で被仰いました。

偉大なる超然主義

河上駒水

Kein Hirt und Eine Herde! jeder ist das
Gleiche, jeder ist gleich: wer anders fuhlt,
geht freiwilligins Irrenhaus.

——Zarathustra——

人生は實在なり、架空にもあらず想像にもあらず、彼の山此の海と等しく嚴として存する一個動かすべからざるの事實なり、過去の罪業を恐れて人生以外更に永久の樂土ありとなし、これにあくがれこれを追求せよと教ふるは、節制なき愚夫凡人を拘束するに於ては或は不可なからんと雖も、而も現在に生きて現在に樂しみ、現在に働きて現在に死す、これ然しながら最も意義あり而して男らしき活動にはあらずや。

ファウストに有り、わが喜びはこの土より流れ、わが苦しみは彼の太陽これを照らすと、又曰く吾等は天國に行かん事を欲せず、ただこの土あれば足ると、思ふに彼の意氣地なき厭世者流が淨土天國の樂しむべきを說きて、一意彼の土を欣求すと稱するも、思ふにこれ激甚なる現世の戰鬪に疲れて、餘儀なく隱退せる敗者の叫びのみ、劣敗者が都合よき泣言に過ぎざるのみ、彼等は斷じて强者にあらず、意義ある人生をば徒らに空々漠々として經過せんとするものなり、宜なる哉、彼等の唱ふる所謂公共主義同憐主義或は平等主義なるものがあらゆる人類をして、そが向上的進取的精神を消滅せしめ、これをして一個卑しむべき傀儡に終らしめたる事や。

嘗て博愛は唯一の善なりと呼ばれし事ありき、この時幾多の僞善者出でゝ惱めるもの、病めるも

の丶爲めに救恤の計を爲しぬ、されどそは遂に徒勞なりき、彼等はこれによりてたゞ意氣地なき依賴心と奴隷心とを得たる外何の益もあらざりき、彼等は財用のあるうちは座して食ひ、盡くれば卽ち號泣して來り救はるゝを待つ、この時萬物の靈長なる人間は、かの獸類に於てさへ認め得べきてふ精神の威力を全く失ひて沈滯疲弊恰も浮萍の波のまにまに漂遊するが如く、そが活動心向上心は全く萎縮し去りき。

又嘗て平等といふ事が社會の理想なりと認められし時ありき、この時人はあらゆる制度文明をあげて平等一樣と爲さんと努力せり、彼等は非凡人を恐れ忌む事恰も蛇蝎の如く、少しにても凡を越えしものあるときは直ちにこれを狂と呼び異端と稱へ、世をあげてこれを痛擊せんとはかりぬ、識者之を罵りて曰く、彼等凡人はその平等主義を保護せんが爲めこれら非凡人に癲狂院を作れりと、かゝる無氣力無理想なる社會のいかで存續するの理あらん、幾何もなく强大なる侵略者の爲めに蹂躪せられ終んぬ。

又嘗て克己といふものが最高の善なりと叫ばれし事ありき、この時偉大なるべき人類の個性は全く沒却され蹂躪され、偏狹固陋些の進取的氣性なく些の向上的精神なく、人は皆定まれる一個の典型の下に追ひやられ、たゞ生氣なく活力なき團体を形成しき。

あゝ同情もよし、博愛もよし、平等もよし、淨土を欣求するもよし、然れどもそは程度に依るべし、あらゆる人類をして何等の活動心も向上心も無からしむる同憐主義、萬物の靈長たるべき人間をして、獸類に於て見るが如き卑しむべき奴隷心依賴心を起さしむべき博愛、或はすべての個性を滅却し去りて、偉大なるべき人間をして可もなく不可もなき凡々たる典型の下に追ひやらんとする平等主義、これら果して何の用ぞ、あゝ惻隱を斥けよ、惻隱は時に人を愚にするものなり、博愛を斥けよ、博愛は時に人を獸類たらしむるものなり、平等を斥けよ、平等は時に人を懶惰ならしむべきものなり、あゝ淨土を欣求する事を斥けよ、彼等は或意味に於ては現世に於ける人間の鼓舞的精神を滅却し去らんとするものなり、然り而して予輩が所謂偉大なる超然主義とは何ぞやといはゞ、かゝる疲弊を救ひて社會文明の發展に偉大なる勢力と活力とを得しむるものなりといはん。

超然主義とは何ぞや、曰く凡人を超越して現代を導き、これをして最高最大の發達に到達せしむべき强者の主義なり、天才の叫びなり、思ふに人智の發展は今日そが最高の域に達して、今や殆んど發展進歩の餘地なきまでに至れり、さはれ今日の人類を以て全然最終最高の人種なりと思惟するは甚だしき誤なり、人智の發展は猶無限なり無邊なり、現代の社會文明には猶幾多の欠陷はあり弱點はあり、從つてそが發達進歩の道程は猶遼遠なり、吾人は次代に於ては現代に於けるよりも更に數倍卓越せる文明、優越せる生活を企圖せざるべからず、かく努力せざるべからず、如斯して幾度も繰り返し進歩する時、かの厭世者流が稱ふる現世の苦痛醜惡は全く排除せられ、吾人が思想、文明或は社會なるものは永久に人生に再現して、而も毫末の厭惡する所なく、却つてこれを慾求願望するの結果とならん、かゝる思想を名付けてこれを超越思想といひ、そが先導者となりてかの愚夫凡人を鞭撻し敎育する所の偉人これを超越主義の人と呼ばんとす、超越主義の

人は卽ち超種の人なり、天才なり、强者なり、弱き羊を野に導くべき牧者なり、希臘に見よ、全州の人民が皆活氣充滿して、かのローレルの綠深きオリンピアの野に各〻そが技を競ひ己れそが優者たらんと腐心せるの結果、驚歎すべき希臘文明の流れは燦然として四境に溢れぬ、伊太利に見よ、かのタウンの勃興甚だしかりし僭主時代に於て、孰れのタイラントも皆一樣に他のタイラントの優越者たらんと努力せるの結果は、伊太利文明は恰も冲天の勢を以て進歩し來りぬ。

あゝ偉大なる優越者出でよ、超越者出でよ、彼等の出づるところ其處に偉大なる文明の進歩あり、彼等の導くところそこに長足なる社會の發展はあり。

飜つて現今社會の風潮を思ふ、あらゆる人間が競爭心を無視し一切の鼓舞的精神を排して、人間をして一個偏少なる典型の下に集合せしめずんばやまずとするもの、これ現代道德の理想にあらずや、あらゆる現世を以て無常と觀し穢土と卑しめ、徒らに不定不明なる彼岸他界を憧憬し、最も有意義なる現世に於ての活動心向上心を殄滅せしめんとするもの、これ現代の宗敎にあらずや、一人の天才者あれば彼等は擧げてこれを罵りこれを打ちて消滅せしめんとす、かくして出來上りたるもの、これを稱して統一無缺なる社會なり文明なりと稱す、彼等はあらゆる人間の思想感情を統一しこれを表彰するを以て文明の特色なりとす、これ畢竟自己獨特の性格を桎梏し束縛し去りて、平凡なる一個の典型を以て他人を强ひ、これをして同一なる思想と感想とを具有せしめんとするものにして、これ到底企及すべからざる事に屬す、宜なる哉かゝる平凡なる社會に生存する人類、所謂統一的文明と稱するもの〻下に蠢々乎として動きつゝある彼等人類を見よ、彼等は恰も汚穢なる沼澤に生ぜる腐草の如し、腐敗沈滯の泥土はその底に蓄積し、その惡臭と毒氣とは傍人をして殆んど窒息せしむ而も彼等は不知の間に毒氣と惡臭とに慣れ、一切の努力奮勵の氣は全く彼れが精神を去り、やがては彼等自身もこの泥土の中に葬られ去らんとするをも知らず、依然この腐澤の內にありて平然として起臥す、而も曰く統一せる文明は斯くの如しと、あゝ久しく鮑魚のうちにあるものはその臭を知らず、彼等は凡てのものに對し向上超越の精神を失へり、矛盾せる文明の弊は此世に滿つれども彼等は恬として省みず、却つてこれに阿諛し隨縱せんとす、この間一人の優越者なく一人の天才者の表はるゝ無し、彼等は實に牧者なくして羊を野に放たんとするものなり、何等の滑稽何等の無見識ぞや、かゝる社會は平凡なる約束を以て漫然相寄り相集まりたりといふの外、何等有意義の活動ある事なく、たゞ呑み食ひ談じ動くのみ、かの現今滔々として社會を風靡せる女性的懷疑的衰滅的なるデカダン風潮も、思ふにかゝる無意義なる人生の特產物に外ならざるなり。

而してかゝる思想の人心に入り易き、かの泰西文化の一度わが國に移植されしより既に數十年、而してその間に於て長き閱歷と歷史とを有する東西文明は端なくも接觸し輻湊し來りて、恰も百川の海に朝するが如く、これまで唯一の信條として奉ぜられし舊道德舊宗敎はこゝに全くその權威を失墜し、而も新道德は未だ全く建設せられず、幾多の確執幾多の矛盾は相續いて社會に起り、人は徒らに人生の歸趨に迷ひ、或は平等といひ或は同憐といひ、或は徒らに空漠なる他界彼岸を求め超然として社會の外に逸し去らんとす、而もこれによりて社會は幾何の發達改良を企圖

し得たるか、あゝ彼等は滔々として相率ゐて墮落の深淵に沈まんとするにあらずや、所謂世紀末的思想は深く人間の胸奥に刻んで最早や到底救ふべからざるの悲境に立ち至らんとするにあらずや、而してわが超越主義は實にかゝる衰滅的萎縮的なる風潮を矯正する事に於て好箇の防腐劑なり刺戟劑なりといふを得べし。

昔者羅馬が君主道德を固持する時に當てや、威風堂々眞に侵すべからざるの風あり、その莊嚴とそが威力とはあらゆる人間が仰望の中心となり、一度旌旗を進むれば滿天下爲めに戰慄しぬ、この時燦然たる文化一時に起りぬ、而も一度博愛平等主義なる猶太人と接觸するに及んで、人民はそが平等公共主義の弊のみを入れ、その結果は、人はあらゆる苦痛煩瑣不安を避けて、安逸放埒の境に居らんとし、病的萎縮的なる思想は一般人民の心を襲ひ、社會は疲弊困憊して恰も骨無き海骨の波に漂ふが如く、遂にそが敗殘の腐體をあげて强大なるゲルマン人の餌食となし終んぬ、知るべし平等同憐主義の如何に人心を蠹毒するの甚だしきかを。

ナポレオン、ボナパルト、彼等實に絶大の超越者なり、世はあげて平等一般の甘味に醉へるの時、彼蹶然立つて獨力歐洲を席卷せし元氣は實に意氣地なき奴隷的國民をして震駭せしむるに足りき、

あゝ偉大なる超越者出でよ、現時の疲弊せる倦怠せる耽溺せる社會を救ふべくそが先導者出でよ、先覺者出でよ、然してあらゆる墮弱なる人間病的なる人間を鞭撻叱咤せしめよ、然して共に進むときそこに偉大なる社會文明の進歩は起らん。

然れども誤解する勿れ、予輩が主張する偉大なる超越主義は極端なる個人主義にもあらず、又世の所謂我利主義にもあらず、かの覆面せる博愛主義意氣地なき平等主義、或は徒らに情を矯め僞りを飾り偏狹固陋、何等進取的向上的精神もなき克己主義、或は社會人類の進歩に大なる障壁となるべき同憐主義を斥けんとするのみ、實にやわが血あり涙あり、働くには十分なる活力もあり、進歩するには猶十分なる能力あるべき現代の人間をして、現時の樣に沈滯疲弊せしめたるは實にこれら卑しむべき道德なり宗教なり、似非慈善なり、博愛主義なり、極端なる克己主義なり、予輩が超越主義を主張するはかゝる害毒に惱まされたる現代人をして、この墮落疲弊の淵より救ひ出さんとするに外ならず、予輩が超越者を崇ぶはこの超越者によりて吾人が靈的生命を充實せしめ自ら勵み自ら努め、ひいては社會文明をも大なる發展あらしめんとするに外ならず、予輩は彼の痴愚なるものを僞りてこれに超越せよとはいはず、幼者は愛せざるべからず、老者は勞はらざるべからず、たゞ活力ある現代人をして斯くの如く沈滯せしめし大なる原因なるかの克己主義抑壓主義或は平等博愛主義に對して、絶大なる反抗の氣炎を高めよと主唱す、この意味に於ける超越主義は個人主義にあらずして同進主義(いひ得べくんば)なり、破壞的にあらずして建設的なり、壞滅的にあらずして進歩的なり、胸に燃ゆる熱烈の情あらばあゝ青年よ、徒らに不定不明なる他界彼岸を憧憬するよりは寧ろ立つて醜惡なる現世と戰へ、然して常にこれが超越者たらん事に努力せよ、超越は決して我利的にあらず、利己的にもあらず、超越の人は實に社會の先覺者なり指導者なり、社會文明の上に大なる貢献を爲すべき强者なり、これを抑壓せんとするは自ら强者にあらず、才能なき痴漢ならんのみ、老衰者のみ、恐るゝに足らず、驀進せよ、奮鬪せ

よ、然して常にそが强者たらん事を期せよ、然して人々相勉め相激みて進むとき、そこに偉大なる社會文明の進歩は起らん。

再言す偉大なる超越主義は斷じて利己主義にあらず、破壞にあらずして建設なり、沈滯にあらずして進歩也、超越也。

鐵道馬車

みつを

「もう出ますでせうか」

先刻から待ち遠しそうにチョンボリ隅つこの所に腰をかけて居た男は、白い風呂敷包を側へ置いて、その上に左手をのせたまゝ馬車の箱から一寸外を眺め、又僕の方へ向き返つた時にこう云つた。筒袖の、いかにも貧相な顔付の、しかもそのどこやらに柔しい色のある顔である。

「そうですね、もう時間も過ぎて居るんですから」

「そうですか」

とその男は口元に笑を浮べて下をむいた。僕の隣には、友の秋田君が、兩手を袂へ引込ませ顎を襟に埋めて眠つたそうにうつむいて居る。秋田君の隣には、村役場員らしいが威張り氣味に坐つて居る。その隣は、これも筒袖の、行商人らしい男で、此四人が丁度こつちの一列をなして居る。行商人の前に居るのは、十七八になる女で黑みがかつた紫の被布に綠のショール—田舍だけに此年頃の娘でも安い毛糸のものであつた—をかけ、たとなしく膝の上に置いた手は、右の方だけに手袋をかけ一方は脫いだまゝ握つて居る。その右隣は、その若い女の母親らしい四十近い肉付の好い女で、黑いコートを着て坐つて居る。あばたのある顔にしては馬鹿にやさしい聲で、娘と話して居る、二人共、余り聲が低いので此方へは何やら少しもわからない。その隣卽秋田君の前の處には誰も居ない。それで僕の前は、先に云つた筒袖の男である。

暫くすると、古い色のさめた外套の御者が、足駄ばきで馬を引張つて來て手早く箱の前へつけた。馬は毛のムシヤクシヤした、ほんにきだない馬。

「シユッ」

ふりあげた鞭で、馬の背をバッサリ一からみやる、御者臺へ上る拍子に、何人乘つて居るかなあと云ふ風に、こつそり箱の中を見る。

「シユッシユッ」

と云ふと、馬は呑氣に歩き出した。馬車も仕方がないやうに三四間も引張られて行くと、停留所の前の處は、少し線路が曲り氣味になつて居る。そこへ來ると不意にガタンと馬車は線路から右の方へ外れて了つた。「チエッ」と舌打ちをして御者は臺から飛び降りる、と二三度けしかけて見たが、馬は物うさそうに少しばかり奮發つて、すぐに又知らぬ顔に立つて了ふ

「何だ、人を馬鹿にしてらぁ」

御者は鞭を雪の上に投げて、外套の襟をかき合せながら叫んだ。

「オイ權次！　手傳つて呉れよ」

權次は停留所の中からノソ〳〵と出て來る、五十にもなる、た爺さんとも云ふべき程の人で、今金澤から馬車を驅つて來たばかりで一休みと思つた所を呼び出されたので、顏は巧に作り上げた佛頂面、煙管を右の方へ横にくはへながら、古い古い兵隊靴のその又無暗に大きいのをはいて居る。

「馬鹿な眞似は止して呉れや」

權次のふくれ面が箱の下をかゞんで見て。

「た客さんに降りて貰はにやとても駄目や」

と、きいたことを云ふ。停留所からは切符賣らしいのが出て來る。

「お氣の毒ですがどうぞ、一寸でよろしうございますから」

「エ」

と僕は一番出口へ近いから眞先に出ると筒袖も降りる、例の村役場員が澁顏で立ちかけるはづみに、二人の御者が一生懸命に持ち上げた馬車は再びガタンと線路へはまつた。役場員はヒョロ〳〵と前へのめる。

「もうよろしうございます、眞にすみません」

切符賣は頭を一寸まげた。降りた人々は又乘る。同じ所へ皆腰をかけた後に續いたのは十六七の中學生、徽章は確に金澤の○○中學の生徒である。秋田君の前の空いた所に座る時、ふと隣のおばた女と顏を見合せた。

「ヤー先生ですか、どちらへ」

馬車はいくらか元氣よく動き出した。今迄のうつとうしかつたのが心よく晴れ渡る。

「バイ金澤へ」

とおばたは狼狽しながら答へた。若い娘の方は、中學生をチラリと見たが知らない人と見えて默つて居る。

「どちらにお下宿ですか」

先生と呼ばれたのが、今度は尋ねる。

「堅町です」

「オヤ堅町ですか、私も堅町ですよ」

中學生は知つて居たと云ふやうな樣子。

「山田つて云ふ家でせう、表に格子のある」

聲は相變らず普通の聲で、女は反對に余程びつくりする。

「如何して御存じですか」

「よくあの家の前を歩くんですから」

ふところへ手を入れて卷煙草を一本出した。生意氣がつてマッチの火を點けて、得意そうな顏が僕等の方を見る。秋田君は吹き出して笑ひ、僕はその方をにらみ返した。中學生は何とも知れない顏をしてこつちを見て居る。

「チッとお遊びにお出でなさい」

女が云ふと、中學生はそつちを向いて何のあつけもない。

「ハ」

抑も「ハ」とは都合の好い返事、氣の向いた時向かぬ時、人を馬鹿にした時ほめた時、何でも構はぬ、相手の解釋に任せて此方は云ひ放し、相手も亦聞き放しで差支がない。馬車は今金石街道を金澤の方へ眞直に早からずのろからず。自分は

「金石の海岸も惡くはないですね」

と云ふと、秋田君は意を得たりと云ふ口振りで

「夏になるともつと好いですよ」

「そうでせうね、日本海は大平洋とは何だか物凄いでせう」

かく云つて自分は、あの逼つて來る日本海の高波の姿を思つた、波がずつと高まれば、白い布を頭から頭へ張つて立つた一列の群集にも見える。崩れる浪は白布を呑んで更に幅の廣い布を頭に付けて、前よりいくらか岸に近く進んで來る。進み終つて其群集が一齊に岸にひれ伏した時に、白布は數千の小破片となつて砂の中に入つて了ふ。秋田君は少し離れた海岸に小高い砂山を指じた。

「あれが砂丘と云ふんでせう」

「あれだあれだ」

自分はすぐに前の筒袖の男に眼を下した。隣に中學生が坐つたので白い風呂敷包は膝に乘せて抱いて居る。包は古着でもあるらしくブハ〳〵したもので、汚れた皮の煙草入から吸ひ始めると惡い煙草の醉はされるやうな香が箱一ぱいになるので、二人の女客は迷惑そうに、窓を開けたり閉めたりして居る。

「もう大野ですよ」

秋田君は首を擧げて云ふ、向ふからも馬車が來てこゝですれ違ふと馬車は止つたが、乘り手も降り手もない。路が眞直なので二つの馬車は余程離れてもよく見える。並木の間を行く馬車には一種の趣があるやうに思はれる。特に松と云ふ風流な樹だけに一層深く此感を腦に刻りつける。今朝歩いて來た時は、雪があつて歩き辛かつたのが、今は松の根つこの所にチョイ〳〵あるばかり、デコボコに石のたくさん出て居る路を金澤の方から來る人が幾人も通る。人々のゾロ〳〵と來る頃は、時間は五時にも近く、冬の日は今は少し暮れかゝつて居る。金澤の家の見える程には通る人も少く松の並樹も漸くまばらになつて來た。馬車は金澤停留所の前にガラ〳〵と入る。

「ようやう着いた」

自分の前に居る筒袖が欠伸を耐へて叫んだ。

と、あの大きな濁つた彼が自分を沖へさらつて行くやうな心地に、秋田君の後になつて改札口を出た。

「お母さん急ぎませう、日が暮れるといけませんから」

娘の若い華やいだ聲が、後から追ひかけるやうに聞えた。秋田君は默つて自分の前を歩いて居る。」（終）

フランチェスカ姫

青花生

――ダンテ「神曲」地獄界第五章――

小序

十三世紀の末、南歐の山河は戰塵に覆はれ血腥い風は天下至る處に吹き荒んだ。頃しも水碧きポー河の畔り、ラヱンナの都にグイドォ、ポレンタと呼ぶ國主が居た。形勢日々に非なるを見ては流石戰亂の世の心細く、折から武威赫々たる隣邦の主、リミニィ家の總領ジョヴンニに己が娘フランチェスカをば嫁がしめて和親の約を固めようとした。此ジョヴンニは十八歳の初陣に拔群の功を奏し、二十六歳にして嶄然として頭角を現し群雄の覇を握つた程の英傑である。然るに風采は太た揚らず、剩へ跛なのでジャヂオット、或はシャンカアト（跛のジョヴンニ）、と呼ばれて居た。そこでグイドォは一策を案じジョヴンニの弟パオロをして婚禮の使節たらしめ以て一時を彌縫せんとした。これが抑も事の誤りであつた。

姫は後庭の葉がくれに使節パオロの姿を垣見み、こゝに抑ふべからざる愛着の念を生じ、また腰元どもの言葉により一途にパオロを許嫁の夫と信じて了つた。

やがて婚儀の大禮、終つて其夜直ちに二十哩の松林を夢路を辿る心地してラヱンナからリミニの邸に輿入した。さて姫は偏へに、パオロとのみ思ひつめて居たものを、曉の枕かみに傳へも聞きし醜夫ジョヴンニの姿を認めた時、恨み、つらみに一時は身も世もあらず嘆いたが、家のため父のためを思ひやつては、さすがに心をとり直して同じ城に、パオロと物語りその姿を見るのを、せめてもの心やりとした。しかし胸の奥に芽ぐみそめた想ひの草は容易に枯れ萎むものでない。切なる相思の情は一日、人目なき小亭に圓卓の騎士ランスロットの物語を繙いた時、終に罪ある戀と破れ出でた。此時ジョヴンニは從僕の告口により、やにはに劍を執つて室内に躍り入つた、パオロ目がけて突きかけし太刀はフランチェスカの遮る處となり思はずも姫の胸板を貫いた、これを見て激怒せる彼は返す刀に覺悟の体のパオロを斬つて捨てた。以上はボカチオが物せしフランチェスカ傳説の梗概である。

千二百八十八年頃の事なりと云ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

詩聖ダンテ、三十五歳の春、花の都の郊外なる、影くらき森の中を夜もすがら彷徨つて死にもまさる惱み心地を覺へつゝ、やがて、辿りゆく山の麓に猛獸の行手を塞ぐのを望んだ時、忽然と詩人エリギリゥスが現はれて、いろ〳〵の啓示を垂れた。遂にその指導によつて洞坑に入り、地底に下り、茲に夢の如く幻の如く三界遍歷を全うした。

地獄界第二圈。これからが眞の地獄である、幽界の法官ミノオスは恐ろしげなる面構へして罪囚の懺悔を聞く、道ならぬ戀に耽りしものはこゝに永劫の呵責を受けて居る。噪林鳥の寒空を渡るように旋風に飄揚して、絶間なき搖蕩に歎き悶への叫喚は片時も止まない。ダンテは此處で色に傲りしクレオパトラ、愛のために自ら殺せしカルタゴのディドウ、放縱なる振舞に百代の語り草となりしセミラミス、さては十年の碧血をトロヤ原頭に灑がしめしヘレネ、奇しき酒に身を過まりしトリスタンなど名だゝる麗人騎士を見た中に、わけて哀憐の思、同情の念、忍び難きまでに詩聖の腸を刳つたのは相擁し乍ら地獄の闇に揉まるゝフランチェスカ、パオロの雙影であつた

＊　＊　＊　＊　＊　＊

行手、狂飆の闇空に揉まれ漂ふ囚人を
呼びとめぬ。「あな、いぢらしの睦魂よ、

咎むる人しあらざらは疾く來てわれと語らずや」。
斑鳩の、番ひ離れぬ歡樂に
伸羽並め、はしき鳥栖の方ざまへ
思ひに任せて翔くるがごとく、

ディトゥが立ちてし岸邊より
渦卷く瘴霧押しわけながら
同情たまへの眸も、切なるさまに浮び來ぬ。
「現身ながら葡萄色の八重なす雲を踏みしだき
濃紅の汚穢に世を染めし、業垢の人を巡りて
闇穴道に訪ひ給ふ、情のほどの嬉しさよ、
天が下、知ろす帝の友ならば
踏迷ひてし悲愁に、涙を賜ふ酬ゐにと
君がため、「靜寧」を願ぎまつらむに。
よしなし言を聞えむは、まこと無禮に似たれども
切なる君が御こゝろに
幾山河のこし方を、艮風のひまに、ものがたりてむ。
わが故郷は小陶綾の、磯邊に建てる大都

こゝだくの、いさゝ里川集へつゝ、
静寂の御座、求めゆく、ポーの流れの片ほとり。
戀よ、優しき若人の胸なる龕に忍び寄り
　迷はせぬ、愛のまどびに醉ひしれぬ
さるを、在りにし花の面影、移ひはてし悔しさよ。
戀よ、さりやな、思はれて思はぬはなき世の習ひ
　むらさきや、深き契りに絆されて
見給ふ如く永しへに、變へぬ比翼の仇姿。
戀こそはげに我らをば、一つの死にぞ導きつ
　殺めし人も、やがて亦、無限地獄に陷らめ」と、
打蕭りたる聲音して姫は徐らに云ひ出でぬ。
悲痛の極みなる、物がたり耳にして
　暫しが程は頸垂れつ、うち沈んでぞ居たりしが
師の君の、袖捉りて、「何をかは案ずる」と
問はせ給ふに驚きて「あな、可憐の冥府の人
　何でふ樂欲、いかなる情念、凝結ればか
露けき路に汝らを、惑せけむ」と見上ぐれは

彼方も同じ心根に、言はまほしげの風情なり、
「フランチェスカよ。いましが深き懊惱にぞ
いや泌みわたる嘆かひに淨き涙の絞らるれ。
さはれ語れな。――苦しくも嬉しかるべき下萠に
　いかさまに、はた何をもて罪業の道
山下水に書き染めし憧れ心、覺えしぞ」。
姫は答へぬ。「煩ひの悲哀しき淵に沈みては、
　そのかみの、歡樂の莚偲ぶほど
世に憂れたきはあらじかし。そは師の君も知り玉ふ、
さはさり乍ら、人の世の、苦き戀路の山踏も
　御心に、等閑ならぬものあらば
涙ながらに、聞えまつらむ。
とある日なりき。徒然に、囚へられたる戀見んと
　ランスロットの物語り、高打つ胸に繙きぬ。
二人しめたる小室なれば誰れ憚るにあらねども
　ゆくりかに、合はす瞳に戰慄きて
忽ち褪する兩頰の色、面照りせしも幾そたび

さはれ漲る若き血を、たゞに抑ふるものありき。
　辿りぬ。かくて、ひたぶるに、ありし掛想の貴人が
こゝらの年を憧れの思ひ遂げてし、――その時よ
絡み縺れて斷れがたの深き緣の彩糸や
わか背の君はより添ひて打顫へつゝ唇づけぬ。
ガレオットこそ、この書よ、はた物しけむその人よ
此日また、讀まざりき、此日また』
　姫の生靈の語れるひまを
他なるは、歔欷もよゝと咽び居ぬ。
あまりに脆き宿命に、あはや息詰み氣は萎へて
　黄泉路の人をさながらに、われは倒れぬ。

（ロングフェロー及びロセッチ譯より）

鈿生足下に與ふ

（再生存競爭と人道）

野口保一郎

一

鈿生足下、余今春故山に歸り、常州の山に起臥する十有餘日、昨夜晩鶉を追ふて再び金城の人となり、今宵燈を机上に寄せて近日發刊せる北辰會雜誌第五十四號を見る。會々余が嘗て△○の匿名の下に草せし一文「生存競爭と人道」に關する疑問に對して、足下が雄健の筆を以て、丁寧反覆應答の勞をとられしは、余の感謝措く能はざる所なり。されどもいかにせん、足下の言未だ余に充分の滿足を與ふるなきを、故に再び蕪辭を連ねて、重ねて足下の高敎を仰がんとす。勿論余の草せし文は疑問なり、疑問以外に意味あらざるなり、先つ生存競爭の慘狀を述べ、次にマルサス氏の人口論より生存競爭の免るべからざるを推し、これを歷史に證し、國家主義なるものと人道、人道と宗敎との關係を論じ、生存競爭が吾人終局の目的なるべきかを問ひ、次に生存競爭と人道とが相一致すべからざるを說き、他愛的人間の靈性よりして、人道の麗美なるを讚し、以て氷炭相容れざる二個の勢力に對し胸中の疑問を吐露するに至る。然るに足下先づ人道の起源を說き、次に生存競爭の免るべからざるを論じ、最後に人間天職の自覺よりして、兩個互に調和して、人道は生存競爭のモデファイヤーたるべきを以て結ぶ、而して足下と余との相違せる點は調和、不調和

にあり、丸い卵も切り様で四角、要するに宇宙の眞理も其の觀察者のいかんによる、自力を可とするものあり、他力を主張するものあり、樂天を說くものあり、厭世を述ぶるものあり、一元論をいふものあり、二元論をなすものあり、されども皆これ其の觀るところ、其理由となすところ異なればなり、足下にも足下の觀るところあらん、余も亦余の觀るところあり、余は敢て生存競爭と人道とを一致せしめんとするものに非ず」又强ひて生存競爭の悲慘なる半面を人道を以て裝飾せんとするものに非ず、唯吾人が小なる眼球に反映する社會の起伏格鬪の樣を、直覺的に、又最も公平に述べんと欲す。以下、順を追ふてこれを論じ、以て足下の熟考を煩はさんかな。

二

鈿生足下、余はこの章に於て、生存競爭と人道との起源を述べんとするに先ち足下の誤解を避けんがために、人道と生存競爭との意味を解說し置かんと欲す。而して余が生存競爭なる意味は、足下がいふが如き所謂天職を自覺してこゝに生存の慾を生せしものに非ずして、却て夫の進化論者がいふが如く、生物が無限の增殖に對して、自己保存、子孫繁榮の二大本能に基き、適者生存、優勝劣敗の陶汰作用を指すに外ならず。されば〈レン民族の覇權落ちてラテン人種の興隆となり、羅馬帝國瓦解して、北方、日耳曼民族の榮華となるが如きは勿論生存競爭の現象にして、富民益々其の基礎を固め、貧民愈々其の位置より驅逐せられんとするが如きも亦生存競爭の狀體なり。生存競爭ありてこゝに優勝劣敗あり、優勝劣敗ありてこゝに敗者悲慘の狀あり、これ生存競爭上、看過すべからざる事實なりとす。

次に人道とは猶太亞的道德を意味して、他愛を以て主張となし博愛を以て中心とし、一視同仁、四海同胞を標榜せる一大主義なり、これを以て如何なる理由あるにもせよ、他を侵し、他を苦むるが如きは爲すに忍びざるの所、他を愛するに己れを愛するが如くし、時には他人のため生命を擲ちて其身を犧牲となすも厭ふところに非ず。要するに人道とは我利我執に流れ易き人間の本性を抑へ、其の靈性を掩ふところの妄念を排して、玲瓏玉の如き他愛の精神により、同情の涙を敗者たり、弱者たり、不具者たるものゝ上に濺がんとする所爲に外ならざるなり。されば生存競爭は自己を第一として成立せる行爲なり。人道は他愛を主とせる博愛主義なり。源異なれば末異なり、因異なれば果亦從て異るは、自然の數にして、生存競爭と人道とは既に其の出發點卽ち其の源に於て異れり、されば其の末流各々相分れて、互に衝突矛盾の結果を生ずるは、亦免るべからざる所なりとす。勿論利己と雖も全然野獸的利己もあり、他愛的利己もあり、他愛にも純粹の他愛もあり、利己的他愛もありと雖も、一は己れを中心とし、一は他を主となすに至りては何ぞ異ならざらんと欲するも亦得べからざるに非ずや。若し吾人が其の利益を共有する場合、卽ち一方の利益となり同時に亦他方の利益となるが如き時は、兩者の間に矛盾衝突の起るべき筈なく、相兩立し得べきは火を睹るよりも明らかなることとす。されども甲乙兩者の幷立すべからざるの時に當りては自愛を中心とせるものと、他愛を主眼とするものとは、相異なれる結果を生せざるべからず。見よ、泡沫飛散、激流岩を嚙む深潭に於て溺者を見出すの時、或は一身を殺して以て社會幾多の人間の幸福を增進し得べきの時、而かも胸中何等の自利的報酬を豫想せざる範圍に於

て、奮然博愛的精神のために救助に赴き、身を棄て、財を擲ちて省みざるものは、眞に至美至麗なる他愛の賜にして既に利我的犧牲の結果より現出せるものなり、利我的犧牲ありて、こゝに他愛の完全に遂行せらるゝを得、余の論せんとするはこの塲合に外ならず。

足下若しこれを疑はゞ余は最も見易き例を擧げてこれを證せんか、近代歐州の文壇に於て、一は自己中心の個人主義を以て、一は平等的博愛主義を以て、互に異彩を放つものはニイチエとトルストイとの二大文豪となす。前者は自己を主とせる思想家なり、彼れは地球を以て宇宙の中心となし、自己を以て地球の中心とせり、これを以て徹頭徹尾基督敎の道德に反抗して呼ぶに奴隷道德を以てし、禁慾を罵り、同情を罵り、博愛を笑ひ、社會主義を笑ふに反して、後者は飽くまで愛の福音を受けて、基督敎的道德を保護し、惱めるもの、貧しきものを憐み、病めるもの、弱きものを助け、非戰論を唱へ、使打頰主義を主張するに至りてはいかに自愛と他愛とを以て根蔕とせる二大主義の相違せるかを知るべし。

人智を廣め、利用厚生の道を開かんがために或は賞を懸け、或は特許を與へて、發明發見の奬勵せらるゝ今日、人は年月と苦心とを積みて世道人心の爲めに裨益せんとする今日、猶吾人が軍事上の秘密なる語の下に、種々の發明品の隱掩せらるゝを見るはこれ果して何の故ぞ、これ等の中には或は公益を增し、或は世の文明に貢獻し得べきもの決して少々に非らざるなり。而かもこれを秘し、これを隱くし、以て一般人間の幸福を妨ぐ所以のものは、畢竟己れを愛せんとするものは、他を愛するを以て後となし、國家を維持せんとする者は、人道の顧慮を後にせざるべからざるとの理由より出でしものとす。

これを以て是れを見れば利己的根本動向より出でし生存競爭と他愛的精神より出でし人道との間に矛盾、衝突ありといふも何ぞ怪しむものあらん。竟畢人道は至美至高なる理想の女神なり、人は其の崇高慈悲の德を慕ふて止まず。生存競爭は嚴肅なる現實の男神なり、人はこの神の支配影響を免るべからず。故に人は徒に一を彌縫して生存競爭の醜貌を掩ふに人道の假面を以てし、正義の裝飾を以てすと雖も、矛盾は矛盾なり、衝突は衝突なり、これを否定せんとするものは宛から口に動物虛待妨止の論を唱ひながら、膳に美肉の供給を拒む能はざるが如けん。鈿生足下、余は夫の死學者の迂說の如く、徒に理論にのみ走りて實際に遠かるを耻づ、以下少しく現代の趨勢につきて論及せん乎。

三

鈿生足下、余はこゝに國家主義なるものゝ起源を探り、人道との關係につきて觀察せざるべからず。天の覆ふところ、地の載するところ、何れの人種、何れの國民を論せず、施すに博愛を以てし、遇するに平等を以てし、一視同仁、四海同胞の大道理の下に、少しの區別もなく、聊かの偏頗心もなく、公明正大、自由と平和との裡に太平を謳歌せんとす。道理を以てこれを視、理想としてこれを考ふる時は、誰れか博愛平等の至美至靈の光彩に幻惑せられざるものあらん。然りこれがために東西の二聖は世界主義を提げて起てり。羅馬時代を經て中古に至り、學者政事家が徒に理論の公正にして、外貌の華美なるにのみ迷ひて所謂世界的國家は彼等の理想なり、希望なりき。

かのゲーテ、シルレルの徒が猶世界主義の麗はしきに、戀々たりし時代ありしを見れば、當時の思潮の傾向如何は思ひ半にすぎん。されどもかくの如き平和的の天國は要するに宗教家一派の幻想にすぎざりしか、世は愈々過渡の時代に入りたり、十九世紀の曙光照らし初むるに至りて、カント、ルーソー、の徒が盛に唱導せし道理主義は一世の巨人那翁が腕力主義のために破壞し盡されて餘燼を止めず、血と鐵とを以て二十餘年縛れに縛れし佛蘭西革命の名殘に人は夢より覺めたる嬰兒の如く驚けり、自覺の光は全歐の地に輝き來りて、新思想の萠芽は發せられたり。曰はく、「人類は道理のみによりて支配せらるべきものに非らず、却て盲目なる意志の力によりて支配せらるべきものなり」と、かくて各國民は雨後の草木の如く色づき初めぬ。國家主義の勃興これなり。抑も國家の成立は生存競爭なる現象に對抗せんがために生ぜしに外ならず、適者生存、優勝劣敗ありて、こゝに社會は進化し、國家は發達して、遂に世界終局の文明を現出すべきは、言を俟たざるところとなす。かのルーソーの民約論に稱するが如く、國家が契約によりて成れりといふが如きは荒誕無稽の論たるを免れず、自己の幸福を保護せんがために、時に野獸を狩り、時に外敵を防がんが爲めに、個々の家族は集りて部落をなし、部落は合して社會をなし、遂に國家の組織となれり。畢竟其の古代に於て個人的生存競爭なるものが、時代の進歩につれて團體的競爭となり、其の風俗習慣言語系統歴史を同じくする部族が、相結んで攻守同盟を形づくり、一統治權の下に隷屬して、相對峙するの姿を呈するに至りしは、時代の要求、否自然の勢といはざるべからず。次に團體の指揮者、卽ち君主も亦生存競爭上の影響より出でしものにして、一定の指揮者なく、一定の統一なく、いふところの烏合の團體は、到底統御者あり、紀律ある團體の敵にあらず、これを以て國家の成立は生存競爭の反動の現象なり、生存競爭なければ國家なく、國家なきところには生存競爭激烈ならず、されば南方亞弗利加の內地、北方エスキモーの蠻族の中には決して國家あることなし。

國家既に成立せり、然らば何によりてこれを保持すべき、曰はく、堅固なる統一、及び猛烈なる腕力これなり。內は健全なる統一あり、外は頑强なる腕力ありて、こゝに國家は百年の長計をなし、生存競爭場裡、陶然桃源の夢を貪るを得べき也。これに反して內は團體の結合堅からず、外は對外力の薄弱なる國家にありては、其の富强望むも又得べからざるなり。

されどもこゝに注意すべきは、國民の統一と猶太亞的志想の人道主義とは、互に相容れず、相一致せざることゝす。一は國家を中心とし、一は世界を主とす、一は理想を尊び、一は現實を重んず、一は偏愛を以てし、一は平等を以てす。其の生存競爭の何物たるかを知覺せざるの時代にありては猶可なり、一旦其の意義を悟るに至りては兩者決して並行し得べきものに非らず。これを以て十九世紀の中葉以來、國家主義の到る處を風靡するや、一千餘年國家に附隨して、其の調停に盡力せし基督敎は國家以外に遠けられ、今やルーソー一派の道理主義は、いづくにか消え去り、所謂腕力主義これに代り、世界の平和、正義人道は死學者の夢と罵られ、二百年間惡魔の代辯者なるが如く見做されたるマキアベリー主義は再び時代の鏡として尊重せらるゝに至れり。

勿論吾人はマキアベリー主義を悉く信ずるものにあらずと雖も、亦一部の眞理の含蓄せらるゝを

認めざるべからず、多くの人がマキアベリーを目して利己の權化となし、自己の目的の爲めには、其の手段の善惡を擇ばざるものとなすは少しく酷に失するならん。彼れは思ひらく、「現代に於ては國家は最上の善なるが故に、國家を外にしては文明的の存在は到底出來ざるが故に、吾人は先づ國家を尊重せざるべからず、國家に對してはいかなる犧牲をも厭ふべからず、道德を保護するものも國家なり、吾人の財產幸福を保護するものも國家なり、吾人の文明事業を保護するものも國家なり、青々たる山、潺々たる河、渺茫たる原野、皆國家の保護を待ちて存す、國家ありて初めて道德あり、權利あり、吾人の文明は永久に傳はるべきなり、國家なければあらゆる幸福は破壞せられ、吾人は苦痛虐待の淵に沈淪せざるべからず、これを以て國家の主權者たるものは、手段の善惡を論せず、道德宗敎の如何に關らず、國家存立の目的のためには、いかなる方法を用ゆるも國家の繁榮を祈らざるべからず」と。苟も一國の存亡を雙肩に擔ひ、國家の柱石と仰がるゝものは又這般の意氣なからざるべからず。

論じ來り論じ去る上述の如しと雖も、余は決して人道なるものを認めず、又自我的世界を以て滿足し得べきものに非らず。唯過去の歷史に考へ、現時の趨勢より推す時は兩者の決して相一致すべからざるを悲しむものなり。たゞに歐洲に於けるのみに非らず、支那に於ても仁義道德の說は早くより行はれしにも關らず、春秋戰國より、隋唐宋元明の時代を經て、現王朝の世に至る二千年間、支那中原に於ける漢人種、蒙古人種の軋轢は暫しも相止まず、一盛一亡、南北に相驅逐する樣は、誰れか其の中に博愛あり、人道ありて、この行動を制限したるを認めん。卽ち國家主義なるものは、其の假面をいかに裝ふと雖も、其の正義をいかに標榜すと雖も、人道なるものとは相容れず、相一致せず、彼等の機會と口實とが許す範圍內に於て、世界の表面に可成的多くの領土を得んとするは掩ふべからざる事實なりとす。見よ、フレデリック大王はマキアベリー主義の攻擊論文の起草者として、其の名聲の嘖々たるものなり。而かもシレシヤを得んとして、墺太利相續戰爭を喚起したるを初め、彼の事業概ね、國家主義より打算したるマキアベリー主義の事業にあらざるなきを。かのヘーグの列國平和會議に於て、露帝が一代の平和論者たる、女らしき男、男らしき女に圍繞せられて、提出せし平和條項の如きは最も人道的理想に叶ひたるものなるべしと雖も、而かもこれを贊同せる露國內閣の眞意は、亞細亞の經營を完成せんがためにこれを以て平和の假面を裝ひたるものなりといふものあるに至りては、現代の趨勢と人道とがいかに相背馳するかを疑はざるを得ず。

鈿生足下、社會の事物は理論の高尙なるのみを以て推察すべからず、公明正大なる人道のみを以て解釋すべからず、若し生存競爭が人道もてモデファイせられて、人道の以外に出でずとすれば、何ぞ巴爾幹半島の風雲永く歐洲の一角にうずくまるや、北米の排斥問題何ぞ速に解決せられざる、諺に云はく、「人道は賢人の夢にして、戰鬪は人類の歷史なり」と。

四

砲聲は天に轟き、硝烟地に漲り、劍影其の間に閃く、打つものあり、打たるゝものあり、叫ぶものあり、斃るゝものあり、血は流れて河をなし、屍は積んで山をなす、これ慘憺たる戰場の光景

に非らずや。更に飜つて又平和の戰爭なるものを見よ、所謂生存競爭の勝者たり、適者たるものが、或は己れが天賦の能力と腕力とに誇り、或は無能徒に祖先以來の財寶の壘に據りて、無殘や、弱者敗者の上に射擊しかゝることのすさまじき樣を、彼れ等は身に武裝なき競爭者なり、戰ふに利器なく糧食なき戰士なり、不完全なる敎育、不十分なる資本、加ふるに虛弱なる身體を以て、徒に時勢の促すところに從ひ、生存競爭の塲裡に驅らる。さればこれがために險を攀ぢて山に狩するものあり、波濤を冒して海に漁するものあり、而かも得るところのものは、漸く衣食の資を充たすに過ぎず、夏は燒くが如き炎天に晒らされ、冬は氷るが如き苦寒に堪へ、終日終歲、一旦不幸にして、病痾災難の犯すところあらんか、家を擧げて、飢餓凍渴の巷に迷はざるべからず、家は破れ、土地は奪はれ、出でゝ路傍に斃るゝものあり、神社佛閣の軒端に雨露を凌ぎて辛くも一縷の命を繫ぐものあり、其の志の堅からざるものは盜となり、遂に牢獄に呻吟するに至る、眞に彼等は天職の光を自覺するに至らざりし乎、將又境遇が彼等をしてかくの如くならしめしもの乎。さなきだに生存の慾に走り易きは人の常なるに、まして、充分なる敎育を授けず、相應の資產を與へず、責むるに高遠の理を以てす、亦酷ならずや。嗚呼眼中同情の涙を宿し、胸間博愛の血潮迸るものは、誰れかこの景を見て心を傷め腸を斷たざるものある。

鈿生足下、足下はこの光景を目睹して非人道と叫びぬ、獸的行爲と罵りぬ、然り自我のために驅られたる戰爭、自利のためになされたる行爲、誰れか非人道的、獸的行爲と見做さゞるものあらん。されども物因あれば必ず果あり、源あれば必ず末あるは、自然の數、吾人の敢て競ふべきところに非ず。足下は既に生存競爭の止むべからざるを認めたり、然らばスペンサー、タルウィンの一派が主唱する進化論を否定するものに非らざるべし。卽ち彼等のいふが如く「力は適宜を標準とするが故に、適者は生存し、不適者は衰亡す」といふを以て、萬世動かすべからざる眞理となし、生存競爭を以て社會進化の踏まざるべからざる階梯なりとすれば、何ぞ其の結果たり、末流たり、隨伴物たる適者生存優勝劣敗の慘狀を咎むるを要せん。何となれば進化論の目的とするところは社會の進化にあり、社會の進化を助けて一身を犧牲となすは進化論上の善にして、これを妨害せんとするは進化論上惡ならざるべからず、然るに今弱者たり、不具者たり、疾病者たり、劣等の人種たるものは、團體及社會の進化を妨害するものなり。されば吾人はこれ等を撲滅するの理由あるのみならず、却てこれ等のものは自から死滅するの義務を有するは明なることゝす。あれば或學者は慈善事業を以て徒にこれ等の妨害者を保護するものとなし、これを非難するものあり。これ進化論者の倫理觀となす。要するに社會の進化を計らんとすれば生存競爭なからざるべからず、生存競角の行はるところには、陶汰作用より來る個人の犧牲なるものを拒むべからず。然るに足下、前に進化論を容れて其の生存競爭を認め、後に生存競爭の犧牲卽ち優勝劣敗の慘景を咎めて、非人道と叫び、獸的行爲と罵り、この慘狀を省き去らんとす、所謂血を以て血を洗ふの類に非らずや。

勿論生存競爭を以て人口過剩の結果となし、かの避姙法を用ひて、人口を制限し、增加をとゞめ、生存競爭を無にして、以て貧者敗者の出現をなからしめんとするが如きは、社會政策の上乘なる

やも知るべからずと雖も、今や列國對峙して、人口を以て矛となし、腕力を以て盾となし、人口の增加、國家の膨脹を歡迎する時代にありては、其の論の可にして、時勢に盲なるを苦笑せずんば非ず。

五

鈕生足下、余は前章に於て述べたるが如く、利己と他愛との精神より生存競爭と人道とを明にし、次に生存競爭の結果たる國家主義と人道とに論及し、最後に進化論と人道との矛盾を推論し以て生存競爭と人道との衝突を陳述せしにあり、而してこれ猶衝突せず、矛盾せずといはゞこれ足下の高敎を仰がんとするところ也。今や時代は一歩一歩國際的競爭の渦中に侵入し來り、人は空想にあらずして現實を謳歌するに至れり、この際世界的國家、人道を夢想するは腐儒の迂說に非らざれば、越人溺を救ふの說の如き乎。されども國家對立の期すぎて、一大國家成立し、人口を制限し、人類互に共同の利益を認め、世界の開發、文明の進歩といふが如き大事業に從事するが如きの日は、國家間の衝突其の跡を絶ち、社會問題の憂ふるなく、熙々たる平和の春に浴して、人道を歡喜するを得べきなり。

荒野（ツルゲネフ）下

渡邊庸三

皆はひつそりとした。不意に、遠くで、長く跡をひく嗄れた何か歎く樣な音がした、それは夜々中ともすれば深い靜けさの唯中に折々起る不可思議な響の一つなので、一分間も空中に動かずに居る樣に思へるが穩やかにひゞき渡つてやがて消え失せて仕舞ふ。ぢいつと聽く、何だか能くは解らぬが、響は矢張り在るには在る。何か跡をひく叫び聲が地平線のあたりで發せられて、誰かがあの森の中で鋭い胸にしみ通る樣な笑聲をしてそれに返答をしたのだと、かう誰しも考へたゞらう。靜かなさら〳〵と云ふ音が川の面てを走つた。子供共はぎよつとして お互に顏を見合はした。

「十字架よ、我等を守り給へ」とイリアはつぶやいた。

「やい、烏野郎」とバァヴェルが怒鳴つた「何んで震えてやがるんだい、見ねーな、馬鈴薯がゆだつてら」。

みんな湯沸しの方へ寄り合つた、そして湯氣の立つてる薯をばくつきだした。ヴァニア獨りは動かなかつた。

「おい、お前來ないんかい」とバァヴェルは彼に云つた。

が、ヴァニアは吳座の下から出て來なかつた。湯沸しはぢきに空になつた。

「あの、君は聞いたかい」とイリオウクカがやりだした「いつか、ヴァルナヴィチであつた事をさ」

「堰堤の上でかい」とフェディアが尋ねた。

「うん、そうだ、もう除げられた例の堰堤の所でさ。あすこはいやな所だ、眞實に人死のあるいやな所だつた。ずうつと圍りは穴や、洞穴で、洞穴は蛇で一ぱいだつた」。

「どんな事があつたへ、話し給へ」。

「そりや斯うなのさ。フェディア、君は多分知るまいけど、あすこに土左衞門が一人埋まつてるんだ、其奴は長いこと前にに陀佛したんで、其時分にや池も深かつた。だがまだ其奴のた墓はある、尤も容易なこつちやないけど、今ぢやもう小さな土饅頭ほどになつてるんだ。そりやそうと、此の間、旦那がジャーミルを鳥渡來いと呼び付けて、夜番に行つて來いと云つた。ジャーミルはいつでも僕達の代りに遣られるんだ。彼奴は持てた犬を皆死なしちやつた、どう云ふ譯か神樣だけは御存じだらうが、一つも彼奴と一緒に生きてるのつてなかつた、又到底あすこぢや生きてられなかつた、だけど彼奴は上手な獵師だつて云ふ評判だ。そこで、ジャーミルは夜番に出掛けて行つた、道中をぶら〳〵と行つた、歸りには少しや元氣だつたそうだ。夜は良いし、そうだ滿月だつた。そこで、ジャーミルは例の堰堤を突切つた、彼奴のとつた道が其處を通らなきやならんかつたんだ。奴さう云ふ風に段々と行つた、見ると例の土左先生のた墓の上に非常に毛の縮れてる小さな白い羊が一匹居た。そこでジャーミルは「己がひとつ此奴を拾ひ上てやらう、どうしてなあ此奴を迷子にさせられるけい」とひとり言を云つて、馬を下りて羊を腕に抱きとつた。羊は抵抗しなかつた。それからジャーミルは馬の方へ行つた處が、馬は鼻息をして頭をふり始めた、が、彼奴は馬をしづめて、鞍の上へ乘つて、羊を自分の前に置いて出掛けて行つた。彼奴は羊の方をみた、羊は此獵師の眼をひたと視つめて居た。ジャーミルは少し氣味が惡くなりだして、「羊つて斯んなに人の眼をみやがるものとは知らなかつた」と獨り言を云つた。が、まあ氣をとり直して、普通君達がやる樣に「ビアカ、ビアカ」と云ひながら奴さんの背中をたゝきはじめた。處が、其時、羊の奴は不意に憤りだして全然彼奴の云つた通り「ビアカ、ビアカ」と繰返へしたそうだ」。

と此子が云ひ終るか終らない內に例の犬が二匹一緒に立上つて、痙攣でもした樣に吠ゑながら急いで焚火の所を去つて、暗闇の內に見ゑなくなつた。子供共はぎよつとした、ヴァニアは吳座の下から出て來た、バヴロークカは一聲怒鳴つて犬の行つた方へ飛んで行つた。犬の吠える聲がみる〳〵微かに微かになつた。間もなく亂調子のばた〳〵云ふ音が聞えた、例の一群の飼馬が走り廻はる音なのであつた。「おーい、白!!黑!!」とバヴロークカが火のでる樣に怒鳴りだした。二三分たつて、吠ゑ聲がやんだ、バヴロークカの聲は唯遠くで聞えるばかりだ。暫らく過ぎた、皆はもう呆氣にとられて、どんな事になるだらうかと、お互に顏を見合はして居た。不意に馬の驅てくる音が聞えた、馬はぴつたりと焚火の近くでふみ止まつた、バアヴェルは馬の鬣を引握んでひらりと地面に飛び下りた。例の二匹の犬も明るい車座の中へ戻つて來て、赤い舌をだしながら横になつた。

「あすこで何があつたんだい」と子供達が尋ねた。

「何にもねー」とバアヴェルは手で馬を追ひやりながら答へた、「犬の奴等は必定何か嗅ぎ付けやつたんだ、僕あ狼かと思つた」と彼は無頓着な調子で言を續いたが、呼吸を全然切らして居つた。わたしはバヴロークカが氣に入つた。其時の樣子つたらそりやよかつた。元來樣子振りの美しい方ではない、が、たつた今、飛ぶ樣に後を追つてつた爲で樣子振りが如何にも花やかにほてつて果斷な豪膽らしい所があつた。棒っ切一つすら持てなかつたけれど、ぐず〳〵せずに狼めがけて暗闇へ唯ひとり飛び出していつたのだ。勇肌な子だとわたしは猶も彼を眺めながら考へた。

「ぢや、君は狼には會はなかつたんだね」と弱虫のコスティアが尋ねた。

「いつだつて此所ら邊には隨分澤山居るさ」とバアヴェルが答へた「だが冬になると實に厄介だ」。彼は再び焚火に近寄つた。座り込んで、手首を一匹の方の犬のざら〳〵する頸の所へやつた、奴さん此んな風に慣々しくされたもんで全然とうれしがらせられて、大分長い間頭も動さかずに全くぢいつとして居た、さも自慢そうに滿足さうにバヴロークカの方を横目で見ながら。

ヴァニアは復呉座の下へ這ひ込んだ。

「君の話はまあ何と云ふ恐しい話だつたらう、ねー、イリオークカ」と豪農の一人息子だけに世話役顔に振舞つてたフェディアが云つた（尤も威嚴がなくなるのを氣遣ふ樣に自分は成丈け口數すくなにやつて居たが）。「それぢや魔物が犬の奴等を吠えさしたんだ。實際に僕は此所は妖怪が昔し出た處だつてことを聞いた事があるよ」。

「ヴァルナヴィチーがかい。僕もそう思ふ方だね。今だつて此處は何んでいやな處だらう。人々があのお爺さんー亡者を見たのは一度ぽつちぢやないつてことだ、そりや本當だ。話によると、何でもねー、裾の長い土耳古服を着て歩いてるんだとさ、そして、始終、此んな風に溜息をついて、何だか僕は知らんが、とにかく何か捜してるつて。一遍、親父のトラフィムが彼奴に會つたとさ。親父はイヴァン、イヴァノヴィッチの爺さま、何を餘念なう捜してた出でゞすな」とかう尋ねたそうだ」。

「そんな事をまあ彼奴にお聞きなすつたつて」とフェディアは目を丸くして云つた。

「あゝ」

「そうかへ、トラフィームさんてゑらい人だね。して又何と彼奴が返事したの」

「私は魔法の草を捜して居りますとかう云つたそうだ、尤も魔法の草つて云ふ所をこんなに低く云つたそうだ。「イヴァン、イヴァノヴィチの爺樣、この草を如何なさらうと云ふお所存なのです」「どうも私の息がつまります。如何うも此世は私の息をつまらせやす、トラフィーム氏。私はどうか此の世を去りたいと思つてます、えゝ、早く去りたいと思つてます」。

「成程な」とフェディアが云つた、「ぢや彼奴はどうも餘り充分に永生もしなかつたらしいね」。

「そりや魂消た」とコスティアが云つた「僕は又、亡者つて御命日の土曜日にばつかり見られるもんと思つてた」。

「何時だつて亡者は見られるさ」とイリオークカが請合つて云つた、その樣子が如何も私の見た所では他の子よりも通俗な傳說をよく知つてる樣に見えた、「だけど、御命日の土曜日には、生き

てる亡者―と云ふのはその年の内に死ぬ筈の人も、見られるのさ。唯、君なら君が、教會の廣間（パーリスタイル）に居て往來を見て居さへすりや、其年に死なきやならん人が通るのが見えるのさ。オウリアナ婆さんね、去年廣間（パーリスタイル）の柱のとこに居たよ」

「あゝ、そうかい、誰れかを見たって」とコスティアが面白がつて尋ねた。

「うん。始の内は、長らくの間何も聞えず、誰も見えなくて、唯、折々、遠くの方で、非常に遠くの方で犬が吠えてるのが聞えたばかりだつた。ひよつと婆さんはみた、小兒が一人シャツ一枚で往來を通つた、婆さんは誰れかとよく見て見たら、そりやイヴァクカ、フェドサイーフだつた。」

「去年の春死んだ子かい」とフェディアが口を出した。

「その子さ。頭を上げずに歩いて居たつて。だけどオウリアナにはそれと解つたのだ。それから婆さん、やつぱり見て居た。と、女が一人やつて來た、婆さんは其女をよく見てみた、よく〳〵見てみたそうだ、所が君、まあ、どうだい、やつて來たのは自分なんだらう、オウリアナ自身なんだ」

「ほんとかい」とフェディアが尋ねた。

「そりや慥かに婆さん自身だつたのだ」

「だけど君、まだ婆さんは死なないぜ」

「そりやまだ年がきれないもの、だけど見給へー婆さんはあれで長く生きてれるかえ」。

子供達は再び靜かになつた。バアヴェルは一抱の枯枝を焚火の上へ投げた。枯枝は急に燃え上つた炎にふれてみる〳〵黑くなつた、パチ〳〵音を立てて煙りだした、燃えたる方の端の所がねぢれて曲りはじめた。焚火の震えてる樣な火影（ほかげ）が空中へ四方に廣がつた。丁度その時、鳩が一尾どこからか此輝いてる火の柱が突立つてる眞つたゞ中へ飛び出して來た、おぢ〳〵ぐる〳〵と飛び廻つて、羽ばたきをして見えなくなつた。

「巢がわからなくなつたと見える」とバアヴェルが云つた、「奴は彼方此方（あちこち）と飛んで、それから夜明け迄寢るんだらう」。

「ねー、バヴロークカ」とコスティアが云つた「ありや君、天國へ飛んで行く善人の魂なんぢやないかねー」。

「さうかも知れん」と彼は友に云つた。

「失敬だけど君、バヴロークカ」とフェディアが尋ねた「君は君ん所で幽靈を見たつてそうですか」

「お天道樣の姿の見られん時にかね。うん、見たとも」。

「隨分きつとぎよつとしたでしやう」

「恐ろしがつたのは僕等ばかりじやない。此事を前に話ししてくれた旦那がさ、暗くなりかゝると最早（もう）おつかながり出したんだ。實際あれを君達に見せたらなあ。幽靈が出るとすぐ料理人（コック）は竈の中の皿を、皆火箸で敲き破つちやつた。「さあ誰が食ふ」と云つた「世界の終りが來たぞうつ」。ソップが四方にとぶ。で、なあ、僕達と一緒にあの村でさ君達もあれを聞いたらなあ君。其時は誰でも、今にも、白い狼が現はれて來て人間を食ひ盡しちまうか、今にも肉食鳥が舞ひ下つてく

るか、今にもトリクカが現はれるのかと思つたね」。

「トリクカつて何??」とコスティアが尋ねた。

「知らないつて」とイリオークカがむきになつて云つた「トリクカを知らないなんておい君、君は一体何所から來た者だい、君は村での木片頭だ、正銘の木片頭だ、トリクカかい、其奴はいまに此世に現はれるだらうつて云ふ奇体な奴なのさ、捕へる事も如何する事も出來ない位面妖な人間なのさ、トリクカつて隨分面妖な人なんだらうよ。近い話が、百姓が皆して其奴を生捕にしやうとする、棒切をもつて向つて行く、其奴を取卷くだらう、すると其奴は皆をばかしちまつて、終に皆が同士討をやりだすのさ。今度は例へば牢へ入れるだらう、すると小さいお杯にお冷を一杯と斯う云ふ、百姓達が一杯もつてくる、其奴はふつと消えて、復ひよつくりと現はれる。今度は鎖をかけるね、手を鳥渡たゝけば落ちてしまう。此トリクカが町や村を通ると、奴は悪い奴で、基督教徒をみんなだましちまう。それでも其に對して如何する事も出來ないんだつて、何でも非常に面妖な、非常に悪い奴なんだらうよ」

「そうだ」とバアヴェルはのろいねむそうな聲で語り續けた「さうなんだ。實際、彼奴は我々の間で今にでるか〳〵と思はれてる奴なんだ。例の老人は幽靈が出ると直くトリクカがくるだらうと云つた。うん、其幽靈は現はれた。どいつも此奴も皆、野へ逃げた、何事がたつ始るかと待構へて居た、君も知つての通り所柄はからりとした所だらう。見て居ると、誰かゞスラボタの方の山を降りてくる。隨分變手古な人だ、隨分變な風態だ、皆は一度に「あら、あすこへトリクカが來る、あすこに居るぞ」と怒鳴りだして、誰もかも皆逃げちやつた。スタロスタは溝の中へ身を隱した、細君は門の下へ這ひ込んで勢一杯に金切聲をたてゝ居た、だからまた番役の犬も早や怖氣きつてしまつて鎖をふり切つて生墻の向ふの中庭から森の中へ逃込んでしまつた。コウスカ、エロフェイッチの親父はオート麥の中へ隱れてもう平蜘蛛の樣になつて鶉のやうにひい〳〵言ひだした、「靈とりの君、どうぞ、鳥だけをお見遁し下さる樣に」と心の内で言つて居た。誰もかれも逃げてしまつた。で、やつて來た人と云ふのは、村の指物師の君ヴァヴィルであつた、新しい箱を買ひ求めて、それを頭にかぶつて居たんだつた。」

皆は笑ひだした、が外で話しをして居る時によくある通り二三分の間またも靜かになつた。わたしは四邊を見まはした、天氣は素張らしいものであつた、大抵、夜中中ぶつ通すあの乾ききつた熱が、夕暮の瀑りつ氣と入換になつて居た、しかし其熱が眠つてる野をすつかりと立こめる迄にはまだ〳〵大分間があつた、まだ晝のさゝめきのさゝめき初め、露の雫の結びそむる迄には數時間ある。月はなかつた、まだ昇らないのであつた。幾千と云ふ金色の星か交互閃めいて、天の河の方に、しず〳〵と動いてる樣に見えた。長い間みつめて居ると、全世界を矢の樣に運んで行く、あの絶え間のない流轉の響を感じる樣に思てた。異樣な、神寂びた叫び聲が二聲、引續いて川から起つた、二、三分してからもつと遠くで復聞えた。

「ありやなんだらう」とコスティアが震に〳〵云つた。

「五位鷺の鳴聲さ」と。バアヴェルは靜かに答へた。

「五位鷺??」とコスティアが答へた「ぢや、バヴロークカ、昨夕、聞いたな、あれかい」と烏渡の間默つて居るから彼は云つた。「多分君もあれを知つてるだらう」。

「何を聞いたんだつて」

「僕の聞いたのつて斯うさ、僕がカーメンノイがアイアドからチャチキノーへ行く途中、僕は先、例の洞穴のそばのあの胡桃林を通りすぎて一君も知つてのあの險しい所へ行つたのさ。其所には水が充滿あるすつかり燈心草で圍まれてる穴が一つある。僕が其穴の傍を通つた時に誰かゝ水溜の中で溜息をついて居た、そりや非常に哀れつぽい「オー、オー、オー、オー」て云んだもの恐ろしくつてたまらなかつたよ君、夜遲くだつたし、聲が又非常に哀れぽいんで殆泣き度くなつた位だつた。ありや何だつたんだらうねー」。

「去年、其穴で追剝の奴等が樵夫のアキーンをお陀佛にしたんだ」とバヴロークカが云つた「多分そりや其奴の魂がうなつてたんだらう」。

「そうらしいね」とコスティアは唯さへ非常に大きな眼を一層丸くして云つた、「僕は追剝がアキーンをあの穴でお陀佛にしたことは知らなかつた、知つてりや、もつと怖氣なかつたんだね」

「あすこには、哀れつぽい調子でそう云ふ風に鳴く小さい蛙が居るつて云ふ話だぜ」とバアヴェルが附加へた。

「蛙??いや、蛙ぢやなかつた。あれ復」(再、水の面に五位鷺の鳴聲がする)「あら、あら、」とコスティアは無意識に云つた「あれは森の靈の叫び聲にちがひない」。

「森の靈は叫びやしないさ、啞だもの」とイリオークカが云つた「唯手を拍いたり舌打ちしたりするばかりなんだ。」

「そんなら君は森の靈を見た事があるかい」とフェディアは冷かした。

「いや、僕は見たことはないさ、神樣がそんな者を見ない樣にお守り下さるんだもの。だけど他の人は見たことがあるとさ。いつか、一人の農夫が其奴と連になつて、森中引張り廻はされて、同じ野らを行つたり戻つたりさせられて、夜明けになつても家へ歸れなかつたそうだ。」

「で其人は彼奴を見たつて」

「そうだ。其人はレチーつて丈が高い非常に丈が高くつて黑い者だと云つて居た。彼は木の後に伏せつて居た、で君等は目付ることが出來なかつたのだ。見た所どうも彼は月を避けて居る樣であつた、彼はその大きな眼で視に視た、一彼は眼くばせをした、彼は眼くばせをした」

「あゝ」とフェディアは肩の骨をすばめて「うふふ」。

「どうしてそんな落しだねがよ地球上に廣まつたんだい」とバアヴェルが云つた、「僕にや變手古に思へら」

惡口云ふない!!よく氣をつけろよ、きてえるから」とイリオークカが云つた。

またひつそりとした。

「あすこを御覽。皆、お見よ」とヴァニアは小兒らしい聲で不意に叫んだ「神樣のお星樣を御覽よ。蜜蜂みたいに動いてら」。

彼は小さい冴え〳〵した顔を呉座の下から出して、肱の上へ身を寄せて、静かに大きな和やかな眼を大空の方へあげた。皆んなも同じ事をやつて二三分間その儘で居た。

「あのね、ヴァニア」とフェディアが慣々しく答へた「アノークカ姉さんは丈夫なの」。

「うん」とヴァニアは少しどもつて答へた。

「そんなら、どうして姉さんが僕らの所へ來ないんだか聞いておくれな」。

「あたい知らない」。

「姉さんにお出でなつて。」

「あたい姉さんにそう云ふよ」

「い〻もの持つて行つて上げるつて姉さんに云つておくれ」

「あたいにも??」

「あゝ」

ヴァニア溜息をもらした。

「い〻え　い〻え、僕は何もいらない。それよりや姉さんに上げておくれ、姉さんはほんとに良い娘だよ」。

ヴァニアは再び小さな頭を地面につけた。バアヴェルは立上つて空の湯沸を手に取つた。

「何所へ行くんだい」とフェディアが尋ねた。

「川へ、水を少しとりに。僕は一杯飲み度いんだ」。

犬は起上つて彼の後をついて行つた。

「氣を付ろよ、水ん中へはまるな」とイリオークカは後から怒鳴つた。

「如何して落ちるもんかい」とフェディアが云つた「用心がい〻よ、あれは。」

「用心するつて。そりや云ふのは易いさ、どんな事が起るまいもんでもない。彼奴が水を汲もうとかゝむ所を河童が手を握んで水ん中へ引ずり込むかも知れない。すると人々が「あの兒が、あの兒がはまつた、彼の兒が川へはまつた」と云ふだらう。隨分立派な最後さ。あすこに、燈心草の中へはいつて行く、あすこに居る」と彼は耳をすまして附加へた。

燈心草がにぶい響をたてた。

「白痴のアコウリナは水の下になつてから以後あゝ云ふ風だつて眞實かい」とコスティアが尋ねた。

「そうだ、丁度今の通りさ。だけど以前には美しかたつつて云ふ話だ。河童の奴が彼の娘の顔を汚したんだ。疑ひもなく奴は人々があんなに迄早く彼の娘を取り出すだらうとは思はなかつた。奴はもう全然あの水底で彼の娘を滅茶にしちやつた」。

自分も此アコウリナには度々會つた事があつた、つゞれを着て、恐ろしくひねこけた、顔の炭の樣に黑い、心配そうな眼付をして居る、出つ齒の娘で、街道のいつも同じ所で一度に何時間も〳〵胸に壓付けられたあの痩こけた手で地面を搔いたり、籠の中の野生の鳥みたいに、のろ〳〵と、今一方の足で立つかと思ふと、今度は片方の足で立つたりしてるのである。何を云つても何

も解らないので、唯、折々、痙攣的ににや〳〵と笑つて居た。

「して、アコウリアナは戀人にだまされたんで身を投げたつて云ふ評判だよ」とコスティアが答へた。

「そりや眞實だ」。

「して君はヴァシアを覺えてるかい」と悲しそうにコスティアが附加へた。

「何にヴァシアつて」

「あの、あの川で溺れた子さ」とコスティアが答へた「彼の子は何て云ふ、まあ何て云ふ良い子だつたらう、そして彼の子のお母さんフェクリスタが可愛がつてた事つたら。彼の子の水難を母さんに虫が知らしたんだつて云ふ評判だよ。ヴァシアが僕達小供同志で夏ね水浴びに出掛けた時なんか彼の子のお母さんはいつでも震えて恐ろしがつてた。他の女達は何も云はずに靜かに桶を持つて通つちまつたけれど、フェリクスタは何時でも桶をおろして「また歸つてお出で、歸つてお出でよ、可愛い、坊や、ねー、歸つてお出よ、坊や」とヴァシアに呼ばはるのだ。如何した機會で彼の子が死んだか神樣でなきや解らない。彼の子は川のふちで遊んで居た、お母さんも其所に居て、枯草を整へて居た。不意にお母さんは水の中で泡立つ樣な音を聞いたそうだ、見たら早や水の上にはヴァシアの小さい帽子があつたばかりだつた。其時からフェリクスタは氣が變になつて、いつでも彼の子が溺れた所へ行つては、横になるんだ、横になつてねー君、そうして歌を歌ひだすんだー君は覺えてるだらうヴァシアがいつでも歌つてた歌をさ、それから彼の女泣いて泣いてね、彼の女は神樣を恨むんだよ。

「バヴロークカが歸つた」とフェディアが云つた。

バヴロークカは水の充滿はいつて居る湯沸しをもつて焚火の所へ歸つて來た。

「皆、知つてるかい」としばらく默つて居てから彼が云つた「そりや惡いこつたつて云ふ事をさ」。

「何がさ」とコスティアが急込んで云つた。

「ほんにな。僕が水の上にかゞむかかゞまない内にヴァシアの聲で、川の底の方から、誰かゞ「バヴロークカ、よくきたね、バヴロークカ、此所へお出でな」とかう云ふ具合に呼ぶのが聞えるんだらう。僕は怪しいと思つたけど、水を汲んで來ちやつた」。

「あゝ、神樣、神樣!!」と他の者は皆各自に十字架を畫いて云つた。「バアヴェル、君そりや河童が君を呼んでたんだ」とフェディアが云つた、「それに、丁度、皆で、ヴァシアの事を話して居たんだよ」。

「あゝ、惡い兆だ」とイリオークカは靜かに云つた。

「なあに、馬鹿な、何でもねーや」とバアヴェルはきつぱりした調子で答へた。「運てものあ誰だつて逃れるもんかい」。

子供達はひつそりとした。バアヴェルの數言が皆に強い印象を與へたことは容易くわかつた。二三分してから皆は焚火の圍りに横になりだした、どうも眠りにつく支度でもするらしい。

「僕に聞ねるのは何だらう」と不意にコスティアが頭をあげて尋ねた。

バアヴェルは耳をすました。「カーリューが飛びながら鳴いてるのだ。」

「何所へ行くんだらうね」。

「冬が無いと人が言ふ國へさ」。

「そんな國があるかい」。

「あるさ」。

「遠いのかい」。

「遠い、非常に遠い、暖かい海の向うさ」

コスティアは溜息をして眼を閉ぢた。

わたしは小供達と三時間以上も一緒に居た。月は到頭現はれた。初めの内はわたしには見ゑなかつた位、三日月はもう隨分細くなつて居た。しかし月の光はなくとも夜は美はしく嚴そかであつた。數月間前には天漢に高く〳〵輝いてたあの澤山の星の影は、今は唯、黑ずんだ地平線から少し離れて閃めいて居る。物と云ふ物は、あの靜けさ、あの明け方の天、明け方の地を普ねく知らす、あの靜けさの中に投込まれて居るのである。物と云ふ物は、まだ夜の明けやらぬ間のあの深いあの靜かな眠り、その中に休らふて居るのである。大氣にはもう匂やかな薫りはなくなつて、再び濕りつ氣を帶んで來た。あゝ、げに夏の夜の短かきかな。かの少年の物語も焚火もろもと絶え果てゝ、犬さへ眠つてしまつた。馬も、微かな星あかりにすかしてみて考へると、頭を垂れて眠て仕舞つた樣である。わたしも少しづゝ無我の境にはつて行つた、わたしも眠つた。

顏をかすめて一種かう爽やかな感じがした。わたしは眼を開いた、夜は明けかけて居た。太陽はまだ出なかつた、が、空は東の方が白みかゝつて居た。物と云ふ物は前よりははつきりして來たが、輪廓はまだぼんやりして居た。青白い空の色がいよ〳〵清らかにいよ〳〵冷やかにいよ〳〵碧くなつて來た。星と云ふ星はもう間もなく見えなくなるた名殘に薄れはてた光で閃めいて居る。地はじめついて葉と云ふ葉は雫だらけであつた、生の響、種々の聲が彼方此方で聞える。朝風は早や立ちそめて地の面をかすめて居た。わたしは身体全体に嬉しい樣なをのゝきを覺えた。わたしは手早く起上つて少年達の方へ行つた。皆は消えてる焚火のまはりにまだぐつすりと寢込んで居た。バアヴェル丈は鳥渡身を起してわたしをじいつと視た。

わたしは彼に目禮して、朝霧が立こめて居た川堤に沿うて我が路に進んでいつた。二十町も行かない内に、もう、前の方の廣々した荒野や、みどりの丘さては、後の方の塵で埋もれてる往來の輝いてる叢、川霧に覆はれてうすら〳〵と碧くなつてる川ー一口に云へば、此地方すつかりが、夜明けの暖い光ー始めは桃色でそれから眞赤になり金色となるーあの暖い光でちか〳〵と輝いて居た。物と云ふ物は眼を覺して居る、動いて居る、歌ひそめて居るのであつた。大きな露の雫がダイヤモンドの樣に輝いて居た、風のまに〳〵清らかなすつきりとした鈴の音がしやりん〳〵と朝の爽やかさを含んで居る樣に響いて來る鈴の音をじいつと聞いてる内に、あの荒野に居た一群の馬が、今別れを告たばかりのあの小供達につれられてわたしの前を通つた。

甚悲しい事だが、わたしは終りに當つてバアヴェルが其年の内に死んだ事を附加へなければなら

ない。彼は溺れたんではなかつた、馬から落ちて死んだのである。わたしは彼を悼むのである。彼は勇肌な少年であつた。（終）

——獵人日記の一節——

能登廻り

伊多嘉儀

○四月一日、

心懸りで寢たものだから矢張り早く目は醒めた、未だ暗い、もう一眠りと枕についたが念のためと枕元の燐寸を擦つて見たら、さあ大變！　五時前十五分、五時までにステーションに集る豫定だつたのだ、僕の宿から停車場まで一寸半里ある、駄目だと又枕についたが、然し駄目だまでもと瓦破と床を蹴つて大急ぎで洋服をきる、雜嚢を持つ、いや脚絆もつけずにそのまゝ飛び出した、

日頃体操の教師が駈足万能主義を盛んに吹聽するが、儀は先天的駈けるのが嫌でならない、がこんな時には仕樣がないから澁々ながら駈け出した、先頃駈け足の時に卒倒して金箔治療をなした同輩のあつた事を思ひ出して、そんな事になつちや大變至極とゼムを嚙みながら、大橋を渡り長町の河傳へに息をはづませて駈け出した樣たらないものだ、自分ながら可笑しくもあつた、

四月一日の曙光が實に氣持よく東の空を染めた、大丈夫天氣だと喜んだ刹那、あッー、これは困つた事をした、雨具一式を忘れて了つた、困つたなー、今更らかへつたつて間に合はない、まよ後でどうにかなるだらうと猶ほ駈け出した、

「遲かつたね」と友に肩を打たれて時計を見ると發車前十分、

「羽咋まで卅二錢だ、四十錢やれば剩錢くらあ」と友にせかれて赤切符買つて直ぐ客車に飛び込んで、やれ大助りと脚絆つける間に車は動き出した、

津幡から車は七尾線に入つた、これからは停車場の作り具合だから、物賣りの呼び聲、四邊の景色盡くこれ「寂寞」の象を表はしてないものはない、河北潟は死水同樣に窓に近く默つて横はつてる、まだ耕がさない田には薄氷が一面に張りつめて、廣い野原に人一人見えない、近くの寶達山はつい麓まで雪に掩はれてる、桃に名高い高松も枯木が砂原にちよい〳〵立つてる許りで一向に榮えない、この時僕は遉に北國だなとしんみりと感ぜざるを得なかつた、たゞこの間に立つて「春」を示してるのは軒端に亂き咲れてる梅の花と、その下で雛を呼んでる鷄ばかりである、

だから別に窓の外を眺めたくはない、友は得たりと僕をとらへて盛に近世の小説界に就いての大議論を吐き出した、これには本職の筈である僕は少なからずその雄辯にまきこまれた、

羽咋で車を下りて愈々、茲に膝栗毛の鹿島立となつた、

僕は吳座を買つて背負つた、友はマント冠つて洋傘を肩にした處は、何となく彌次北八に髣髴

としてるので、兩人が相談の上で、僕は門外友は長頭と名を變へてこの旅行中は一切本性をいはない事にきめた、その名の原因はあるがこゝには略しておく、

「何處かこゝらで一つやつて輕くしようか」と門外はいつて垣の蔭でズボンの釦をはづしてる、斷ておくが以後第三人稱にする)、

「おい、ポリスが來たぞ」といふ長頭の叫びに吃驚して見たら、なーるほど、田舍でも巡査に二つがない正服、正帽、靴着用の査公が來たので、旅の門出から違警罪なんて曳つぱり廻されるのも、余り名譽じやないから辛抱して羽咋の町を出た、

「玄米三俵、御護り一つ大關に與ふ」といふ面白い相撲の懸賞募集の札が店さきに草鞋と一所になつて春風に動いてる、

一の宮から本道をそれて柴垣といふ村に出て、それから海岸に一寸出ると、黑松の大きいのが林をなして海岸を飾つてる、その根株に腰下ろすと、長手崎が、猿臂を延ばした樣に長く海に突き出て、二群の松がその影を靜かに水に醮(ひた)してる、鏡よりも滑らかな今日の靜波(なぎ)には白帆が幾つとなく見える、のどかなこの春の海の景色にうたれた長頭、門外の二人は默然聲はなかつた、

「一つスケッチする」と長頭はブックを出した、長頭は畫の素養がかなりある、殊に漫畫が旨い、いや自慢畫が實に旨いものだ、

「調べをやらうか」と門外はやをら腰元から、錦の袋入りの尺八を取り出した、門外は美景に對してよく尺八を奏する、

「自然の神に對する御禮だ」といつては吹くのである、が長頭の畫よりもまづい、まるで鳶の巢くふ時になく樣な音を出して、これが秘曲「鶴の巢籠り」に候とくるから、聞く人はたまらない、が本人は一向そんな事には無頓着で感心して吹いてるから面白い、

門外の調べの曲が終つた頃には長頭のスケッチも濟んで居たので、そろ〳〵二人は歩き出した、

「田舍に珍らしいなー、五重塔なんて」と門外は向ふに見える五重塔を見て驚いてる、陸奥弘前の產丈けあつて頑固で、又中々方言を惜しがつて捨てないから隨分可笑しな事をいふ、これを聞いた、長頭は、默つて道を急いで「腹は減つて來た」と時々呻つては會ふ人毎に「高濱まで何里ありますか」と問ひかける、なまぢつか門外の間に答へて、五重塔見物と廻り道されるのを恐がつてるのである、

小松の並よく植つてる山を右に左に見ながら行く二人の足は段々重くなつて來たが、それでも休まないで歩きつゞけた、

「うどんに限る」と長頭はいつてその前から動かない、門外も大贊成して二人は暖簾の中に入つた、

聞えるのは吸ふ音、茶椀にかみつく音、箸の折れ響ばかりである、夢中になつて腹拵へをした二人は

「どうも六十錢とは高い、馬鹿見てしまつた」

とぶつ〳〵不平をいつて山の方の道を歩いてる、頻りに長頭が肩のマントを五月蠅がつてる、

「どうも怪しいせ、海岸へ出る筈なのに」と長頭が變な顏して「聞いて見よう」と口達者な彼は何か百姓に尋ねて居た、

「あーつまらない、損な事した、一里の廻道だ」と呟いて別れて來たから聞いて見たら、海岸へ出るには一里損しなくちやならんといふので一方ならず悄氣てたが、兎に角海岸に出る事にして福浦へ出たのは、もう好い加減に腹の減つた晩方であつた、

福浦の港口で長頭が何か書いてる間に、門外は頻りに大福餅を頰張つてる、その中に日は晩れて山道へかゝつた頃には、婆娑たる松影を踏んだまでに上弦十一日の月は出た、とある道傍の松の根株に腰下ろして汗を拭ふと、ぼんやりとした月に日本海は輝いてる、

黑い波、白い濱はすぐ足下千丈の巉巖の下に見える、沖より歸つて來る舟の目標(めあて)にと白い砂の濱邊に眞紅の焚火は燃えた、黑、白、赤これが自然のまゝによく調和して目に訴へて來る、

返つて來る舟の櫓の音が、遠くの沖でギー〳〵とこの寂寞を破る、

雁は岩洞でガン〳〵と鳴く、波はザハ〳〵と靜に岸を洗ふ是等の音が、心持よく調和して耳に訴へて來る、この景を眺め、この音樂を聞いて、夢と淡く身魂を飛ばして恍として聲なくこゝにたゞすむ事そも幾時間であつたらう、能登の海の景色、淋しいが然し何ともいへない慕はしさを感じた

これから新道へ出てから洞穴を幾個となく通つたが畫ならばと思ふた景色は幾何もあつた、

富來(トウギ)へついたのは十時すぎ、

○四月二日、

長頭は口は法科丈けに達者だが足は怪しいものだ、で富來を出る時は十三里とかある輪島まで今日は行くんだなんて威張つて見たが、さて歩いて見れば、ピョコリ〳〵と足曳きの山鳥の尾のしだりをよりも長くかゝつて、その癖一向道は捗らない、殊に大福寺近邊の山道と來ては、不平だら〴〵で足の方が少しも動かない、劒地へついたのは十二時すぎ、まづこゝで辨當を開く事とした、

これから少し行つて一寸かけるといつた景色のいゝ處へ來たので長頭はスケッチを初めた、門外はその間に村の老婆の説明きいた駄賃に、海苔を二三帖買ふ事とした、これをぶらさげて行つたら

「何だいそんなに澤山、貴樣隨分馬鹿な奴だな」

鉛筆を投げていかにも呆れたといふ顏していつたので、門外も少なからず手持無沙汰になつて

「俺の荷物は俺が持つんだから、何も君が御世話する必要はないじやないか、門前へ行つたら贈つてやるんだ)

躍氣になつていふ、默つて二人は海苔を食べた、

「何だい、こんな海苔があるものか、苦いじやないか)

これには御本人の門外もギャフンと參つて音が出なかつた、

こんな事で喧嘩しながら行つたが、ピョコリ〳〵と運ぶ足もとが次第に怪しくなつて來たの

で、今日は三里道を減らして門前で泊る事とし、その代りこゝで一眠りと芝生の上にごろりと寐たら、後から五六人の同校生が肩に風切つてやつて來た、よく見るとボールで名高い太つた人であつた、

「こんな暑い處で休むなんて、余程參つたんだね」

といはれて見ては、虚勢を張つて見たくなつて

「馬鹿いへ、輪島まで今日行くだ、へたばるもんか、君等何處で今日は泊るんだい」

「黒島宿泊だ、前約があるんだせ」

と直き前の村を指さす、そのまゝ失敬といつて去つて了つた、

「オシサン、足の具合は怪しいぞ」

門外は叫んで、長頭を顧て

「奴等元氣がいゝね」と感心してる、

「奴等にびつこ曳いた處見られちや嫌だから稽古しよう」

と長頭が前になつて、濶歩しながら

「この具合なら健康体だらう、え、怪しいか」

「一寸右の足が遲れるよ、僕のはどうだ、いゝだらう」

門外は前にたつて例の海苔の包みを小脇にして歩いて見せる、

「大丈夫、大丈夫」

黒島の村へ入つた、宿屋の前へゆくと歩調を揃えるが、どうも長頭のが怪しい、

「通るぞ〳〵、びつこ曳いてらあ」

といはれて見て汗をながした、さつきの四人組が宿屋について澁茶すゝりながら窓から僕等を見てこういつたのだ、

「へたばつたらう、グーの音も出ないじやないか」

門外はいつた癖御本尊が怪しいものだ、が又四人組も余程の疲勞と見えて、全くグーの音も他に出なかつた、

口丈けは輪島行きで足は門前から動けなくなつた、

曹洞宗總本山總持寺の燒跡には、寄附金の札が不格好に立つて、その側には青い麥が生えてる、

俳句一つ作らうと門外の苦心は見るも氣の毒だつたが、悔やしいが出來なかつた、晩は風呂へ入つて疲れをぬかして白河夜舟何處らを漕で居るのやら、

○四月三日、

昨日は豫定をへらしたから今日はうんと歩いて補をつけなくちや一週間の休みの中に廻りきれんといふので朝七時から歩き出した、

先天的に、又後天的に犬を恐がる猫性の門外に、大きな黒い犬が尾をふりながらついて來たので、先生大へこまりにへこまつて、ぶる〳〵してるのを見た長頭いゝ氣味だといはぬ計りになつて、

て何か呉れてやつて金澤までつれて行かうか」

と喋舌つてる、丁度田の中で樂しく遊んでた鷄を目がけて飛びついたこの犬は、バタ〳〵羽を散らしてもがくのを無理に啣へて、二人の方へ駈けて來たのを、門外は手を上げて追ふ眞似をする、長頭は小石を拾つて投げかけたので、犬は得るなく逃げ失せて、一時この掠奪者に平和を破られた鷄の仲間も亦元のまゝ樂しい春に醉ふてなき出した、

ある店に黄い毛皮が二三枚かゝつてあつた、よせばいゝのに、いゝ氣になつて長頭が「御免」と元氣よく番頭を呼んだまでは大出來、やがて中から若い女が出て來たので、長頭は、

「その皮は幾何だい」

あれを買うのかと門外は感心して見てる、處がその女が

「や、貂の皮ですから六圓、安いもんです」

グーと行きすまつてギーの音も出ずにそのまゝ引き退つた滑稽たらないものだ、門外頻りに恐悦がつて、この前の海苔で苦しめられた返答に

「青札二枚しか持つてない癖に六圓のテンの皮買うなんてテンで御話にならない」

といじめてやると道がの口達者の長頭も頭を掻く計り

「海苔に貂は御互にいはない事にしよう」

と互に讓歩した、

籔の鶯を聞き、小笹の陰の雪を嚙みながら陽春四月峠を越える等の事は北國ならでは出來ん業である、

上下三里の峠は樂なものではないが今日は昨日程の疲れは感じない、もういゝ加減に足が慣れて來たのだらう、

塗物に名高い輪島は素通りにして愈々坦々の道は珠洲の岬にかゝる事となつた、こゝらの道は中々立派である、それに道側に一町宛杭が立つてあるのでそれを見ながら行くのは旅行者に取つては、素的に樂しみになる事である、

上れば下る坂幾つ、憩へば涼しき松幾株、迎へ見送る山々を右へ眺めて左には、瑠璃なす海に眞帆片帆、七島遠く渚近く、辛き塩田の塩風に、吹かれ〳〵て日もやう〳〵と南志見の濱でくれかゝつた、

「眞珠又眞珠と奈落の底へ永久にと沈み行く」と何とかいふ西洋人が日没を形容したがいゝ得て妙である、

日はくれて月は出た、白い白崎の鼻を中頃で横切つて時國へ泊る事とした、平氏一門の都落ちの悲慘は平時國がこゝへ落ち延びたのでもしれる、砂の濱は廣く、海は浪あれて春でもこんなに淋しいものを、冬ならばと思ふて見るさへ悲しい樣な氣がする、

○四月四日、

時國から眞浦へかけての一里許の間は海岸に岩が散らばつて、それが岩洞を作つてる中を通つて行く等は中々捨て難いいゝ景色である、これから道は俄かに惡くなつて、身は能登の端に來た

のかと心のどん底までもしんみりと感ぜざるを得なかつた、

「あの舟が蛸取るんだぜ、見て居ようじやないか」

長頭がいふので門外も道側の芝生に腰下ろした、段々目の下に來た舟は直ぐ傍(そば)で泊つたら、それから大きな辨當を出して食ひ初めたのでいくらの呑氣黨の二人も、それの濟むまで待ちかねて歩き出した、

透る程に澄んでる波が岩をのどかに洗つてる、

切れる樣な細い聲で千鳥は波の上を飛んでる、

ポカーンと一羽の大きな鵜が岩に止まつてる、

いかにも平和な景色である、

話好きな婆と大谷で一所になつて暫くの間、岸打波の音ながらにその話を聞いた、大崎といふ崎の鼻にある島で起きた五六年前の心中話であつた、こんな邊癖な處まで來て態々死んだ馬鹿もあつたかと二人がいつたが、それでも門外は余程感に打たれたと見えて

「僕は汨羅の屈原じやないが、吊意を表する」

といつて曾根崎心中の一節を歌つた、長頭は苦笑してあつた、

兎角世の中は間違の多い馬緤(マチガヒ)の村で道も間違はずに日の暮れ方には川浦の村まで行つた、

こゝへ泊つたのも實は高屋の村で休んだ時に其處の亭主が鑛泉浴が川浦にあるといふのでついそれにつれ込まれたのである、

入つて見ると驚くべし、その室のわるい事たら話にならぬ、この風じや夜になると半風子に折角太つた腕を食べられる事だらうともう二人は泣き顔である、處へ入つて來たのは醫專の生徒、旅は道づれ、世は情、俄かに元氣づいて晩飯を濟ましてから夜中旅行と出掛けたのは、何でも夜の八時すぎ、

三人の時計が皆狂つてるので何時なのやら薩張りわからない、

陰曆十四日の月は心地よくはれて三人は今や珠洲岬の端、祿剛岬にかゝつた、小學校で地理を習つた時から珠洲岬といふ事は度々試驗にも出されて忘れはしない、その岬の端にある狼煙(ノロシ)の村、たゞその名を聞いた計りでもその淋しさが思ひ浮ばれる、その狼煙の村をすぎて祿剛岬の鼻の燈臺の下に立つた、

月は荒れ狂ふ日本海の渺たる上に明いてる、右も左も目の屆く限は水、月にきらめくはてしのない水である、こゝに座つた三人は口にこそいはぬが皆心の中では故郷千里逆旅の感が深かつたに違はない、長頭の故郷は埼玉である、醫專生のは越後である、門外のは更に遠い陸奥弘前である、思ひは夫々に遠く近く郷里の事に走つて居るだらう、この景、この感をかこうとは誰もしなかつた、門外もたゞ默したきりで敢へて一管の尺八をふいて見る勇氣はなかつた、

三人は己が影を踏みながら下へ〳〵と刻んだ段を聲なくとぼ〳〵と下つた、

早く眠る海夫の家はもう寺家についた頃には一軒も起きてた家はなかつた、

「御免下さい〳〵、こゝらに宿屋がありませんか」

代り〳〵に聞いては遂に宿屋を見つけたが、皆い丶位の遁辭を設けて斷る、中には「今家内が產氣づいて」なんといふ奇拔な辯解もあつた、幾軒た丶き起しても泊めてくれる所はないので萬計こ丶に全くつきた三人の落膽はこ丶にいふ事は出來ない、

「こうなつた上は仕方がない、野宿しよう」

との門外の言葉に皆が贊成せなければならぬ場合となつた、

哀れ悲慘な野宿ではないか、

門外は防寒具がないので菰をきる事として、兎に角鹽やく茅小舍に泊る事となつた、地面の上にごろりと寢ころんだ三人は、岩をも透す春の風を忍びながら野宿の夢を結ぶ悲しさは、中々半風子に苦しめらるゝ比じやない、初め一時間位は終夜歩き廻つた疲勞のために眠つたもの丶、一睡淡くさめると到底眠れたものじやない、殊にマント一枚もない門外は腹を冷やして草木も眠る丑の刻に、下痢を催して苦しんでは、早く火を焚かうといつても誰も贊成してくれない、やむなくそのまゝ寢入りとなつた、

月は寂ながらに苦を洩れて靑く光つて來る、

波は不斷の響をよせては轉々の餘情をひき出す、

風は靜かに小舍の側を拂つてはからころと何をか吹き去つて行く、

萬目蕭條徒に胸をいためて遂に一夜中少しも眠らなかつた、

○四月五日、

月は西に落ちて太陽は東から出そめる頃に三人は海岸に立つて盛んに焚火をして暖を取つてから、村へ入つて飯を炊いて貰つて俄に眠氣を催したが、今日は小木まで行かなくてはと厚く禮をして去つた、

道は林の中へ入つてポカ〳〵と春の日は暖くなつて來たので一眠りと、林の中へごろりと轉ぶ間もなく華胥の巷に遊ぶ事や丶一時間、ガラン〳〵となる牛の鈴の音に目覺めて歩き出して三人は、その眠の中に道を行く人の噂をば少しも知らないだらう、ホーソンのかいた「運命」の主人公は確かにこの三人の中にあるに違ない、

內海は外海に比べて艶ぽい、女性的である、從つて外海の荒々しいのに反對して慕はしい處はある、

春日野へつく一寸前の處で一服つける事としたが、こ丶は又實に見晴らしがい丶、

越中の山は海の中に突立つてる、能登の海岸は弦の樣に曲つてる、

「越山合併得能州景、遮莫懷中思財政、どうだ、旨いだらう」

と門外は一人ホク〳〵ものである、

戀路あたりの景色はいかにも女性的で箱庭的である、

足曳きは三人とも隨分烈しかつた、殊に長頭がてんで動けなくなつては一生懸命になつて舟を周旋するがない、と口癖にいふ、

「苦しむに來たんじやないから、そんなに馬鹿に歩いたつてつまらないじやないか」

とこぼしては門外の贊成を得て休む事にする、その中に白丸といふ村で漸くの事で舟が出るといふので、三人の喜びはそれは〳〵見事なものだ、殊に長頭の喜びはあり〳〵と顏に見えた、

「長頭君、初めて生色ありだね」

と門外がいふと

「何だ馬鹿にしてる」

といつては怒つたもの〻舟は沖へ出て鹽風に汗を拭ふては、打ちとけて指呼の間に天下の美景九十九灣をながめた、

底に泳いでる魚は數へられる、波にゆるぐ藻は見える、

越中の山々は白く前に立つてる、その麓は紫雲につゝまれてる、

七尾通の小蒸氣が近くを走る、煙は長く後に棚引く、

白堊青松波は靜かである、白帆が遠近にちらつく、

舟は俄かに道を右に變へて九十九浦に入つた、浦傳へ小松は白堊を染めて、ツルウチ島の白い石燈の影が手に取る樣である、

九十九の灣の眺めすめば舟は小木の港についてあつた、

夕飯を濟まして欄干に寄ると十五夜の滿月は、一點の曇ない青空に磨き出てる、近くの燈臺の光はほのかに見える、

夜が更けてから村の童だらう、濱邊で笛をふき初めたが、その音が向ふの山にひゝいて一々反響を返して來る、この時に望鄕の情を起さない木石漢は世にあらうか、

○四月六日、

宇出津發の氣船に間に合ふ樣にと床を蹴つて小舟に櫂かいたのは月がまだ隱れない午前の四時であつた、

宇出津からの汽船の旅はさしたる趣味のあるものでもなかつた、が靜かな湖水の中でも行く樣な氣持だものだから、落ち合つた同校生を相手に長頭の氣焰といつたらなかつた、何でも能登を一呑みにした樣な氣慨で口角沫を飛ばしてあつた、間もなく和倉の溫泉について、こゝに一週間の疲勞を日本第一の鹽類泉に洗ひ流す事となつた、その六日の間一回の雨の天氣に會はなかつた事は實に北國の旅行としては得がたい幸運である、長頭が自己流の感謝祭をやつたのも無理はない、

○四月七日

長頭の感謝祭はちつと早かつた、昨晩その祭典が濟むとポチリポチリと降り出した雨は今朝になつて大亂風雨、舟が出ないといふ騷ぎになつたが、自若として長頭は

「僕は小說をよんで今日はこゝで湯治しよう」

と動かない、門外は又こんな所はいやだといつては、舟は出ないかしらんと駈けづり廻る、が雨は遠慮がない、

チリン〳〵と鈴がなつて舟の出る事を報じた、さきに別れた醫專生と三人は小蒸氣に乘つて七

尾へついたのは正午少し前、

二時の瀛車で七尾を出て非常にゆれる汽車にも懲りずに、門外は小說をよみ、長頭は晝寢をして薄暮金澤についた、

（これからまた一人稱にかへる）

長頭と別れて犀川畔の僕の宿へ歸つたら留守中に來た手紙、雜誌は靜かに机の上に載つて僕を待つて居た、あゝ僕を心から待つてくれたのはこの手紙、この雜誌計りかと思ふた時、僕は余知らずホロリと一滴の熱涙をこぼした、

あゝ旅を終つても猶ほ四百里外の旅にある身だもの、

（完）

嗚呼平田君

八波則吉

明日知らぬ我身と思へど暮れぬ間の
今日は人こそ悲しかりけれ――貫之

嗚呼法學士平田德次郎君は遂に不歸の客となられた。まるで夢のやうである。夢でもこんなはかないわはれな夢は滅多に無からう。」

君と予と相知つたのは去年の九月で、爾後僅に半歲、私交は非常に別懇といふ程では無かつた。先づ私宅の訪問を語れば、君が初めて予が宅を訪はれた時、生憎予は不在であつた。予が初めて君を訪うた時、折惡しく君は不在であつた。二度目に君がお出の日、偶〻予が宅に疊屋が來て居て、座敷の疊を剝いで居たゆゑ、失禮ながらお上げ申す事が出來なかつた。二度目に予が君を訪うた日、君は病氣危篤のため面會謝絕の張紙が出て居たゆゑ、玄關で駒井君に會うたのみで別れた。そして予が三度目に君を訪うた時には、嗚呼君は既に逆屏風の蔭に北枕で永い眠りに就いて居られた！　次に君との會食は、時習寮大茶話會の晩餐を合せて前後三回。次に塾會と級會での同席が各一回。遠足と雪中行軍での同行が各一回。毎日教官室で五分乃至十分づゝの會合を除けば、君との面接は以上數回に過ぎぬのであつた。併し妙に二人の交際は、十年も二十年も前から引きつゞいた、長い〳〵間の親交であつたかのやうに思はれてならぬ。

予が竹馬の友や同窓生の中にも、君ほど懷かしく慕はしく思はれる友達は餘り澤山無いやうである。蕪村に「散りて後面影に立つ牡丹かな」といふ句があるが、平田君の面影は今でもあり〳〵と予が眼前に髣髴する。思ふに平田君の性質が大竹を打ち破つたやうにからりとして居られたのと、其の容貌がぱつと明るい、何處か牡丹の絢爛に似て居られたやうであつたから、かくも印象が深いのであらうか。今左に予が短日月間に見聞した事實を述べて、君の性行の一斑を語らう。

或る宴會の席上、談偶〻釣魚の事に及んだ時、平田君に予は鮒釣を勸めた。ところが平田君、「生き物を殺して快を貪るといふ法があるものか」と以ての外の不興であつた。予は案に相違して大に狼狽しながら、「論語に君子は釣して網せずとあるから釣は君子の遊びだ」と遁れた。すると平田君、「釣も網も五十歩百歩だ。思うても見給へ、悠々閑々として遊んで居るものを好餌を以て欺き捕るとは……、」と滔々としての反駁、而も其の態度は飽迄眞面目であつた。予は平田君、少くとも法學士平田君の口から此の種の意見を聞かうとは全く豫想しなかつたのである。（法學士の三字に印した譯は後に語る）。

これは昨年九月十二日の事で、當時平田君と予とは殆んど初對面にも等しい間柄であつたのだ。君の直言に予は少なからず驚かされたのである。

釣に就て今一つ白狀せねばならぬ事がある。四月六日卽ち平田君永眠の當日、予は早朝から鮒釣りに出かけて居た。午後四時過ぎ歸つて見れば、同君危篤の旨わざ〳〵校長さんからお知らせがあつたとの事、取り敢へず駈けつけて見れば南無三、平田君の顏には旣に白布が覆はれて居た！昔は友を亡つて絃を斷つた人もあるとか。予は竿を折らうかと思つた、が意志薄弱、未だ折らずに保存して居る。否耻かしい話だが、其の後再三使用したのである。

平田君が初めて予の宅を訪はれた日、前にも云つた通り生憎予は不在であつたから、翌日學校で昨日の失禮を謝した。すると平田君、「イヤわざ〳〵訪うたのではなかつた。實は子供を幼稚園に連れて行つたから其の歸りに立ち寄つたのさ」と。予は其の時平田君を法學士にも似はず案外正直な方だと思つた。法學士にも似はずと云ひ案外といふ、甚だ不穩な詞だが、實は是まで法學士といふ方は概して殺風景で生意氣で、放螺吹きで見え坊で、時には心にも無い御世辭さへ云兼ねぬ御上手者か位に誤解して居たのであつた。予が曩に殺生の意見を法學士平田君の口から聞いて驚いたと云つたのも實は如上の誤解からであつたのだ。

聞く、平田君は學生時代は何時も牛耳を執つて、所謂豪傑で居られたさうだが、感心な事には、君は一度も金錢や婦人に關して卑劣野鄙の行爲が無かつたさうだ。わゝ此の美德こそ、平田君が口八丁手八丁の法學士で居ながら、行政官や新聞記者の如き派手な職業を抛つて、法學士には珍らしう、自ら好んで敎育者といふ地味な職務に從事された所以であらう。先日追悼會の席上石原事務官のお話に、「當時の所謂豪傑連の中には、大學に入り若しくは社會に出でゝ、存外脆く軟化した人も多かつたやうだが、平田君の如きは終始一貫、眞に豪傑の名に耻ぢられ無かつた」と。

或日平田君、「君の門札は君の手かね」と予に問はれた。「書記の藤井さんに書いて貰つたのだ」と答へると、「實に善く出來てゐる。僕もいづれ藤井さんに賴まう」と云はれた。「君のは陶器だからあれで善いではないですか」と云つたら、「あんな拙な文字では耻かしい」と云はれた。同じ豪傑でも、細瑾を省みずといつた風の豪傑とは頗る趣を異にして居た事が是でもわかる。これは去る三月二十九日の事である。越えて四月六日君の喪に籠つて居た時、予は君の書齋で、極めて手近に習字手本のあるのを見受けた。

書齋で思ひ出したが、平田君は頗る藏書家であつた。一寸覗いて見たら、君が專門の法律經濟政治等の書籍は勿論、沙翁全集はじめ多くの英文學書、論語孟子の類、スタンダードの大辭書、英國百科全書等大部の書物が、硝子戸の書棚や輪轉書架などに累々として載つて居た。「歷史家の歷史も買ひたいものだ」と、つい先日云つて居られたのを聞いた。篤學の士と云はねばならぬ。後日平田君の實兄力之助氏より聞く所によると、沙翁全集三冊は、平田君が第一高等學校在學中、「日本將來の道德を維持する方策を論ず」といふ懸賞論文の第一等に當選された折の賞品ださうだ。因に該論文は校友會雜誌の第三十號に載つて居る。そして右沙翁全集は、平田君の紀念書籍として我校の圖書館に寄附されて居る。

平田君は非常につとめてであつた。就任以來一日も缺勤されなかつたは勿論、演說會にも、柔道大會にも、時習寮の大茶話會にも、三々塾の塾會にも、獨法三年の級會にも、苟も生徒の集會に案內されゝば萬障を排して出席されて居たやうである。そして御話を賴めば、必ず演說でも座談でも辭せられ無かつたやうだ。又雜誌にも論說を出されて居る。五箇への大遠足會にも行かれた。雪中の兎狩にも出かけられて居た。凡て身を以て人を率ゐるといふ決心で居られたらしい。

これは平田君の未亡人のお話である。平田君はどんな事があつても一日も缺勤し無いと終始云つて居られたさうだ。で病苦中にも、「幸ひ休暇中でよかつたが、八日の始業迄に全快しやうか」と幾度も繰り返して居られたさうである。予も思ひ當る事がある。三月二十九日、伊勢の皇學館の敎頭をしてゐる湯淺廉孫といふ文學士が視察に我校に來られた。湯淺君は平田君の舊知で兼ねて赤井君及び予の知り合ひである。で同夜三人で同氏を金谷館に請じた。當夜平田君は顳顬に卽功紙を貼つて居られた。當時風邪の氣味で頭痛が激しうして居たのださうだ。而も朋遠方より來る、つとめての君は晝の間は湯淺氏を諸所に案內し、夜は遲くまで快談されたのである。三十日と三十一日の午前は試驗の爲め出勤。三十一日の午後は夕暮まで敎官會議に出席して名論卓說を吐かれた。今思へば當時君の血色は頗る勝れて居なかつたやうである。例の氣性で定めし病を押してつとめられて居たのであらう。

三々塾の塾會、又は獨法三年の級會での平田君の座談はいづれも學生の爲めの修養談であつた。蓋し謹聽した人々の長い紀念であらう。級會の夜予も强ひられて澤柳氏の「學修法」の一節を紹介して該書の一讀を學生諸君に奬めた。其の翌々日の圖書館に行つて見ると、思ひきや平田君が熱心に前記「學修法」を讀んで居られやうとは。

金谷館からの歸途、仙石町柿木畠を經て里見町に至る途すがら、予は端無く平田君の抱負らしいものを聞いた。大意を云へば、法科大學卒業後、君は官吏として臺灣總督府に奉職し、新聞記者として東京の一二の新聞社に關係して居られたさうだが、官吏も記者も君の性格に適せ無かつたらしく、此度敎育者となつて赴任以來最も生活の愉快を覺えられたとの事であつた。「これが僕の天職らしい」と迄いはれた。予が生意氣にも君の餘力の活動を勸めた時、「後日餘暇を得たら金澤市の實業界にも微力を盡し、中央の論壇にも時事の所感を發表する積りだが、まだ當市の事情も分らず、且つ何より學科の豫習に忙がはしく、讀みたい書籍は堆積してゐるが、今は殆んど其の暇

すら無い位だ」と語られた。如何に授業の準備に骨折られたかもわかる。愈〻不起の病床に就かれた日卽ち四月の二日にも、自ら圖書館に行つて參考書などを借つて歸られたさうだ。休暇中にも勉强される積りらしかつたのだ。

以上いづれも些細な事柄ばかりであるが、藁一筋でも風の方向は知れるといふから、以て平田君の人となりを察するに足りやう。且つ平田君の性行に關する大きい事件は、職員總代や生徒總代方の吊詞にも見えて居たし、石原君や赤井君や駒井君方の追懷談にもあつたから、重複を厭うてわざと茲には略して置く。

最後に、平田君は家庭に深き趣味を持つて居られたらしい。卽ち奧樣にもお子樣方にも頗る親切な物やさしい方らしかつた。こは君の家に長く仕へて居たお關とやらいふ下婢の話や、同女から見せて貰つた數ある平田君の寫眞を見てわかつた。君の近年の寫眞は、奧樣とで無ければ必ずお子樣方と一所に寫されたもののみである。又此の二三月頃お子樣の病氣の節の如きは、殆んど寢食を廢して看護されたさうである。お子樣は六つ頭に都合四人居られる。長男の健郎君といふのが今年取つて僅に三歲、實に可愛らしい元氣さうな坊ちやんである。此の可愛い元氣な健郎君は去る七日の夜、嚴父の棺を指さして、「姉さん、お父樣はアノ箱の中にはいつて居るんだよ」とあどけ無かつた！噫

「父樣はいつお歸り」と右ひだり
泣きせがまれてうら若き母

追慕

其月

木蓮はほたりと落ちぬ又落ちぬ追慕哀慕の涙にも似て
天無情さばれ仲春雪ふりぬ君白玉の樓に入りし夜
うなだれて弟子幾百師の君の柩送りぬ春寒き雨
さながらの瓔珞なりき追弔の法會の庭の眞盛りの花
くやしくも君が詩囊に入らざりし兼六の花能州の月
兎狩吹雪の丘に突立ちて旅順の地勢說きし君はや
矢の如く波上滑りし鴉鳥のとみに潛きし君がまぼろし

哀慕集（憶平田先生）

岸雄太郎

激浪に似る山脈を御供して五個の山里訪ひし日を戀ふ
賜はりし「滿州論」の幾頁えよまぬひまに逝きぬ吾が師は

病み臥やす日も一日たゞ教子の事のみいひし師は逝きましぬ
千裂れ行く雲を追はんに追ふ術をもたぬ此世をはかなみにけり
沈み行く船にある日の心地しぬ師のみまかりし悲しさに居て
春の花一時にほろぶ夢を見し其夜追想ふに堪へがたきかな
空洞樹に似てうつろなる心にも悲しき事のみちみちし日ぞ（訃音を聞き奉りし日よめる）
御袖にすがらんと立つよき夢を奪ひもて行く憎き日明けぬ
御柩の御側に侍して白臘の盡くるも知らに打ち臥して泣く

河上和一

君はよしゆきませ黄泉に天つ國のかはらぬ光君をてらさん
常樂の調を慕ひ天つ國にのぼり給へるわが師思ほゆ
むくろ何滅ばゞ滅べ御靈のみは長く滅びずわれらを教ふ

山田敏一

君はかなた吾はこなたに紫の雲をへだてて泣く子となりぬ
わが哀慕雲に寫して水に書く五月の湖はしづかに暮るる
五月雨に庵はふけてそぞろ吾遺愛の書に涙を濺ぐ
めでごとに賜びしやさしき微笑此の頃偲ぶときめきわはれ
君は空にのぞきますよと仰慕の子五月の雲の浮べるを見て
愚痴無智の亡者黄泉にも多かるを此の頃君の眼や光るらむ
口もとは斯くや目つきはとやなぞと君が御姿學ねびて夜ふけぬ
花皆の蕋に妙なる香をかげば君が御國に來し心地して
君去りて淋しうなりぬ野に畑に山吹の花わだ梨の花
上品の上におはせし君なれば蓮の臺の淨土に座さむ
目に見えねぞここにやおはす佛ぞち白蓮紅蓮いさぎよく立つ
追憶の岸に泣く子は水音も君が御胸のささやきときく

四高和歌會詠草

其月

我胸ゆとばしる愛の泉しも汲む人なくて老いんとするか
ポプラーの並木大路の霞より自動車出づる町はづれかな
つとよればつと遠ざかる斑猫の道しるべにも似たる君かな
諸共に明日も花野に遊ばんと指切りしたる春もありしを
歌人の會に侍る我れ三日の糧もて城に籠るに似たり

しと〳〵と櫻若葉に雨降る夜書院に響く碁石おろす音

すく〳〵と拳もたげぬ早蕨は原行く瀧車の枕木の側

繞石

磯濱に連る高き網干木の末のみ見えてかすむ家かな

ともすれば怠る日々の旅の記や大和は寺の見る物多き

唇に紅さす指の根に小き指輪も映る懐ろ鏡

指二つ指三つ出して何語る二人連れ立つ啞の子あはれ

一日の糧を給へと父まねて朝餉の祈禱子等さかしらに

見れば目のくらむ山井の底深く靜に羊齒の露のしたゝる

枇杷翁

掬びつる泉の源は雲の表とはにかはらぬ山上の雪

金桂

上納の怠りもなき家七つ桑の樹多き山蔭にして

赤楊の幹にも似たる高瘤の指組み合はせ法聽く翁

口慾は足らひ心は花薔薇と君が笑ひを糧にして生く

椒房の嵐かなしき終夜袖几張して御枕に待す

雨の夜に鬼火燃ゆといふ森を指す心地に君を戀ひし日もあり

露郎

血ある士を「逆」とぞ誣ひて誅せし日花より花へ

雷はためきぬ

夕つ雨高樓にきく春の夜や君が形身の皷抱きて

時鳥わかすきゝけり大比叡の山の氣肌にふかく染む頃

すき櫛の折れよとぞ解く黑髪のみだれは弱き齒の堪ふべきや

眠る間を物の怪などの奪はんか君が頂に鈴つるさばや

雉泉

鶯は玉の洞出で銀泉に咽喉うるほして里へ向ひぬ

群鷄の鶴と見申すけだかさと其日の事を乳母は語りぬ

戀と云ふ心の糧に飽きし日は獸の族に落つべかりけり

心にも無き疑の言放ち言ひ解くさまをいかにかと見る

瀧壺にわきし早鮎と木の芽合へまゐらせん頃山家に來ませ

流涕す二人を問へば山指して彼のうしろなる孤兒なりと

雪割菜

雉泉

人種論語原を追ふも日永かな

四六駢列華麗の体も日永かな

拙誠に如かぬ巧詐も日永かな

餌もつけて夜釣舟待つ日永哉

詩趣更に琴心誘ふ夜半の春

泊つ可きを流す筏や朧月

藝に寵の腰拔ケ武士や櫻狩

修道記蕨の事も石の座と
雪割菜と云ふ早出菜を白魚に
隨所法を說くや落花に無常觀
洲明りに鹽焚く煙や春の空
仰ぎ泣き伏し泣く別れ落花哉(芝居)
馬鞍縫ふ日和莚や桃の宿
炙を据ゆ蹴癖の馬や桃の宿
蜂巢くふ枝振りを値の大樹哉

葵模様

春夢

二の木戸に俄か矢造る明易き
短夜や十戸の村の刎ね釣瓶
塗りかへし朱門に絶ゆる若葉哉
名匠の鳥夜に逸す新樹哉
鐘曳くに髪の網綯ふ暑さ哉
弩の獲物もあらぬ暑さかな

忍術の極意さとれり晝寐起
晝寐して惡僧夢に還俗す
夏草や干す牛の皮なまくし
水無月や蜘蛛の巣光る椽の先
絶壁に擬砲の先や夏木立
瀨川越す馬盜人や時鳥
巫が衣のほつれや杜若
墨繩の墨の乾きや風薰る
大牛の角も折れよと夕立す
蝸牛つるりと落ちし二日月
蔓橋を清水に通ふ狸かな
石女の蚤つぶしたる爪赤き
(決死)城中の白布を燒かば蚤逃げん
肘つきの葵模様や蚤の尻

四高俳句會句鈔

○繞石

雉子啼くや練る句に乾く旅硯
雉子啼くや木を伐り落す谷急に
明日は雨の野の風ぬるし雉子の聲
蛙子や干あへぬ溝の根なし草
蛙子や鍬洗ふ程の裏の池
蛙子や暈の日映る池隈に
蛙子や堰の扉の水くさり
木から木へ物干竿や青蛙
雨蛙晴れ後曇る日毎かな
いらぬ枝伐りおとす桐や雨蛙
明日堀ろの筍人に盜られけり
竹斜め筍直ぐの墨繪かな
筍も堀らず七賢貧に處す

廂から藤の瓔珞花御堂
南無と汲み彌陀佛と甘茶灌ぎけり
黑繻子の襟艶めくや初袷
長松が古き袷や小倉帶
不二八湖若葉かくれとなりにけり
假橋に土手の晝顏ふまれけり
晝顏に草鞋の砂をふるひけり
舟遊品川に灯のともりけり
山蟻や的の矢番の藁草履
上り下る蟻や白百合長き莖
利根平池あれば蓮稻田かな
蓮池に近きを御間や御巡錫
(持明院)蓮に名の寺も寒雉の墓あれば
そる屋根の碧瓦日映ゆ蓮の池
蓮殊に大なるに名を七寶池
蛇や矢に塗る毒の草摘めば
羊齒の風蛇谷へ下りけり

涼しさや活花小屋の淺黄幕
築山の蔭より落つる瀧涼し
竹に月の墨うすき繪や絹涼し

送別

向上の一路坦たり青嵐
瀉見ゆる此家涼しと離宴かな

○ 芙蓉仙

濠に映る落城の火や雉子の聲
陣跡とみゆる焦土や雉子の聲
日に一度温泉湧く地鳴りや雉子の聲
邊塞に吊古の賦あり雉子の聲
山辺りの跡墾く畑や雉子の聲
倒れ木は天火の祟り雉子の聲
切れ凧の落ち浮く水や蛙の子
門川に捨てる蚕屑や蛙の子
城大破すれど濠あり蛙の子

丘毀つ海苔場設けや浦若葉
寺若葉砂噴井戸も名所かな
碑に鐘の縁起や寺若葉
汐燃ゆる篝明りや浦祭
夜祭や花笠の雨の流れ紅
畫顔や中洲家ある河の幅
畫顔や天火を殘る宮柱
舟遊水城の跡の碑も探る
磯茨や暮れ殘る洲に汐乘りて
馬とめて直す荷癖や茨の花
登山口釜場も見えて茨の花
鍛治の火の散る宵闇や茨の花
花名札雨に倒れて薔薇の花
掃墓のことありて往く山蛇多き
興すもの絶えし一宇や草の蛇
塔を斜に劍一閃の雷雨かな
百の楯に濺ぐ大雨や陣涼し

松涼し危巖舟客皆仰ぐ

送別

句皆活きて行を壯にす青嵐

○ 靜池

樋の口や目高に交る蛙の子
畦塗るよ塗り込められな蛙の子
雲間日の柿の葉裏や蛙の子
青蛙木の切株の床几かな
筍や師團に通ふ辺り坂
筍の皮夕川を流れけり
獨尊の指に甘茶の雫かな
袷着て髯剃らばやと思ひけり
糊氣なしさばれ一茶が初袷
山蟻や椎の葉に盛る御供の物
山蟻や硯の乾く睡後集
透影の蘭燈几帳涼しけれ

雨に越す十三峠花茨

送別

送別の五句二句足らず明易き
岩清水いぎすがやかにゆきたまへ

○ 雨童

高塔に天火そゝぐやはたゝ神
佛彫りて野に隱るゝや花茨
山蔭に井を堀る人や朝涼し
涼しさや藻の裏返す鉢の魚

○ 清泉

けたゝまし何を深山の雉子の聲
畫顔に道者憩へり道の石

○ 美島

竹の繪に蛙を點ず葉裏かな

今年ぎりの筍堀りぬ鍬拓く
虻くるや念佛ゆるき花御堂
跡なくて城の名存す若葉かな
要塞の大砲冷ゆる若葉かな

基蘭港

巖窟に蘭字刻せり岸若葉
漁場爭ひの恨喧嘩や浦祭
烏帽子岩直垂岩や舟遊
晝顔に夜網繕らふ干場かな
山人の臑毛を這ふや蟻黑し
根こぎにす腐木の株や蟻赤し
川跡の殘され沼や蓮の花
分流の堤防築くや蓮田村
雷鳴るや絶えず雲湧く硫黃谷
雷鳴るや浮洲片寄る旱雲
震ひ癖の瘧落しの雷が鳴る
酒の禁破る夕やはたゝ神

年に一人溺るゝ淵や蛇渡る
草苅の蝮殺すや秋憐
水飯に蛇やは渡る草清水
洲の果てを蛇籠渡るや茨の花
水引いて洲やは變りし茨の花
住なばやの借さぬかと問ふ家涼し
晝寢癖直しの避暑の圍碁涼し

○ 雉

野の上を引裂け雲や雉子の聲
形勝に城起さんと雉子の聲
讐討を梵論の姿や雉子の聲
調練の鐘皷鳴り止んで雉子の聲
流し藍入る田もあるや蛙の子
風に動く浮島もあるや蛙の子
尺樹水に動く丈影や蛙の子
佛生會靈驗記うつ小舍芝居

泉

佛生會横河の奥を人稀に
雨聲急に動く灯影や青蛙
鳴るは瀧の水樓の灯や雨蛙
洲明りを踏む跳足に袷かな
命縮む祈す壇の若葉哉
晝顔やくねり木多き防砂林
晝顔や苔滑りする巖の上
藻刈女の羨み歌や舟遊
土俗酒湧く樹といふや蟻特に
史料調べに寺寶もみるや蓮の花
晝說法蓮の花風に蘇へる
黃楊の櫛も賣る山茶屋や蟻多き
蛇來るや泡盛釀す酒藏に
駱駝割く水乏しさやはたゝ神
馬市場に榛名下ろしの雷雨かな
涼しさや觀瀑樓の明け放し
馬鬣吹くに耳振るも涼し洗場に

蛇籠編むに竹割く土堤を野茨かな
火山近き燒石河原や茨の花
崩れ土堤を普請杭打つ野茨かな
いざ國へ竹の子飯も飽きければ

○ 春夢

縱溝を出て横溝や蛙の子
蛙の子四隅にたまる痩田かな
筍や村に弘法が倒さ竹
初袷矢立の重き近江人
ビードロの鉢みにゆかん初袷
半ば彫りし獨木舟あり椰子若葉
石斧得し嬉しさを眼に若葉哉
笠雲に渡御の止みたる祭かな
覇府の地の祭や弓矢ゆゝしけれ

口碑

二神碁に決す祭の晴雨かな

盲人の觸るゝ凸字や蟻渡る
葬りて土の乾きや蟻走る
雨に蓮をかぶる蛙も鳥羽繪かな
名香を焚きし胄も蓮寺に
笑む君に火難の相や蓮の風
歌かゝば雨や流さん留守の蓮
はきすてし馬の草鞋や花茨
浮島の或夜西して月涼し
遠眼鏡倒さに窺く山涼し
五車の反古燒けば蛇寄る香かな

送別

酢馴れず客去る宵を惜みけり
送別の二聯秀づる牡丹かな

○ 錦溪

七八町登りつむれば雉子谷に
いつのまに尾失せ足出る蛙の子

迦毘羅應現の聖を玆に花御堂
棒縞は給によしと選みけり
蟻上下草鞋寄進の夜啼松
松の根に海を寫すや蟻壽紙に
蓮の葉の翳せるもあり浮くもあり
對幅の愛蓮說も紅蓮洞
更闌けて園の筧の音涼し
(送別)君がゆく瀛車をかくすや雲の峰

○ 蛤城

さる程にお玉杓子も蛙かな
塔影の湖面に振ふはたゝ神

○ 秀榮

鮹一つ蛙子多き四ッ手かな
墜道を出て連山の若葉かな
吊床に覺めて頸邊に蟻殺す

涼しさや墨繪の不二の百畫會
藤蔓をぶらりと蛇の下りけり

○ 雨蛙

籔の家筍を煮る匂ひかな
蓮の雨しづかに進む禪話かな

○ 紘子

水乞ひの飛脚戻るやはたゝ神

○ 天嶺

橋落ちて渡れぬ山や雉子の聲

○ 雨峰

斧をとぐ谷の流れや雉子の聲
雉子啼くや銃音さかる射的場
大寺をめぐる小溝や蛙の子

○ 秋雨

二の飯場通ふ坑夫や雉子の聲
一の鳥居出て乘る駕や雉子の聲
五年杉植込む谷や雉子の聲
苔を掃ふて摺る碑や雉子の聲
畦放ちし天の棚田や蛙の子
針のよな刈株の芽や蛙の子
雨蛙八專の空風晴れに
砂しめる蘭の小鉢や青蛙
(北國)筍や鰯も飽きし日々の膳
愚痴無智に佛慧功得の甘茶かな
灌佛や二河の譬も畫法座
酒の故に祭いさかひ咎なし
畫顏や砂に消えざる煙草の火
蟻這ふや四國遍路の檜笠
蟻王軍引上げしあとの豪雨かな

斧を振ふ餘勢蟻垤に及びけり
雅懷述べて去る客僧や蓮寺
御謀叛の宮落飾や蓮寺
はたゝ神遷座のあとの淨め雨
瘤とれて涼しき顏やはたゝ神
風蘭の花や梢を蛇亘る
藻の花や白蛇封ぜし沼社
祟り樹の下のおどろや茨の花
一氣呵して成る奔龍や墨涼し
羅の下すく藍や袖涼し
黛や君が明眸涼更に

時評

校風問題

◉其の表面は甚だ平靜なるが如く調和せる統一あるが如く、校友等しく健全なる思想を有して苟も彌次らず、學修に是れ專ら厚きの風を爲せるが如しと雖も、實は大に然らず、萎靡沈滯の風一校を掩ふて內に燃ゆる理想の熱火なく、外競ふて衆庶俗惡の輕佻に迎合せんとし、眞善美の快感を追ふて考察する所なく懊惱なく士氣なく熱誠なし、一二の徒は方今の校風にあきたらずして悲憤慷慨の士を叫合し大聲叱呼刷新の軍を擧げんとすれども徒らに冷淡無識の徒の嘲笑に葬られて、未だ其の根底に澄徹せず、而かも、卑劣なる野心家は其の間に立ちて嫉視相誹り猜忌相擠し。巧に私利を是れ營まんとす。あゝそこに高尙なる青年の理想ありや、そこに一片校を思ふの赤誠ありや、そこに確乎たる信念の獨立ありや、そこに不惑篤學の風ありや、そこに眞摯なる輕薄の風に反抗する活氣ありや、こそに美なる思想の統一ありや、答へて曰く、全くなしと、若し何物かありとすればそは邪道を取て進む俗惡不活癈なる墮弱の弊風のみ。驚く勿れ是れ吾が四高の眞相なり、吾人は吾が校友の精神が全く瞑死せるにあらざるやを疑はざるを得ず、誰れか然らずと言ふものあらば乞ふ其の事實を聞かん。思へ、吾が先輩によりて稱へられたる校風刷新の聲は既に三年の昔なり、過去の二年は如何なりしぞや、而して今や果して如何の狀態ぞや、見よ、幾多の腐敗分子が稍健全なる分子をも拉し其の渦中に投せ

んとしつゝあり否や寧ろ此等が進んで彼等が
墮弱の鎔鑪に渾身を委せんとしつゝあるを、
あゝ濁流は已に其の復心を犯せり病魔は既に
膏肓に入れり、表面の平靜と外貌の盛觀との
裡あはれ濁流滔々として校風頽敗の色を載せ
て奔進しつゝあり現時は是れ萎靡沈滯の極度
也。今にして此れが匡正の道を講ぜずんば北
辰校の運命夫れ危い哉、

◉然り沈滯不振は確的なる事實なり。自覺せざ
る無責任なる校友の冷淡なる態度は思想の不
統一を歸たし、引ひて校友の隔離を生じ愈々
弊風を釀し來れり。吾人をして校友の校風に
對する態度を觀察せしめよ。或者は曰く、吾れ
は元來校風問題には不賛成なり、何となれば
吾れは四高の爲めに學ぶにあらず實に吾が爲
めに學ぶなり、故に學ぶべきは學び爲すべき
は爲せば、學校の盛衰校風の振不振は關心

事にあらず、要は只自己一身の利害關係如何
にあるのみと。而して彼等は常に凡俗と和し
得々として田舍廻はりの俳優を上下す。あゝ
何ぞその陋劣なるや、彼等は自己の利害より
他は解せざる指彈すべき利己主義者なり、否、
學校を賊する徒なり、吾人或は恐る、彼等長じ
て國家を賊するなきかを。第二の者曰く校風
の如き馬鹿げたる事には吾與らずと、此の種
類に屬する彼は所謂インダラ族にして只無邪
氣に現在の愚案を追ふ無定見の徒のみ、第三
の者曰く、校風問題の如きは不可能の事のみ、
否な寧ろ空想なり、故に校風を議する暇あら
ば宜しく遊ぶべしと。彼等は所謂事勿れ主義
にして不鮮明と曖昧とは唯一の旗色なり、最
後の者に至りては極惡なる分子にして校風を
咒ひ制裁の薄弱なるに乘じて益々非行を敢て
せんとする輩なり、是正に校風の敵なり。斯

くの如く獨斷の見地に立ちて放逸なる淺見を
いだく、而かも尙ほ統一を期し校風の刷新を
望む、吾人其の可なる所以を見ず。
吾人は迷ふ、校風問題に就きて意見を發表し
若しくは校風の實際問題に就きて努力するは
何故に他の所謂有識の徒の如く須かく避忌す
べきものなるか。吾人は詳かに之を知らず、
然れども是れ恐らく彼等は校風とは如何なる
ものなるかを解せざるに因らざるなきか、已
に之れを知らずとせば何すれぞ直ちに研究せ
ざる、彼等が冷淡なる態度吾人眞に痛嘆に堪
えざるなり。吾人は信ず、校風問題に關與す
る事が吾人の人格修養に何等の防礙を與へざ
るのみならず却て校風を刷新し、弊風を打破
するに勉むる吾人が精神的努力が吾人の人格
修養と全々一致することを。

◉然らば校風とは何ぞや吾人は玆に極めて簡單

に言はんとす、曰く、校風とは一校に充實せ
る氣韻也と、換言せば各人の人格より發射す
る光彩か一種の特色を有すること是れなり。
即ち一校の校風は其の本質に於て校友の光彩
ある精神を苞含し、校友の確乎たる信念を苞
含し、校友の篤學の風を苞含し而して人格相
互の感化作用を苞含す。此等の要素を打つて
一丸となし更に其特色嶄然として頭角を表は
す時こゝに始めて善美なる校風の發揚を見る
也。故に校風は團体員の思潮の統一を意味し
壓迫なき自由の調和を意味し人格相互の融合
を意味す、而して其の最も必要とするは人格
の感化なり故に若しこゝに生ける偉大なる人
格あらば校風發揚の如きは唯々たるのみ、蓋
し感化力の最大なるものは人格相慕の念に若
かざればなり。眼を四高の内外に放ちて偏く
崇高偉大なる人格を求む而かも不幸にして吾

人は豆の如き小なるを見るを得たるのみ於是、吾人は自ら起つて此の偉大なる人格を精神的憧憬の中に求めて作成せざる可らず、然らずして校風の發揚を望む到底不可能の事のみ、然らば其の方法如何、吾人は卑見なきにあらずと雖も是を一般に校友諸君の研究に委せんと欲す、只一言せんとす、先づ各人の心靈に革命を起せと。

（まさとし）

狂夫言

成川武男

河合良成君は三年の日月を沈滯せる四高の瀦水に數圓又數圓の波紋を振蕩して去りし我畏敬する未知の先輩也、然れ其瀦水は遂に瀦水也、風無くんば動かず、石投せられずんば動かず、樹影參差たるを、星影依稀たるを靜に抱て迫らざる隱者に似たれとも實は之死水也、動かせば卽動く、止むれは卽止む、水心動の一字遂に又見ず、我畏敬する先輩の去りし後は所定めぬ浮草の己かじゃに生ひ茂り、腐葉徒らに水底に蓄積するのみ、今や我も亦混濁の水底に蠢々する一年有半、氣漸く狂せんとす、氣狂せんとするは我に清冽の泉を慕ふの意あれば也、之君の狂夫言を不幸にして三年の後繰返さんとする所以也、我が禿筆枯るゝ時我も亦瀦水底裡の一塵たる乎否乎、嗚呼

「物に中心あり、他因果的結果物は之を圍繞して一團を成す、こゝに主義あり定見あり、燦として輝く時自覺の念は忽然として生ず。物中心を失ふ時其主義定見は箇々に分裂す、時は之に異同を與へ軋轢を與へやがて之を亡ぼす。恒星光を失する時遊星は無邊際に飛び去るなり。

北陸に一星あり。光茫大空を射てより十有余年、時に淡雲あり其光を蓋はんとする屢々なりしが今や漸く密ならんとす、紛々たる濁世を逃れて其聖光の尊を慕ひて來りし者光輝の失はれんとするを見妖氛拂ふ可しと叫ひしこと幾度かなりき。荏苒幾歲其の聲も今は衰へて「我行途や知る可らず、各自の道を求めんか」と叫くに至りぬ、此聖光を中心として、指南の光として集まりし者は相別るゝ時の近づき來れるを知るものゝ如し。

恒星光を失はんとし遊星は無邊際に飛散せんとする乎。

「人は己が信せる者の思はさる間に己を欺き、知らさる暇に己と背馳せるを覺る時程慘ましく、感する事はあらざる可し。

各箇一体としてある時は自由なる天地に浮遊す、墮落するも勝手たる可し。向上するも勝手たる可し、若此一箇体にして或中心的物象の結果物として立つ時は、是に義務生じ責任生じ物象の性質を解釋し說明せざる可らず。然るに此中心的物象の己を過まれるを覺る時、之を解釋し說明するは僞善なり、さればにや人世にありては幾多の悲劇を生ずるなり。免れんと欲しても結果的關係を持續せるうちに人の情の柵の離れ難くも纏綿するに至ればなり、一面に於て自由なる天地を有すると共に他面に於て責任ある天地を有するが故に自由の蒼浪に漂ひ去らんか責任ある自己を如何せん、責任の束縛に踢躇せんか僞ける天地に住するを如何せん。是に煩悶生じ苦惱生ず、汨羅は長へに恨を抱て流れ、リユカイデヤの岩陰は永劫に慘ましき浪音を聞く。

「我は義理の束縛に思ふ事の萬が一をも云ひ

得さる意志弱き若漢なり。されど一度僞信漲る天地にありと信せしより以來は一瞬も悱惋たる能はず、之れも亦意志弱く寸分の微動にも堪へ能はざる爲か、氣漸く狂せんとして僅か胸奥の二三を洩らさんかな。

「頃日我校裡堂々の言を聞く、曰く「審判は最終也」と

あゝ何等の美言ぞ、勇猛にして果敢なる各部の選手が壯烈なる競技をなす、至聖あり鋼鉄の筆を取りて四高史の一頁に最終の審判を書して勝敗を斷ず、選手等唯々として之命に從ひ敗れたるは臥薪の苦を積まむと欲し、勝ちたるは堅壘更に堅を加へんとす、何等の美はしき有樣よ。我は喜べり思はず嘆聲を發し「此壯嚴にして清淨なる地、正に眞生命を捧けて生く可きなり」と感憤の血は脈管に躍りて鳴れり。時に一聲あり叫んで曰く、「暫く其鋼鉄の筆を止めよ、我や審判の眼を過まれり、過まてる我が審判を其儘に斷ずるは壯烈なる勇士を傷つくるのみならず神聖なる判者の尊を汚すものなり、乞ふ暫く待て」他聲忽ち遮りて云ふ「否我は過てりとは見ず、我も神聖なる審判に一聲を挿むを得る者、我言何ぞ僞りならんや、我は尊き絶東の武士の名譽を賭して云はん、我は審判の至當を認むれと、鋼鐵の穗先は墨を含みて躊躇しぬ。我は恐れぬ、されど瞬間に其恐れのある可らざるを信じぬ、可憐なる選手が一歲の苦辛を其の一決に依りて決すれば必ずや嚴正なる見解を持して各云ふ處を綜合し最後の判決を下す可きを思ひたれはなり。我は中心敬愛の念に滿されて靜に決する處を見守りぬ。と見る筆端空を飛ひて頁の上に書き去りしを。おの〳〵く心おし靜めて其の迹をたとれば、曰く「審判は最終なり、一度決すれは又再ひす可らず、我は卿等に同情する者、されど今は詮術なし、乞ふ又多言する勿れ願はくば去れ」

審判を神聖至正のものと思し我は是に於てか聲を勵まして云ひぬ、二者今正否を云ふ、そも如何なる点に明晰なる判定は置かれしか、至聖直に答へて曰く「審判は最終也」我、眼目して叫ひぬ、審判の最終なる我よく之を知る、然れ共最終たるや正當の判定を得たればこそ最終なるに非ざるか、之を否とする者寸分も其の言を微せられず而之を最終と頑守する或は過り筆端既に飛び頁を汚せしが故を以て最終なりとするならん、然らば之そも何の言ぞ、我をして憶測を逞しくする者とせば願はくば我をして知る處あらしめ我至聖を敬愛する念をして更に深からしめよ。至聖頑として命じて曰く「最終たる可き審判には他人の容喙するを許さず、只速に去れ」我呆然として言なき多時。

顧れは北斗の光今はあるやなきに眸けり、あゝかの光亡ぶる時かと慄然として凝視しぬ。

我は最早や廻り遠き辭を以上に並べて卿等を苦しむるを欲せず、我は直に卿等と語らん、あゝ北斗の聖光を仰きて集まれる六百の卿等、卿等は最早校風を云々するを熄めよ、玆に器あり水を盛る、器は方圓の形を取りて水を靜思の内に收む、今器壞ぼてては水卽流れ去らん、止まるは沈澱せる不淨のものゝみ、我等はやゝもすれば溢れんとする奔放の意氣を僅に此方圓の器によりて支へたり、然るを思ひきや方圓の器は方圓に非らずして凸凹極りなきもの罅缺數ふ可らざるものたらんとは。我等が賴む敎の繩は絶たれたり、今は止まる可きにあらず、思ふがまゝに去れ、去つて各自の志す處に開拓せよ。校風とや、方圓の器ありてこそ美はしき校風は立つ可けれ、器既に過てり强いて立てんとすれば又凸

凹の校風ならんのみ、何を以て美を天下に稱ふるに足らん、雪となるも霞となるも只卿等か欲するまゝにせよ。

「我等は校裡常に聞けり、至誠之れ我等か本領ぞ、共同一致之れ我等か旗色なるぞ、實に至誠なるかな、我等は飽く迄も眞面目に道義の大舞臺に活躍せざる可らず、危うきは救ひ弱きは助け人生第一義に活動せざる可らず、而之を成し能ふ所以のものは我等に一貫して至誠の念厚ければなり。

宇宙は至大なり萬衆は極りなし、夏の最中を行く路に異花珍草の美に憬れ思はずも蛇ひそむ徑と知らで迷ふ者もあらん、冷朗宛轉の音に誘はれて計らずも絶壁の上尚耳底のうつゝに身の危を覺らざる者もあらん、紛々たる人世の行路時ありては道義の念の薄を嘆じ日を追ふては不作法なる喜劇の跳梁するを慨す。而迷ふ者は迷へ覺る者は覺れと我は獨り己か住む天地を清しとなすが至強の者の人生に對して執る道か。近代科學の發達は兎もすれは一種の個人主義に吾人を誘はんとす、然れ共我等は到底離れて生き得へき者に非ず、何處迄も互に救濟し以て道を求むる者而至誠は之を一貫せる信念たるに非らざるか。借問す我等を導く者果して至誠を以て之に對せりや、

「共同一致は一大理想の下に向上の途を進む可き最大要件なり、各美を相加へて最大美を容るゝ之れ共同一致の表現なり我等は此表現を渾成せんと欲す。人には我執あり己惚れあり、同一の行爲をも我にありては岡目八目を以て批判するは免かれさる所、從つて何事も己一個の了簡を成る可くんば行はんと欲す、之れ無用の事には非らざるなり、己惚と自信とは自覺の境を越ゆると越へざるによりて差別せらるゝ同一源泉より出る知的活動なり、自覺して自信なきは卑怯者なり、自覺なく且つ己惚なきは無氣力者なり、共に語るに足らざるなり。

人間は全知全能の者に非ず、從つて自覺なるものも畢竟之れ漠然として程度頗る不明瞭なるものなり、然らば己惚と云ひ自信と云ひ時としては極めて高き程度に於て相隣接する事もある可し、相隣接する事は扨おき相混合する事も多し、只四圍の事情を深く考察して自己の思惟と四圍の關係とを過去、現在、未來に渡りて最も圓滿に批判す可き能力を有する者即ち達觀の士なり。達人は物外の物を見るとは此の謂か。又云ふ「徑路窄き處一歩を留めて人の行くに與ふ」とは蓋し狹意の己惚、我儘を退けて複雜なる社會をして寸刻の猶豫も無く進歩せしめんが爲めなり。達觀の識を以て謙讓の德を以て初めて我等は無作法なる喜劇を避け得可きなり。而之れを一貫してよく斯点を保たしめ得る所以のものは至誠あれはなり。即ち知る共同一致とは之れ至誠の因果的結果物なるを。

我か眼をして更に四高史最近の一頁に歸らしめよ、そこに紛擾を釀したる至聖の言は之れ果して我か說く處を盡せりや、思へば今更らながらの感に堪へざる可し、敢て至聖の審判に狂夫妄言を挿みしもの又理なきに非らざるなり。

思へは我等が旗色は打消されぬ、我等か信念は打碎かれぬ、嗚呼我等か意氣魑魅魍魎も來らば來れと鍛へしものを計らざりき我か敬虔せる至聖に向ひて搢突かんとは、七百の兒以て如何となす。

○

「近來我校裡再び鐵拳制裁の議起れり、我ば喜びて其議に應じたり、社會の進歩せる今日の如

きに於てすら体刑は免れず、否一度之を廢せし者も又復興せんとする兆あり、人は遂に憐む可き者なり。世紀を重ぬる二十、文明の燦爛たる之を僅か十年の過去に比して、尚且つ紀を隔つるの感あり、かく迄も人智か社會百般の方面に向つて活動せる現在に於て、惡む可き悲む可き体刑は、我等か社會の安寧を維持する根本的要素の一として欠く可らざる者なり、況や單純なる頭腦を有し滔々たる濁流を去り、清冽なる尚武の流に生ける者か、其の一部分に腐敗せる氣生する時、鉄拳を振つて之を滅盡する尤も可なるものなり、之れ我か喜ひて其議に應せし所以なり。

議する者更に曰く、依て以て校風を發揚す可しと、是に至りて我秘に其の過まれるを知りぬ、知つて而默せしは其の擧永續的のものなれば、やがて云ふ可き機の是非共來る可きを知りたれば

なり。然るに何事ぞや、突如として起りたる鐵拳制裁は又突如として影を秘めぬ、我は驚かんよりは寧ろ呆れたり、我敬愛せる三年の諸兄、卿等そも何の思ふ處ありて、かゝる無謀を敢てせりや、風聲鶴唳以て四高に瀰漫せる沃氛を拂ひ得べしと信ぜられしか、若し然りとせば何ぞ無定見の甚だしき、團扇を取りて蒼蠅を追ふが如し、之れとても絶へずせば多少の効果はあらん、卿等の如きに至りては、大山鳴動して鼠一疋の感無くば非らざるなり、泡沫は浪に從いて動く、浪來れは高く登り、浪去れば低く陷つ、若しそれ、いさゝか荒き浪來らば影も止めず消へんのみ、水沫に似たる運命とは果敢なきのみに非らざるを知りぬ、とても我か四高は不幸なる哉。

卿等或は云はん、以て其の端を開くなりと、物の初めは大切なり、確固たる信念なく、うかと旅路に出る者は多くは身の覆沒を招く。振り出しの一瞬は、如何なる難局に會するも之を打破する不撓の念より尚其の上に充分の自覺を以て、初めて其一瞬に未來の成否を卜せしめ得るなり。卿等果して其の端を開くに當り這般の覺悟を持せられしか。卿等は更に後輩に對して云ふ、功の擧ると擧らざるは一に繼承する者の至誠に存すと。我は泡沫に從ふ榮譽ある泡沫に擬せらるゝを悲まずんば非らざるなり。

此擧をして斯の如きに至らしめしは、卿等の足か到底地上を離るゝ能はざればなり、風東より吹けば西に搖ぎ、北より吹けば南に搖ぐ、常に判然たる立脚地なし、一難に際する毎之を裁決するに徒らに證跡の有無に拘泥して、逡巡決せず、遂に一場の喜劇に終りたるは當然の事のみ、若し卿等に事の性質を了解して立つあらば何ぞ證跡の多少を論せんや。歴山大王はゴージャン、ノッドを一擊にして斷てり、卿等何ぞ在らざる所に謎を作りて強て自ら迷はんとする、さるにも彼と此との懸隔の甚だしき事よ。

春の日の麗らゝかなるを、無事に苦める卿等は心惡しとて此の遊戯を爲されしか、とても枝頭の蜂巣を毀たんとならば、多少の苦痛は忍ばれても必ず之れを毀たんと云ふ覺悟にて爲らる可きなり、若し卿等の事、不幸にして成らずとするも、我等豈傍觀すべけんや、活躍の兒亦無きに非らざる可し、最初より戯を以てせらる、數蜂劍を振つて出づれば卿等則何處に行きしかを知らず、卿等の意を誤解して尻馬に乘りし後輩の迷惑知る可きのみ。

卿等恐らくば此遊戯を以て卿等が去るに當りて四高に殘す好箇の紀念とせん。否既に紀念とせられたるなり。我等か迷惑知る可きのみ。他日活躍の兒ありて其眞意氣を了解し熱誠を以て

立たんとする時、卿等か紀念のため障害さるゝや測る可らざるなり。腐敗漢一掃の語を聞けば直に聲徒らに大にして行の餘りに輕小なるを聯想せずんば非ず。校風發揚の怒號を聞かば只野狐禪的の空喝を彷彿して微笑を禁する能はざらん。到底無作法なる喜劇の範圍を出ざるべし。之れ卿等か累を後輩に殘せる所以、抑も又卿等か不謹愼に依るなき乎。

「我れ先に默せりと云ひぬ、そも何を默せりや。乞ふ我をして云はしめよ。校風とは何處にても云ふ事なり、一國に於ける國是なり、然かも其の如く罪深きものに非らざるなり。我か校に在りては共同一致の精神に冠らす可きもの卽校風なり。近時我校風は埋沒せり、語るものも無く問ふ者もなし。會々有れば泡沫の校風のみ、風の向きによりては時々多く生ずれ共一夜を經れば跡を止めず、笑止の至りに堪へざるなり、之れらも何の因ぞ。

「我は先に云ひぬ、恒星光を失ふ時遊星は無邊際に飛去るなりとあゝ七百の兒、卿等は校裡仰ぐ可き恒星ありや、不幸なる卿等は皆否と云はん、卿等は常に叫びて「北斗の靈光」を唱ふ、其美はしき光、其のすがやかなる輝、之れ恒星の表象なり。然るに恒星は表象のみを止めて實体なし、實体なき表象を追ふ者は頭腦のみ有して体軀なき不具者なり、不幸なる不具者に何ぞ完美せる校風あらん。

先に鉄拳制裁を以て直に校風發揚を云々するを過てりと云ひし意は玆にあり。警察をのみ嚴重に爲したればとて一國道義の念盛なるに至らさる可し、否、至大の主權者あらば些少の罪惡の如き皆自ら消滅せんのみ。論者何んぞ斯点に眼を注かざるか。

ローマは何によりて榮へ、何によりて亡びしか。偉大なる中心あり、眞面目なる分子之を包む、於是かローマの光威は宇内を壓せり、中心既に腐敗す、之を包む分子清らかならんと欲するも又能はず、志士か熱喝も病膏肓に入りては遂に何等のオーソリティーに値せず、滔々たる墮落の勢は到底防ぎ得ず、憐れや世々の血もて飾りしローマは遂に永遠の都ならず、南歐の岸を洗ふ蒼浪は徒らに幻の如き榮華を夢語るのみ。歴史は過去を繰返すと、誰れか又此轉變の史を知らぬ他國の事とのみ聞かんや。

「仰けは一の星輝なく我等は闇に包まれぬ、さらばあれ哭天慟地骨を尾山に曝すか節か、孤劍悄然去りて我使命を開拓す可き地を求むるか操か、我か心惑ひたり。再び問ふ、七百の兒以て如何となす。

部報

演說部

嗚呼平田先生

陽春闌にして櫻花將に笑はんとする四月六日幽風一過吾等の最も敬愛する恩師平田先生は空しく青雲の壯志を抱いて長逝不歸の客となり給ひぬ

先生性寬弘磊落不羈利に淡く情に深く博學深智文采燦然快辯流るゝ如し夙に身を以て社會敎育に任じ給ふ大學を卒業後一時某新聞社に入社し給ひしも腐敗俗化せる此の社會神聖の身を置く處にあらずとなし飄然去つて臺灣總督府に奉仕し給ふ事數閱月阿諛追從を昇級の階段とせる汚濁の官海曷ぞ廉潔なる先生に適合せんや五斗米に膝を屈せんよりは如かず流浪せんにと

要するに先生は記者としては餘りに淸淨なりき官吏としては餘りに高潔なりき若し先生の學才卓識を以てして榮達を望み給はゞ顯榮の地唾して取るべき而已然れども先生の理想は敎育にあり希望は神聖の地にあり眼中位階なく富貴あるなし

玆に於てか斷然身を敎育界に投じ給ふ敎育家固より多し去れど眞の敎育家寥々として曉星の如き今日渾身敎育に捧げ給ふ先生の如き至誠の良師を得たるは實に敎育界の一大慶事にして且つ適所に適材を得たりと云ふべきなり而して吾が校先生を獨占するに至り特に吾が部先生を占有するに至りては皇天吾に幸する何ぞ夫れ深き

先生吾等を敎訓指導し給ふや犀利なる說明周到なる注意懇々切々智を盡し情を盡し物質的に精神的に全身を傾注し給ひしは吾等の深く感謝す

る處殊に先生の吾が部に注ぎ給ひし熱誠に至りては吾が部一同只々感泣の外辭なきなり

カーライルは云へり各自は多少の英雄性を有す而して眞の英雄は渾身悉く神明の靈火より成る英雄一度降らんか一般の人間は其の靈火に各自の英雄性を點火せらるゝと

思ふに先生の吾が部に降臨は大雄辯家としての英雄の使命を齎し給ひしにはあらざるか

爾來吾が部の惰眠を貪る事十數年一度先生を得てより恰も三百年の眠りを浦賀の砲聲に破られし幕末の如く吾部は長き眠りより醒めて辯士の輩出するもの彬々續出し至誠堂裡懸河の辯聞かざるの時なく諤々の論響かざる事なかりき見よ名而已にして實なかりし討論會は先生を待つて初めて其の產聲を揚げしにあらずや

小會に公會に會を累ぬる數回其都度先生の快辯聞かざる事なく英姿拜せざる時なかりき余は一學期に於て豫言せり吾部が平田先生を軸として大會に小會に討論會に擬國會に如何に大回轉をなし大發展を遂げ北辰會演說部討論部に未曾有の黃金時代を現出せんことを

演說部の大活動は先生が大目的の只一小部分の發現に過ぎざりしなり今や先生多年螢雪の蘊蓄廣大の理想其の驥足を伸ばして着々成功の殿堂に近づき北國の敎育界を刷新し金澤の商業界を振興し尋では東都の文壇に靈筆を馳せて將に爛熳の花開き累々の果實を結ばんとするに當り昊天何事ぞ前途遼遠の先生を夭折せしめしは嗚呼悲しい哉

回顧すれば三十餘年間拮据黽勉炎熱を冒し烈寒を凌ぎ給ひし先生の經路は朔北の野に八ヶ月の風霜氷雪を忍び給ひしにも似たらずや而して北國の花先生知らず先生の花北國に知られず是れ生等子弟の冲々哀慟を禁ずる能はざるなり

蓋し萬卒は得易くして一將は得難し而も業未だ半にして良將を失へる吾等萬卒抑も何處に適從すべきか先生が朗々の音吐今尚耳底を去らず颯爽たる英姿今尚眼前に髣髴す然るに英魂去つて永遠に歸らず實に生等鐵腸寸斷するを覺ゆるなり

譬へ先生の花は開き實は結ばざりしと雖も譬へ教育家としての先生は短日なりしと雖も其の遺薫餘香は幾多の小平田先生となりて先生が生前の素志を理想を實現せずんば止まざるなり

蕪辭を列ねて靈前に哀悼す願はくは英魂之を享けよ

（堀田時次郎）

雜報

叙任辭令

陞叙高等官四等　教授　西　英盛
陞叙高等官六等　教授　高橋周而
（四月三十日）

講師ヲ囑托ス　岡本　勇
（五月五日）

叙正五位　從五位　今井省三
（五月十日）

五級俸下賜　教授　高橋郁治
六級俸下賜　同　市村　塘
七級俸下賜　同　小田切良太郎
八級俸下賜　同　宮川熊三郎

吁平田德次郎先生

北國の春は櫻花の節に入つて皆人は花の衣にならんとする時、正に四月六日、遽然我が平田先生の訃を聞く、夢か夢にあらず、現乎、否乎。

月の初、急性腹膜炎の爲に床に就かれしとも折柄から休暇中なりしが故に知る者なかりしを以て晴天の霹靂ともいふべき此凶報を誰かは俄かに信じ得べき、僅かに一週日の前、教壇上にまみえし凛乎たる音容、依稀として尚ほ眼前に在り、而して先生今や黄泉夜臺の上に永へに覺めざるの眠に就き給へるか、悲矣、

回顧す、去歳の秋九月、吾等先生を迎へてより日夕その薫陶を受けたるもの未だ期年ならずと雖も、人に對して毫も城府を設けず率直にして眞摯、高潔にして而も洒脱なる先生の高風

は夙に吾等の敬慕して措く能はざりし所也、之を聞く、先生の一高及大學時代に於けるや其德操常に衆諸の歸服する所なりきと、宜なるかなその人格に於て嶄然一頭地を拔けりしこと、一度は官界に入つて其俗流に伍するを潔しとせず、轉じて操觚界に投じて一世の風敎を指導するの途を擇ばれたりしも更に育英の事に身を委ぬるの快心事に如かずと爲し之を以て必生の業とし將さに大に爲すあらむとするの雄志を抱いて期待未だその緒に就くに及ばずして壽既に盡く、天乎、命乎、天地茫々たり問ふ可らず、問ふ可らずと雖も焉んぞ哀悼の情に堪ふ可けむや。

先生の易簀に先つこと月餘、乞ふて本誌原稿として「孔門夜話」と題する一文を草し與ふ可きを約さる、蓋し先生當時「孔子家語」を讀んで孔門師弟の情誼に私淑せられたる所篤きものあり し也、亦以て先生が風尙の一端を察すべし、悲しい哉、斯文遂に見ることを得ず、曩に賜ひし所の「人口論」一篇、誰れかは期せん遂に先生の形見とならんとは、高躅を追ひ、今昔を回顧して徒らに悲慕の情を增すのみ。遮莫、吾等先生の高風に接し、其神采に觸るゝの間先生に依つて蒙りし精神的感化の賜は今に至つて始めてその偉大なりしを感せずんばあらず、今より後、斯心墮せず、斯心廢せずんば庶くは先生の志に背かざるを得んか、生や死やその理一、徒らに兒女の泣を學ぶは先生を哭する道ならんや、謹みて弔す。

（阿部眞見記）

平田先生追悼會

「喪に籠る弟子七百や花の雨」、四月八日霏々たる春雨梢頭の花をこめて煙れるが中を故平田先生の靈柩は泉村の茶毘所へ送られぬ、從ふ所の遺弟子七百、聲を呑んで步遲々たり。

次で十三日、先生の追悼會は西町なる大谷廟所に於て英語部職員、一部三年生、三重縣出身學生、及被監督生等の發企によりて擧行せられたり、職員一同及受業生の參會するもの二百名、尙ほ御滯在中なる先生の御遺族並に先生の舊知、石川縣事務官石原磊三氏及び片岡文理氏の臨席せらるゝあり、午後三時半一同佛前に着席、僧侶の讀經あり、終つて燒香に移る、故先生の未亡人が僅かに三歲なる令嗣健郎君を擁して燒香の席に進まれし時、そのいたいけに何事ともわきまへ給はぬさまにぬかづき給へるを見ては滿堂寂として涙を呑む、次で故先生の令兄力之助氏、及び岳父の君の燒香あり、中野敎頭は職員を代表して、岸雄太郎君は被監督生の總代として、恒岡隼雄君は三重縣出身學生の總代として祭文を朗讀す、終つて一同場を退き門前にて紀念の撮影をなし更に會場に復して之より故先生の追懷談に移る、

石原事務官は一高時代に於ける先生の同窓也、同窓なりと雖も予は平田氏の後進也、特に親交を辱ふせしものならざるが故に平田氏に就て語るべき適者にあらざるを遺憾とす、されど予が知れる平田氏は飽くまでも高潔なる人格を以て儕輩の間に重きを爲し、人物也、一高が向陵に自治寮を建て、籠城主義を標榜し今日あるに至れるは平田氏が創業の功に負ふ所少からざる也、當時儕々たる學徒の間に在つてその風尙終始一貫して變る所なかりしもの我が平田氏の如きは蓋し稀れに見る所、その大學を出づるの後、一たび職を臺灣總督府に奉じたりしも斗米の爲に節を屈するを潔しとせず幾くもなくして官を去り、轉じて「日本新聞」に入り筆陣に立つて

一世の風教の指導に志されたれども流俗に伍して永く事を共にするは蓋し氏の意に非りし也、唯育英の事に從はるゝは氏が最も快心事として永く安住の地位を茲に見出されたりしに未だその業をみるに及ばずして逝かれたりしこと最も惜しむに餘りあり、惜むべき此人格は永く後進に範たるに足らむと先生の德を稱して壇を下らる、次で駒井教授は先生が病蓐に在つて親しく看護されたりし經過を語られ、最後に赤井教授は嘗つて先生と一高の同窓たりしもその科を異にしたれば特に親しく知れる所なし、先生が在學の日、懸賞論文募集に應ぜられて一等に當選したる「日本將來の道德を維持する方策を論ず」の一文滔々博議數十頁に亘れるものあり以て先生が思想の一般を推すに足るべければとて斯文に就て先生の思想、抱負の尋常ならざりしことを說かる、終つて令兄力之助氏は一場の挨拶を述べられ故人が該論文の賞として得たりし「沙翁全集」は之を圖書館に寄附して以て聊か故人の紀念たらしめんと、稲本君衆を代表して謝辭を述べ茲に閉會を告ぐ、時に六時半、遲日そこはかとなく暮れゆきて蒼茫たるの時、仰げば枝頭の花ほのかに白し、「今日春光君不見、杏花零落寺門前」、無限の春愁、闇と共に襲ひ到る。

（阿部生）

祭文

金澤の地由來雨量多し特に冬季を以て甚だしとなす晩秋より初春に及ぶ約半歲雨雪連月殆ど天日を見ざるの概あり故を以て一旦雪消え氷解くるや百花亂發蝶飛び鳥啼き人心亦曠怡いはゆる春風春水の一時來を覺ゆるを常とす而して今や陽春駘蕩まさに其の好時に會し市人出遊花下に狂舞す而も此の時吾人の心緒なほ結ぼれて、桃李梅櫻毫も遊意を促さず何の故ぞや故法學士平田德次郎君の長逝痛く吾人の心を傷け哀慕の念切々禁ずる能はざるものあれば也嗚呼君が美風弘德仰げば愈、大なるかな就中一事の痛惜に堪へざるものあり何ぞや君が多年螢雪の苦を積みて漸く贏ち得たる多大の蘊蓄を抱いて空しく逝ける事是也抑も初就學より小學中學を經て高等學校法科大學の卒業に至る長き課程は恰も此の地の冬にも似たらずや霜に堪へ雪を凌ぎ當に人生活動の陽春に向へる美花忽として一陣の嵐に散ず遺恨何者か之に過ぎんや嗚呼今月六日君が遂に起つ能はざるを知りし刹那そも如何の情か君が胸裡に去來せし月の八日君が柩前に哭し今また君が靈前に泣く冀くは微衷を察せよ泣血再拜

明治四十二年四月十三日

第四高等學校職員總代　中野　嘉作

平田先生を祭る文

維時明治四十二年四月十三日不肖の生等敢て一堂に會して第四高等學校教授平田德次郎先生在天の靈を祭る顧るに先生業を最高の學府に終へ職を官途に奉ずる事期年先生の質能く五斗米のために腰を折るに忍びず去つて無冠の帝王たる新聞記者となり直論忌む所無く侃々諤々の議以て一世を風化せんとせり然れども先生己が使命の薫育陶冶の事にあるを知るや斷然筆を焚ひて以て聘に我校に應じ爾來孜々として倦まず屹々として撓まず功名を擲却し亭々として高く風塵の外に竦ゑ一に只だ愚鈍の生等を導くにこれ勤め給へり温厚の質能く清濁併せ呑み廉平寛和にして誠を推し物を愛す然も儼として犯す可らざるの氣品を備へ事に當りて口を開けば大言高論傍ら人無きが如く識見遙かに時流に卓越せり其

操行嚴肅自ら持すること質素高廉一點浮華の心なく半片脂粉の氣なし死に至るの日なほ病の痛苦を訴ふる事なく其口にする所は只だ學事にあり生等が上にありしなり眞に教育界先生に於て其人を得たるの感なくばあらざりしなり不肖の生等漸く先生によりて前途の光明を認め希望の星辰を仰ぎたるの思ありしに由來好事魔多し嗚呼哀哉星斗俄に隕ち玉蘭忽ち摧け月の六日溘然として館を捐て給へり訃音一度手に落ちて西風急に舊夢心に關して夜雨頻りなり然も幽明遠く相隔りて先生の聲咳また何處にか接するを得ん憂心亂緒をなし涙横流して滂沱たり烟雨萬山を籠め花亦憂を含むに似たり嗚呼

先生年齒僅に三十有六其企畫抱藏する所眞に知る可らざるものありしに徒らに寶玉を擁して空しく白玉樓中の人となり給へり誰か痛嘆せざるものあらんや然れども先生の一生はげに教育者の範疇たり其功業は永へに移らざらん否我第四高等學校の存する所先生無窮の生は存せん誠の永生は其形骸によつて生ずるものにあらず實に其人格に依つて生ずるものなり以て聊か永別の悲を慰むるものとせんか靈前の薄奠涙悲風に洒ぐ先生の靈尙くは彷彿として來り饗けよ

第四高等學校生徒並ニ被監督生總代

明治四十二年四月十三日　岸　雄太郎

頓首　百拜

從軍記

五月五日粟ヶ崎附近に於ける發火演習、

はしがき、

猫は鼠をとる事を忘れ人間は借金のある事を忘れると云ふ春も暮れ方になつた。若葉の香りは新醸りの酒のように野山を浸して、日光は樹々の梢を花やかに照して居る。綿入は行李の奥に蟄居を命じて袷一枚に氣も心もすが〳〵しくなつた昨日今日、日頃は辭書と首引の、頭を擡げて、明日の天氣はどうだらうと平素御無沙汰の碧空をつく〴〵と、今更のように眺め入る。

五月五日、珍らしくも晴れ渡つた、が穩かならぬ雲が西空から北へかけて一面にはびこつて居る、朝風がそよ〳〵と戎衣を吹く、三々五々相携へて校庭に馳せ參ずる健兒七百。中には、今日は端午の御節句だ、隣りの竹公に菖蒲刀で擲られたのは何年前だつたらうなど〵心微かに追懷してる男もあらう。

午前八時、グローブの花咲き亂る〵運動場に整列した、例によつて嘹喨たる喇叭の下に校旗に對して最敬禮を施す、破れたる旗、燦たる星章、吾人に語る歴史は何ぞ？

次で前面、寄宿寮上の窓に、敵兵ならぬ寫眞屋君が現はれた、これは今秋行啓遊ばさるゝ東宮殿下に献上する寫眞帖に此一葉を加へんがためである、同じ目的で此二月、行はれた演習の曉、降りしきる大雪の中に整列して撮つたのであるが、出來上つて見ると、中に不動の姿勢であるべきのが勝手に自我を暴露した、所謂天醜爛熳たる人が二三あつたので撮り直す事となつたそうだ、

撮し終るや、司令官は馬首を廻らして次の報告及命令を與へられた。

粟ヶ崎附近を擊攘すべき任務を有する當校學生聯隊は、五月五日午前八時靜勝館に集合す、此時までに得たる狀況次の如し

一、津幡附近に於ける戰鬪は彼我共に現狀を維持し、些少の進捗を見ず

二、我が學生大隊を追躡せし敵は、激烈なる

逆襲に辟易して退却中、金石在郷軍人團の伏兵掩擊に遇ひ、殆んど殲滅せり、

三、粟ヶ崎附近に上陸せる敵は躊躇前進の模様なきも、本戰には多大の影響を與へつつあり、

四、能登門前町附近に籠城策を執りし輪島、穴水附近の人民は戰鬪を開始し敵の根據地七尾町を衝かんとし其第一着として既に決死隊をして敵艦並に運送船底を爆破し、大部分をして、一時使用に堪へざらしめたり、隨て所在義兵の起る事恰も蜂巣を破るが如しと

五、在金澤市各縣立學生隊の先鋒たらん事の要求あるも、當校學生獨力從事するに決し、市の防備は依然現狀を維持せり、

命令（五月五日午前八時）、

一、敵は依然粟ヶ崎附近にあり、我師團諸兵は津幡附近に激戰を繼續しつつあり、能登地方所在義兵起り、既に決死隊は敵艦船を爆破せりと、

二、學生聯隊は二縱隊となり粟ヶ崎附近の敵を夾擊せんとす、

三、第一部學生大隊は右縱隊となり小林講師これを率ゐ、東西兩別院前を經て堀川口より粟ヶ崎街道を前進し、左縱隊と協力、敵の左側より攻擊すべし、

第二、第三部學生大隊は、左縱隊となり大野講師之を率ゐ、安江町より金石街道を大野町を經て右縱隊の攻擊動作を待て、敵の右側より攻擊すべし、

四、大行李は現在の集合地に在て後命を待つべし、

五、予は左縱隊と共に前進す

學生聯隊長　田邊講師

命令終つて順次進軍喇叭と共に校門を出る、時に八時半。

今、當日の幹部を記せば左の如し、

聯隊長　田邊盛親

一部大隊長　小林平藏

二三部大隊長　大野平作

一部大隊指揮官　松本慶昭

二三部大隊指揮官　小谷仁十郎

一部大隊第一中隊長　金田才平

第一小隊長　植村義重

第二小隊長　熊谷覺性

第三小隊長　富田武彦

第二中隊長　神田外茂夫

第一小隊長　中村泰治

第二小隊長　關口一男

第三小隊長　帶金悅之助

第三中隊長　松島亮二

第一小隊長　酒井清

第二小隊長　北村與三郎

第三小隊長　文室重敏

二三部大隊第一中隊長　佐竹清

第一小隊長　中川幸二郎

第二小隊長　櫻井信次郎

第三小隊長　宮田格

第二中隊長　森尻麟之助

第一小隊長　早上陽清

第二小隊長　池田慶

第三小隊長　田宮猛雄

第三中隊長　木越重政

第一小隊長　下瀨憲造

第二小隊長　原口忠次郎

第三小隊長　伊良原國市

給養係　松村久太郎

記錄係　佐藤正俊

同　鈴木敏也

○出發、

大路小路を幾つか過ぎて堀川口に出で、市街を離れると流石に初夏の匂ひは、行く春を縱に貫いて、長閑な中に何處ともなう活躍の氣が溢れて居る。暫くして雨がポツリと來た、見上ると又ポツリと來た、いつの間にか雲脚がしげくなつて雨は次第に落ちて來る、唯加能連山の邊りには夢のような碧空が我世なつかしと計り微笑んで居る。九時半、沿道の一寒村に休憩する、顧ると二三部大隊は路を異にして大野町へ向つた。結局これが假設敵になるのだから愉快だ、この大隊の事は別に記す人が居る、こちらの領分ではない、

小林大隊長はこの時左の訓令を發せられた

右縱隊演習に關し訓令の要示

一、右縱隊は堀川口を出發し戰備行軍を執り、斥候、尖兵、傳令勤務の一部を演習する事、之れがため所要の假設敵を設くる事

二、左縱隊の戰況は粟ヶ崎到着の上、演習統監より指示す、

三、空砲各自、十發とし途中に於て斥候、尖兵の小部分使用し、餘は本戰に於て使用するものとす

四、假設旗、赤は步兵第一中隊、赤白は步兵一小隊、白は騎兵とし假設及實設敵共に白帽とす、

かくて大隊長は決死隊六名を選拔して行く〳〵敵情を偵察せしめた、六名は本街道を左に折れてそれ〴〵任務を全うせんために欣然として前進する、姿は暫くにして村落の中に見えなくなる。

本隊は第一中隊を前衛として眞一文字に粟ヶ崎に向ふ。雨は晴れて雲は散つた。日影を負ふてひたぶるに行けば汗はいつしか流れ出す、前衛は斥候を放つて搜索したが隻騎の影もない、進みすゝみて十時半遂に粟ヶ崎に入る。祀前、先きに赴いた決死隊の一人に遇ふ、敵影を見ずとの報告である、大隊長は暫く軍を松林に憩はしめ更に進めて海濱に連なる砂丘の後方なる雜木林中に留らしめた。此時、彼方高地の三角點に聯隊長は馬を止めて四方を展望して居られたが、傳令を以て我大隊に走らせて「唯今軍隊の演習中なり、學生大隊は砂丘に於て見學すべしと」の傳令を傳へしめた。

○軍隊演習の見學、

そこで、各隊砂丘に陣取つて見物する事となつた。砂丘の下は一面の平かな砂地で二町許り彼方には春の海がのたり〳〵と靜かに岸を洗つて居る。ずつと右手を見ると白砂の上に黑胡麻が一列に散らばつて、それが、どん〳〵此方へ近づいて來る、「前へ」「何百米突！」の聲ばかりが意外に近く聞へる、黑胡麻はだん〳〵殖えてその上大きくなる。砂山の蔭から別の胡麻が現はれる、後からも亦出て來る、胡麻が蟻になる、蟻が甲虫になる、それが見る〳〵人間になる「止れ」「何百米突」「急ぎ打ちかゝれ」、ポン〳〵と銃聲がして烟がぱッと散る、後から來る甲虫が、いつの間にか人間らしくなると、前の一列はもう、鐵砲を持つて、劍をつけて立派なリ、バットの兵隊さんになつて居る。

左に目を移すと小高い處に七八人の兵隊さんが赤旗をしきりと振つて居る、又右を見ると以前の黑胡麻は悉くリ、バットに化けて、それがだん〳〵大日本帝國軍人になつて來る、帽子の赤い色も背囊の茶色も判然として來る。將校は聲を限りに號令をかける、その聲の下に「伏せ」をする、發射する、駈ける。われらの見物してる下を疾風の如く駈けぬける、すると又留まつて彈丸を注ぎかける、「交互に附ケ劍」の號令がか

して、こゝから迸る、銃劍の光は日光に映じてキラ〳〵する、「前へ」で又疾駈する。「突込め！」忽ち吶喊の聲は海濱を壓し、波濤を壓して猛烈に轟く、休戰喇叭はこの間を貫いて鋭く響き渡る。演習はこゝに終つたので見物の我等もホッとする。

○戰鬪開始

この時大隊長は隊伍を整へ、砂丘を下つて、敵に備ふる處あらしめた。すると決死隊の一人は息せき切つて走つて來た

敵約一個中隊、大野村占領前進中なり、その前衛なるが如し

と報告する。愈よ今度はこちらの番だ、時計を見ると十一時四十五分！曰く、腹がすいては戰は出來ぬ、又曰く、腹がへつても餓うない、この二語が殆んど同時に身体中を駈けめぐる。敵を待つ正に二十分間、銃聲を聞いたのが十二時五分、戰鬪開始を見たのは十二時十五分。白帽の敵は前面の高地から現はれた。

我大隊は、この時第一中隊(三年)を中軍として、第二中隊(二年)を右翼、第三中隊(一年)を左翼と云ふ隊形である。

諸教授を初め見學の諸氏は三角點の砂山の上に戰況を視察して居られる、予もその中に仲間入して眼鏡越しに北辰健兒の武者振りを拜見した。

彼我の距離は漸次近づく、散開は中々奇麗だ、殷々の聲は耳を貫き硝烟は砂と共に立上る、壯絶の極みである。ノードブックを抱へて校門をくゞる姿とは天壤の相違である。悉く豆腐屋出身であるかの如く獰猛である、此分では華族と金持とは泣き出すだらうと思つて居ると、突然第二中隊は迂回運動を開始して、暫らくして砂丘に遮られて見えなくなつた。刻一刻と距離は迫る、戰は激しくなる、支那人の口吻によれば乾坤覆らんとする程凄しい。忽ち兩軍の大隊長は殆んど同時に着劍を命じた、天地暗憺として殺氣全軍を壓すと云ふ有樣である、重ねて突込めの命が下る、散開せる各隊は見るが中に一大密聚團となつて白兵戰は眼前に演ぜられんとした、その一刹那、嚠喨と響きわたる喇叭の音に演習はこゝで一段落を告げる。

こゝに一言して置くのは、突擊の際、第三中隊は中隊長の指揮よろしきに反して大に亂れて見えた、實戰であつたら全滅だらうと予等の如き門外漢にも思はれた。これにひきかへ、第二中隊が敵の虛を衝いて大に其荒膽を挫いたのは痛快であつた。と云ふのは英雄胸中閑日月ありとか云ふのか戰鬪中、一部隊の掩護射擊の下に一部隊は兵糧をせしめて居た、處へ不意に敵が前面の丘に現はれたので、少々面喰ひの氣味ではあつたが惜氣もなく兵糧打すて猛然と着劍して一齊に群る敵の中へ躍り込んだ、此時敵の中隊長は非常に狼狽して休戰喇叭、休戰喇叭と悲鳴(惡く云へば)を揚げられたそうである。

云ひ落したが開戰の初め第一大隊の戰鬪線に赤旗を持つた兵隊さんが七八名、ぼんやりして見物して御座つた、これを見た松本指揮官叱咤一番「そんな馬鹿な兵隊が何處にあるッ！」兵隊さん大に泡食つて逃げた樣ッたら眞にポンチの材料であつた。

演習の終つたのは正に十二時半、兩軍隊伍を整へて後、晝食の命下る。

○休憩、

さて、思ひ〳〵に根城を据へて、それ〴〵の兵粮に進擊した後は、或は濱邊に腰かけ乍ら、天空海濶の間に傲然と一灣の風光をわが物顏に嘯き、或は磯馴松の下蔭に、行く春を託しく咲け

る草花を褥として、暫しの轉寢をむさぼる。面袖をかけた樣な蒼空には、懶げな白雲が立迷うて、沖より寄する潮の響は太古のまゝの曲を奏でゝ居た。

○騎兵の襲擊、

二時、集合喇叭は物靜かな磯山を搖かして、響き渡る。右より左より、叉銃線に集まつて來る、三々五々、忽にして隊伍成り將に金澤に向つて凱旋せんとした時、唯見る前面より騎兵の襲擊！

これを見るや聯隊長の咄嗟の號令に全軍を擧げて彈丸のつゞく限り、敵騎目がけて雨霰と注ぎかける、猛勇なる敵も五歩に廿騎十歩に五十騎、瞬くひまにその精鋭を失ひつくし、打ち洩らされの小部隊は遂に算を亂して右方の森に退却して了つた。

○歸　校、

かくて軍を進めて粟ヶ崎神社の境内に少憩する、この間に聯隊長は例の如く「自分が今日の演習に就いて意見を述べる」を冒頭として、優れしを賞し、足らざるを訓へ、滿面笑を湛へながら滔々數千言、懇切なる講評があつた、

三時二十分歸校の途につく、坦々たる二重の鄙路、軍歌の聲に送られて水温みゆく里川を渡り、蓮華咲く野に雲雀の歌を聞きながら、晴れたる日影の下を金澤に入つた。時に五時。喇叭の音に草鞋を踏みしめて校門をくゞり、靜かに校旗を送つて解散したのは五時二十分であつた。

日毎日毎、限りなき穹窿に宇圜を劃しつゝ日は曙に出でゝ暗に入る。――、思ふ、一年は一刻の如く、一刻は刹那の如し、刹那、刹那を積みて重ねて百年の遠きに至る。荒磯の一日は吾人が歷史の一頁である。七百の校友よ、公等が一日の行軍に於ける意氣と活動とは眞に賴母しきものであつた、その心を以て恒の心とせよ、と終りに臨んで一言を呈して置く。（としや）

第十三回春季水上運動會

越山飛峯逶迤として夢の如く走り、銀冠近く寶達の峯に消ゆ。河北の水宛轉として鏡を連ね、碧波遠く北海の懷に沒す。樹間の紅雲今や影を藏め、薗圃の間黃霞十里、蝶舞漸く酣なり。大野の河邊、旭旗に戲るゝ春風は心地よき軍樂の響を傳へ、艇中の健兒鐵腕を振へば、オール風を切つて流水玉と碎く。時は卯月二十五日、第十三回春季水上運動會は勇ましくその開會を報じぬ。八時と聞きしが、時針は既に十時を指さす。

赤旗を揭ぐる傳令船矢の如く走るや、河面を掩へる幾多の小舟、颯然風に靡くが如く左右に分れて路を開く。友の聲援に送らるゝ艇中の銅顏、莞爾として銀齒を露はしその鐵腕を撫して必勝を期す。嗚呼たのもしき日東海國の男兒なるかな。

忽ちスタートに白煙上る。すわと見る間に砲聲轟き軈てオールの運び整々堂々、突角を曲つて其の形を現ず。初めは白鷗の波間に泛々たるが如く、中ごろ白鷺の青空に翔けるが如く、終りは白箭の閃過するが如し。痛快實に極る矣。

第一回一艇身の優を以て青先頭す。四分二十秒。第二回赤一着、四分、白青到底その敵にあらず。第三回赤一着四分十五秒。第四回に於て初めて人をして雙手を握らしむ。互にヘヴイーに入るや三艇赤先んじ白進み青又進み、甲壓し乙制し觀者ためにアッと叫ぶ事數次、一髮の間を以て青白赤の順を以て決勝線に入る。三分五十五秒。第五回共に漕ぎぶり頗る達者也。白艇遂

に先頭す。三分五十秒。第六回オール不揃の傾あり。一着赤艇、四分十秒。第七回、時習寮南中北對寮レース也。これよりさき晝飯の宣言あるや、或は西に或は東に、或は銀波碎くる北海の渚にその空腹を犒ふに忙がしかりしが、晴天霹靂打ち轟く合圖の花火に倉皇歸り來れば既に健兒は對岸に立ちカーテン赤毛布を打ちふり意氣あたる可らず。殊に中寮健兒闘と青地に白く拔きたる五間の長旒は春風のもむにまかせて竿頭高く翻々たり。忽ち轟く號砲、聲援愈猛烈なり。忽ち見る白地金文字の超然旗は數人のジャイアンツに擁せられ疾風の如く驅け下る。三艇青を先んじて進む。赤應援厄氣、石油鑵をうつ事いよ〳〵猛烈なり。青の聲援得々その擁せる吹螺貝を嘯かす事ます〳〵激烈なり。白隊彌次歌は樂隊に合せ青の青の青蜻蛉蚊の脛衞門や委果さん……は頗る奮へりと雖も天運回らす可らず。遂に青先着、白三着となる。三分五十五秒。第八回、赤青努めしと雖も勝は遂に白艇の占むる所となる。四分十三秒。第九回、初め第二コースの白常に優先を示し青を壓しつゝ進む。衆人勝は既に白の手に在りと叫ばんとするや赤艇驀然奮進し來り二艇身の優を以て功を收めぬ。痛快!!!三分五十七秒。第十回、赤青相爭ひしも遂に赤の勝に歸す。三分五十秒。第十一回一中對七尾中レース也。昨春このレースはハウルの醜態を演じ、觀者をして失望せしめしが今日は果して如何。應援赤(一中)と叫び白(七尾)と呼ぶ。白の元氣は頗る盛にしてオールまた强烈なり。赤は之に反しオール淺くかつピッと緩なり。ヘビーに入るや白驀進して見事月桂冠を得ぬ。三分四十八秒。第十二回醫專校レース也。ヘビーに入るや白優勢を示し今や決勝線に入らんとして赤の掉尾のオール功を奏し半艇身の差を以てその勝となる。第十三回三部クラスレース也。赤(三年)白(二年)ハウルの醜を演ずる暇に青艇悠々として遙かに決勝線を過ぐ。第十四回二部クラスレース也。赤(三年)努めしと雖も及ばず。第三着に終り勝は青(一年)の手に歸す。三分四十七秒。第十五回、一部クラスレース也。また〳〵赤(三年)青(一年)ハウルの醜を演じ、勝は二年(白)の手に歸す。その實力に於て白優勢を示し居れりと雖もあたらこの競漕を一人舞臺に終らしめしは遺憾なり。壓迫、コースの奪取頗る可なり。然れども今回の如くクラスレースの醜を演せしはまた實に稀也。舵手たるものまさに顧る所なかる可らず。昨春クラスレースは悉く一年の勝に歸せしが本年に於ても既に優勢を示す。何等かその間に或る意味の蟠れるなきに非るか。第十六回來賓レース也。海國男兒の父はまさにかくの如くなるべし。第十七回職員レース也。ヘビーに於ける白青の爭は頗る猛烈なり。間一髮を以て白艇の勝を得しは目出たし。兩岸の拍手雷の如し。第十八回これなん各部チャンピョンレースなる。赤白青の應援旗既に兩岸にぞよめけり。これまで眠れりと見し岸邊の扁舟、忽ちめざましき活動にうつれり。旗幟相振り縱横に走れるその樣屋島の昔偲ばしむ。歡呼につゝまれ勇士徐にオールをとり色代してぞ戰場に向ふ。兩岸の狂喚天地を搖かし、海若恐をなして遠く北溟に潛む。あゝあがれりや健兒の意氣。

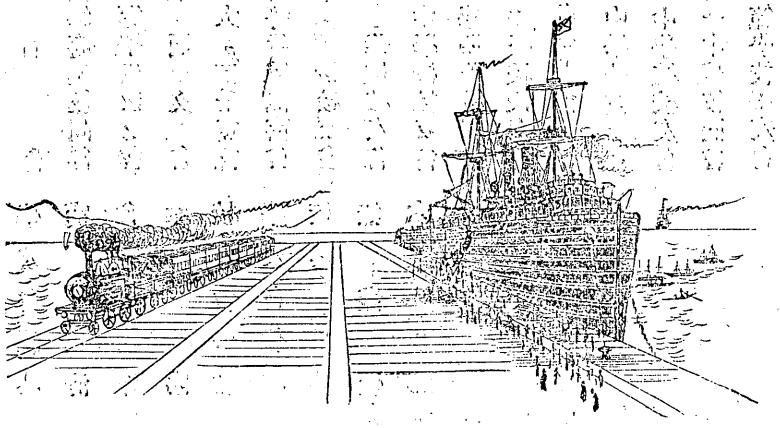
狂喚初めて靜まつて更に再び歡聲をこる。と見れば青空高く北溟の夕照を浴びて飜れるは二部の白旗。あゝ月桂の冠は遂に二部の手に歸したるか。あゝかの天涯を睨んで涙泫然、七生を誓ひし勇士の心胸、二部勢果して如何とか察せし。

予は競漕者に對しその元氣の實に旺盛なるを

視す。たゞその練習が俄作りたるの誹を免るゝや否やは一見何人も知了する所ならんのみ。而も舵手の怠慢は多くその誹を免れざる所、乞ふ三省せよ。殊に予の一言せんとするは校友の本會に對する冷淡無責任なる事實なり。男兒まさにこの機にあたりその強烈なる意氣の光を發揮すべし。然に閑々陋屋に蟄居し或は悠々市井を彷徨し以て一日を消す。彼等果して終生わが親愛なる競爭を傍視し亡國然として竹林の凉風に午睡を貪らんとするものなるか。然らば予敢て之が爲めに語らず。たゞ向上の兒、奮鬪の兒、汝は實に競爭を忘れざれ。汝の競爭に對する意氣はたゞ我がこの競漕會にその影をうつさん。誰かこの競漕會に於ける應援の聲は、他日汝の列すべき世界的實業的學術的政治的競爭場に於ける、聲援そのものならざるを知らんや。附記す、各部選手レースに於て白艇用意と同時にブイを放ち號砲に先ちオールを入れしといふ。一部三部代表(目擊せりといふ者も加はれり)相集まり、將來の弊を防がんため連署して委員長に該審判取消しを申請せり。然れども該申請書は審判神聖の言の下に却下せられたりと傳ふ。かくの如き事件は我が運動會未だ見ざる所、唯だ二三好事者の言として看過すべきに非ず。問ふ審判係は將來に向つて果して今回の事件を再炎せしむる事なきを確保し得るや否や。(かなだ)

寄贈雜誌

城北	四九	東京第四中學校友會	
校友會雜誌	一九	京北中學校校友會	
鯉城	一八	廣島中學校校友會	
一橋會雜誌	四九	東京高等商業一橋會	
水曜會誌	三	京都理工科大學同會	
養德	毎號	養德社	校友會雜誌
躬行會叢誌	四三	躬行會	學友會雜誌
學友會報	三六	山口高等商業校同會	商海
校友會雜誌	一八二 一八四 一八五	第一高等學校校友會	會報
同文會報告	一一一	東亞同文會	華陽
六條學報	八九 八〇	佛敎大學壬寅會	校友會雜誌
龍南會雜誌	一二九 一三〇	第五高等學校龍南會	學友會雜誌
校友會雜誌	二九	千葉中學校校友會	校友會誌
糜城文庫	二五	大垣中學校校友會	無盡燈
校友會雜誌	一〇	飯田中學校校友會	六合雜誌
矯々會雜誌	九六	福岡中學明善校同會	
校友會雜誌	二九	麻布中學校校友會	
ゴキソ	三	名古屋高等工業校友會	
校友會雜誌	二四	京華中學校校友會	
校友會雜誌	一〇	彦根中學校校友會	
校友會雜誌	三六	三重第一中學校同會	
學友會雜誌	二〇	石川師範學校學友會	
		石川工業學校校友會	一〇
		札幌中學校學友會	一九
		大坂高等商業校友會	二八
		東亞同文書院	八
		岐阜中學校華陽會	四六
		開成中學校校友會	四九
		有恒學舍學友會	一
		東京高等師範校同會	一八
		無盡燈社	毎號
		ゆにてりあん弘道會	毎號



投書心得

一投書は本會原稿用紙に限る

一長文と雖も全文を寄贈せざれは掲載せず

一雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし

一如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論し或は德義に背くものは一切掲載せず

明治四十二年六月二十五日印刷
明治四十二年六月二十七日發行

編輯兼發行者　吉村政行　石川縣金澤市早道町五十六番地
印刷者　生沼倍男　同縣同市穴水町二番丁廿九番地
印刷所　明治印刷株式會社　同縣同市高岡町九十番地
發行所　第四高等學校北辰會